

平榎龜田遺跡発掘調査報告

— 岐阜農地整備事業平榎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告 I —

2017年

平榎龜田遺跡発掘調査報告

— 県営農地整備事業平榎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告 I —

2017年

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

本書は、県営農地整備事業に先立ち、平成27年度に実施した平榎
亀田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

平榎亀田遺跡は富山市街地の東、神通川と常願寺川とによって形成された複合扇状地の末端部に位置し、東には常願寺川の堤防越しに立山連峰の雄大なパノラマが広がり、西には豊かな富山平野と、遠く二上山を望むことができます。

発掘調査の結果、古代の堅穴建物や井戸などがみつかり、人々が網目のように広がる常願寺川の旧河道の間に点在する微高地上などの安定した土地を選んで集落をつくり、生活していたことが明らかになりました。また、中世の遺構としては、戦国期にこの地にあったとされる平榎城との関連が注目される堀跡がみつかりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財團法人 富山県文化振興財團
埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所

例　　言

- 1 本書は富山県富山市平榎地内に所在する平榎亀田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県からの委託を受け、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。
- 調査期間 平成27（2015）年10月1日～12月3日
- 整理期間 平成28（2016）年5月25日～平成29（2017）年3月27日
- 3 調査に関する全ての資料、出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は市町村番号に遺跡名を続け、平榎亀田遺跡を「01H K」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 本書の編集は金三津道子が担当した。本文執筆は第Ⅲ章1を朝田亞紀子、その他を金三津が担当し、執筆分担は文末に記した。石材については明治大学黒耀石研究センター客員教授中村由克氏に鑑定を依頼した。自然科学分析については専門機関に委託し、その成果を収録した。
- 6 本書で使用している遺構の略号は以下のとおりである。
- S I：堅穴建物、S A：柱穴列、S D：溝、S E：井戸、S K：土坑、S P：柱穴、S X：その他
7 遺構番号は遺構の種類に関わらず連番とし、柱穴列には新たに番号を付した。
- 8 本書で示す座標は平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海拔高である。
- 9 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
- 遺構 堅穴建物・溝・井戸・土坑・柱穴：1/40
遺物 土器・陶器：1/3、土製品・木製品・石製品・金属製品：1/1、2/3、1/3
10 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 11 遺物は種類に関わらず連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。
- 12 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
②遺構の規模の（ ）内は現存長を表す。
③土器法量の（ ）内は復元長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。
④石製品法量の（ ）内は現存長を表す。
⑤重量はg単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）
高岡 徹、一般財団法人高樹会、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、
富山市教育委員会、富山市埋蔵文化財センター

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	2
3 整理作業の経過と方法	4
第Ⅱ章 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第Ⅲ章 遺構・遺物	9
1 概要	9
2 遺構	9
3 遺物	20
第Ⅳ章 自然科学分析	54
1 樹種同定	54
第Ⅴ章 総括	56
1 遺物の分布と集落変遷	56
2 堀S D527について	58

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査位置図・遺跡位置図	第14~24図	遺構実測図
第2図	調査区位置図	第25~30図	遺物実測図
第3図	地形と周辺遺跡	第31図	時期別遺物分布図
第4~13図	遺構全図	第32図	平櫻城関連遺構位置図

表目次

第1表	既往の調査一覧	第10表	土坑一覧
第2表	調査体制	第11表	井戸一覧
第3表	調査一覧	第12表	土製品一覧
第4表	基本層序	第13表	金属製品一覧
第5表	整理体制	第14表	木製品一覧
第6表	周辺遺跡一覧	第15表	石製品一覧
第7表	柱穴列一覧	第16表	土器・陶磁器一覧
第8表	堅穴建物一覧	第17表	平櫻鬼田遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧
第9表	溝一覧		

写真図版目次

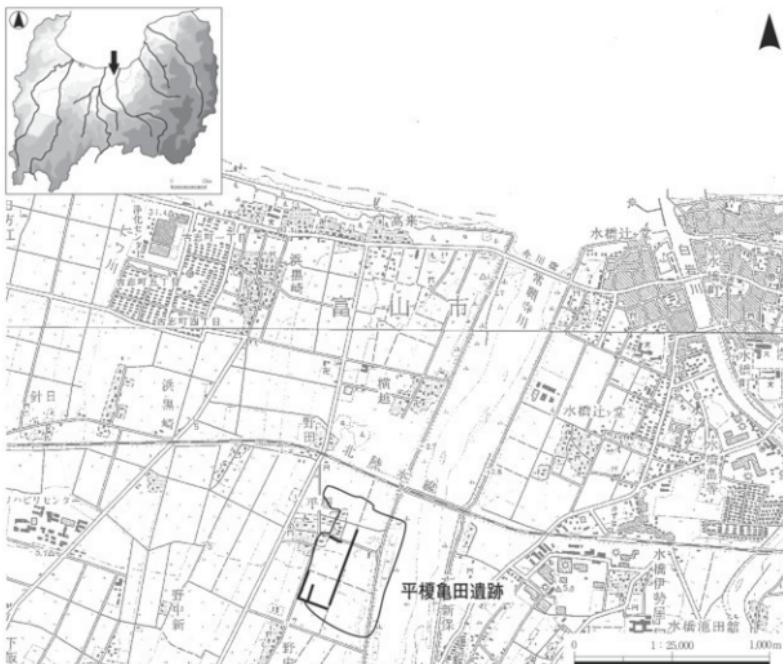
図版1	航空写真（1946・1961年撮影）	図版9	堅穴建物・井戸
図版2	航空写真（2007年撮影）	図版10	弥生土器・土師器
図版3	遺跡遠景	図版11	須恵器
図版4・5	遺跡全景	図版12	陶磁器
図版6	柱穴列	図版13	土製品・金属製品
図版7	遺跡全景・堀	図版14	木製品
図版8	溝	図版15	石製品

第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

富山市平榎地区において、平成27（2016）年度から31（2019）年度の5カ年にわたり、県営農地整備事業が計画された。事業計画地周辺では複数の遺跡が周知されており、富山市教育委員会（以下、市教委）により平成26（2014）年～平成27（2015）年1月にかけ、試掘調査が実施された。平成26年度中に、市教委から、平成23（2011）年11月富山県教育委員会通知の「埋蔵文化財の本発掘調査」に基づき、県営農地整備事業平榎地区について、富山市が事業主体となり実施することは困難であるため、県で対応して欲しいとの要望があり、富山県教育委員会（以下、県教委）と関係開発部局により、公益財團法人富山県文化振興財團（以下、財團）が受託する方向で検討がなされた。平成27年4月、市教委から試掘調査結果の報告がなされ、この結果を受けて、富山県農水部、富山県富山農林振興センター（以下、富山県）、県教委、市教委、財團が協議し、工事設計の見直しが計られた。同年6月、本調査対象範囲が確定し、財團は県営農地整備事業平榎地区における本発掘調査を受託することとなり、平成27年度に平榎龜田遺跡1680m²について本発掘調査を実施した。



第1図 平成27年度は場整備平榎地区埋蔵文化財発掘調査 遺跡位置図（1/25,000）

(2) 既往の調査

平榎亀田遺跡は、常願寺川左岸の平野部252,500m²にわたり古墳時代・古代などの遺物が広く散布している。遺跡周辺は、弥生時代から古代の遺跡が密集する地域であり、平榎亀田遺跡も周知の遺跡として所在が確認されていた。

県営農地整備事業に先立ち、平成26（2015）年度に富山市教育委員会による試掘調査が実施された。平成26年9月、対象面積が広大であるため、工事着手の早い第1工区及び休耕田で先行して試掘調査が実施され、隣接する浜黒崎野田・平榎遺跡を含む約220,000m²については、平成26年10月～平成27年1月末にかけて試掘調査が行われた。一連の試掘結果により、平成27年4月に平榎亀田遺跡・浜黒崎野田・平榎遺跡はそれぞれの遺跡範囲が変更され、横越水窪遺跡が新規追加となった。

第1表 既往の調査一覧

遺跡名	試掘調査				本調査			
	年度	調査主体	調査面積(m ²) (調査対象面積)	文献	年度	調査主体	調査面積(m ²)	文献
平榎亀田遺跡	H26	市教委	1,815 (165,230)	1	H27	財 団	1,680	2

文献

- 富山県埋蔵文化財センター 2015『富山県埋蔵文化財センター年報－平成26年度－』
- 公益財團法人富山県文化振興財團 2016『埋蔵文化財年報－平成27年度－』

2 発掘作業の経過と方法

(1) 調査の経過と方法

調査の作業工程及びその方法・内容は、平成16（2004）年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』に則って進めた。

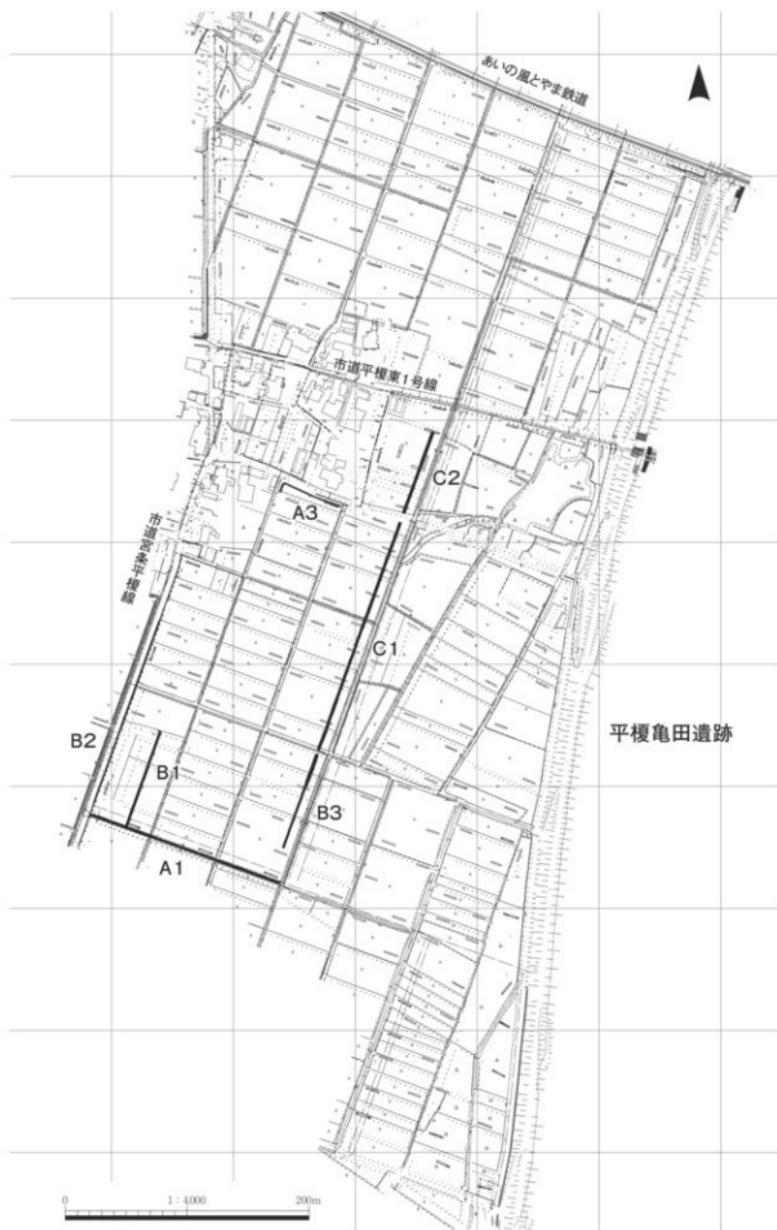
発掘調査の基準となるグリッドの座標は、国土座標（世界測地系：平面直角座標系第7系）を基に設定した。X81,900 Y10,100をX O Y Oの起点とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2m方眼を基本とし、各グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標で呼称した。発掘範囲は、X135～323・Y32～173である。但し、調査区は水路部分であり、最大幅28mのトレンチ状であるため、南北に長いB1・B2・B3・C1・C2地区は南端を、東西に長いA1・A3地区は西端をそれぞれ起点とし、起点からの距離を基準として、調査を実施した。

試掘調査結果を基に、表土や盛土の除去は、調査員立ち会いのもと工事請負業者が重機により行った。遺物包含層と遺構埋土はスコップや移植ごて等を用い、人力で掘削した。小規模な遺構については半裁し、大型の遺構については適宜アゼを設定して掘削し、埋土の状況を観察、記録した。

遺構の記録は、断面図を1/20の縮尺で実測し、遺構によっては、1/10の縮尺で遺物出土状況や平面図を作成した。各遺構の断面はデジタルカメラで撮影した。遺物出土状況や個別の遺構写真、プロック写真はプローニー判（6×7）カメラを、調査区全景写真については4×5カメラをそれぞれ併用した。また、調査区全域の遺構平面図には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を利用した。

第2表 調査体制

実施年度	調査事業担当					
	総括	所長	岸本 雅敏	調査総括	調査課長	鳥田美佐子
平成27年度 (2015)	総務	総務課長 主査	松尾 瓦 青山 晃	調査員	主査 主査 主任	田中 道子 金三津道子 朝田泰紀子



第2図 調査区位置図 (1/4,000)

第3表 調査一覧

遺跡	地区	期間	延べ日数	調査面積 (m ²)	担当者	検出遺物	出土遺物	
平成龜田遺跡	平成27年度	A 1	10月01日～11月06日	20日	390	田中 道子 柱穴列・土坑・溝 金三津道子 朝田幸紀子 青山晃	土坑・溝	弥生土器・土器部品・須恵器・珠 洲・葉口美濃・越中瀬豆・伊万里・豐津・土製品・木製品・石製品・金属製品
		A 3	11月24日～12月03日	7日	80		井戸・土坑・溝	
		B 1	10月27日～11月12日	11日	160		柱穴列・土坑・溝	
		B 2	10月01日～11月06日	17日	280		井戸・土坑・溝	
		B 3	11月02日～11月12日	7日	90		井戸・土坑・溝	
		C 1	11月05日～11月26日	14日	510		豊穴建物・井戸・土坑・溝	
		C 2	11月09日～12月03日	12日	170		豊穴建物・井戸・土坑・溝・層	

(2) 層序

基本層序は、I a 層：暗灰黄色粘質土・褐色粘質土(表土・耕作土)、I b 層：暗灰黄色粘土質シルト・黃灰色シルト(耕盤土・盛土)、I c 層：黒褐色粘土質シルト・黃灰色シルト(耕盤土・盛土)、II 層：黒褐色粘土・粘土質シルト(遺物包含層)、III 層：黄灰色粘土質シルト・シルト・黃褐色粗砂・シルト・灰色粘土(遺構検出面・地山)、IV 層：灰色シルト(地山)となる。

調査区全域は北東側の標高が若干低いが、ほぼ平坦な地形で、A 1 地区東半及び B 3～C 1 地区南半にかけては半湿地状を呈している。A 3・B 1・B 2・C 1 地区中央部・C 2 地区はⅢ層の砂気が強く硬く締まっており、これらの地区を中心に古代～中世の遺構を検出した。

第4表 基本層序

	A 1	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	
1.1 整地	2016/6/1	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト	2016/5/2	昭和色粘土質シルト
1.1.1 施工：新規整地	2016/4/1	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト	2016/5/2	昭和色粘土質シルト
1.1.2 施工：既存整地	2016/4/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト	2016/5/2	昭和色粘土質シルト
1.2 整地土	2016/2/2	昭和色粘土質シルト	2016/1/1	昭和色粘土質シルト	2016/2/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト
1.3 整地土	2016/2/2	昭和色粘土質シルト	2016/1/1	昭和色粘土質シルト	2016/2/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/2	昭和色粘土質シルト
1.4 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.5 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.6 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.7 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.8 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.9 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
1.10 整地土	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色粘土質シルト	2016/4/1	昭和色粘土質シルト
II 墓山	2016/1	昭和色粘土質シルト	2016/2	昭和色黄色シルト	2016/4	昭和色黄色シルト	2016/4	昭和色黄色シルト
								遺物検出用

3 整理作業の経過と方法

出土遺物は、埋蔵文化財調査事務所において洗浄・注記・仕分けを行った。土製品・木製品・石製品・金属製品についてはメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。調査概要については『埋蔵文化財年報』(平成27年度)として発刊している。

報告書作成に向けての室内整理作業は、平成28年5月に開始した。遺物実測、遺物写真撮影、遺物挿図及び図版作成、遺構の図版作成、自然科学分析、原稿執筆、編集及び印刷と校正を行った。遺物の洗浄・注記は平成27年度に埋蔵文化財調査事務所で室内整理作業員が行った。遺物の接合・実測は、調査員が行い、遺物実測図、遺構実測図、写真是各台帳を作成して整理し、パソコンコンピューターを使用してデータ入力を行った。遺物・遺構のデータは観察表として掲載している。遺構・遺物の挿図作成は調査員が行い、一部を派遣オペレーターがデジタルデータ化して印刷原稿とした。遺物の写真撮影は4×5判カメラを用いて調査員が行った。自然化学分析は、専門業者に委託し、結果報告を掲載した。

(金三津道子)

第5表 整理体制

実施年度	整理事業担当				
平成28年度 (2016)	総括	所長	岸本 雅敏	整理総括	調査課長 副主幹
	総務	総務課長 主査	松尾 互 青山 晃	担当	主査 主査
					島田美佐子 田中道子
					金三津道子 高柳由紀子

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

平榎亀田遺跡は、富山市街地の北東8kmほどの富山市平榎地区内に所在する。遺跡は、富山県のほぼ中央部を北流する常願寺川左岸の平野部に立地する。神通川と常願寺川により形成された複合扇状地末端の低地部にあたり、北方1.5~2kmには日本海が広がる。常願寺川は、日本屈指の暴れ川として知られ、度々氾濫により川筋を変えてきた。明治24(1891)年の大洪水を期に国から派遣された技術者ヨハネス・デ・レーケによって、東に大きく蛇行していた河道が、白岩川と分離され、現在のようにまっすぐ日本海に流れる形に改修された。遺跡は、現在では常願寺川左岸の川縁に位置するが、このデ・レーケ改修前の河道からはやや離れた位置にある。明治期の地図や1910年撮影の航空写真等をもとに、富山市教育委員会が2002年刊行の水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書で、常願寺川旧流路を復原しており、この図をもとに、国土地理院の土地条件図及び治水地形分類図から自然堤防・微高地を加筆したのが第3図1常願寺川旧河道復原図である。

平榎亀田遺跡一帯は、常願寺川左岸の扇状地末端部、氾濫平野にあたり、平榎亀田遺跡は標高4~6mを測る。遺跡は網目状に広がる常願寺川の旧河道の間に点在する微高地から現常願寺川左岸にかけて広がる。調査区は、遺跡西半にあたり、自然堤防状の微高地上に位置する。

2 歴史的環境

平榎亀田遺跡の位置する常願寺川扇状地末端地域では、遺跡の分布状況に大きく3つのまとまりがある。1つは、海岸部に古代を中心とする遺跡群である。2つめは、海岸からやや内陸に入ったあたりに縄文時代後~晩期、弥生時代に出現し、古代に最も発展しながら中世まで継続する遺跡群で、3つめは、さらに内陸に入り、古代、中世を中心とした遺跡群である。海岸に近い微高地上に出現した集落が、海岸部と内陸部とに展開したものと捉えられている。それぞれ時代ごとに概観していく。

縄文時代では、縄文時代前期後半の約5000~6000年前は、縄文海進期であり、海岸線が現在の等高線6mライン付近まで入り込み、海岸部に砂丘ができる、その背後には後背湿地が広がっていた。このため、旧石器~縄文時代中期までの遺跡はほとんど知られていない。神通川右岸の海岸砂丘部に晩期前半の「岩瀬天神式土器」の標識遺跡である岩瀬天神遺跡や、やや海岸から離れた微高地上に、後期~晩期の土器捨て場や堅果処理場が確認された浜黒崎野田・平榎遺跡、高島島浦遺跡などがある。

弥生時代~古墳時代は、海岸部の日方江遺跡や、海岸から離れた微高地上に浜黒崎野田・平榎遺跡、浜黒崎悪地遺跡、高島島浦遺跡、針原中町I遺跡、神通川右岸に千原崎遺跡などの集落が営まれる。やや内陸に入った豊田地区には、古墳時代前期の方墳で、一辻21~22m、高さ4mの規模を持つちょうどよう塚や、湿地の肩部に祭祀土器の大量廃棄が確認された豊田大塚・中吉原遺跡などがある。

古代では、海岸部に高来遺跡、浜黒崎町畑遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、やや内陸に入った野田・平榎遺跡、浜黒崎悪地遺跡、針原中町I遺跡、米田大覚遺跡、蓮町遺跡、農田大塚・中吉原遺跡など多数の遺跡がある。水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、改修後の常願寺川右岸河口付近に位置し、「延喜式」記載の越中八駅の1つ「水橋駅」の推定地とされ、神通川右岸1.5km付近に位置する米田大覚遺跡は、規

則的に配された掘立柱建物群や、帯飾りの石帶や硯。200点を超える墨書土器などが出土しており越中国新川郡衙（郡家）あるいは磐瀬駅の推定地とされている。豊田大塚・中吉原遺跡では人面墨書土器や人形・壺などが出土し律令祭祀を行っていたとみられる。神通川と常願寺川に挟まれた低地部には、これらの官衙的、祭祀的性格の遺跡が多くあり、古代新川郡の中心地域と考えられる。

中世では、海岸部に浜黒崎飯田遺跡、浜黒崎遺跡、日方江遺跡、大村遺跡、そうけ塚、精霊塚、やや内陸に入った辺りに横越水窪遺跡、水橋伊勢屋B遺跡、宮条南遺跡、針原中町I遺跡、宮成遺跡、宮町遺跡、小西北遺跡などが所在する。常願寺川左岸の海岸部から離れた一帯では、区画溝で区画され、掘立柱建物や井戸が検出された宮町遺跡などの中世集落が密集している。中世後半では、海岸部に日方江城、大村城、東岩瀬城、やや内陸に入って平権城、新庄城、堀と土塁を持ち、神保氏と関係の深い武士の居館跡と推定される小西北遺跡などの城館が築かれる。平権城は平権亀田遺跡周辺に北定されている。これらの城館は、海岸部を通る浜街道や内陸部の北陸街道沿いなどの交通の要衝に面しており、戦国期には軍事上の拠点となっている。

近世では、天正13（1585）年に前田利家が加賀・能登・越中三国の支配を初めて以来、明治初頭の廃藩置県まで約260年間に渡り前田家の支配下にある。平権亀田遺跡周辺は加賀藩領新川郡で、常願寺川と神通川に挟まれた海岸に面した平野部は広田組に属している。広田組の39の村々は、常願寺川・神通川両河川の運んだ土壤により生産力が高く、他組の村に比べて大規模な村が多いが、両河川による氾濫の被害に悩まされた地域でもある。「大鳶崩れ」と言われる、安政5（1858）年2月26日の飛越地震により発生した大鳶山・小鳶山の山体崩壊により常願寺川上流部が堰き止められ、その後の余震などで決壊して土石流となり、下流域の平野部は大きな被害を受けたが、遺跡周辺では、土石流が二手に分かれたため大きな被害は免れている。その後、明治24年の洪水を機に常願寺川の河川改修工事が行われたが、明治～昭和にかけても大雨の度に氾濫が繰り返され、常に常願寺川の水に悩まされてきた地域でもある。

（金三津道子）

参考文献

- 国土交通省北陸地方整備局・国土交通省国土地理院 2006『古地理で探る越中・加賀の変遷』
- 高岡 敏 2014 「戦国期における新庄城と武将の群像」『富山市考古資料館紀要』第33号 富山市考古資料館
- 武田健次郎 1998 「富山平野における道路群の展開」『富山考古学研究』創刊号 （財）富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 富山県 1983 『富山縣史』通史編IV 近世 下
- 富山県 1992 『10万分1 富山県地質図説明書』
- 富山県教育委員会 1980 『富山県歴史の道調査報告書 北陸街道』
- 富山市 1987 『富山市史』通史<上巻>
- 富山市教育委員会 1994 『富山市 浜黒崎悪地道路発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1995 『富山市 浜黒崎悪地道路：野中新長幅道路・野田・平権道路』
- 富山市教育委員会 1996 『富山市 野田・平権道路・野中新長幅道路・宮条南道路・高島島浦道路』
- 富山市教育委員会 1997 『富山市 宮条南道路・高島島浦道路・針原中町I道路・針原中町II道路』
- 富山市教育委員会 1998 『富山市 高島島浦道路：針原中町I道路・針原中町II道路』
- 富山市教育委員会 1998 『富山市 豊田大塚道路発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市 千原崎道路発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市 水橋荒町道路発掘調査概要 II』
- 富山市教育委員会 2000 『富山市 小鶴堆積発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2001 『富山市 千原崎道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002 『富山市 岩瀬天神道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002 『富山市 水橋荒町・辻ヶ堂道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2005 『富山市 水橋荒町・辻ヶ堂道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006 『富山市 米田大覚道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2010 『富山市 米田大覚道路発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2013 『富山市道路地図』埋蔵文化財包蔵地所在地地図
- 富山市教育委員会 2014 『富山市新庄城跡発掘調査概報』
- 深井甚三・米原 寛 2001 『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
- 藤井昭二ほか 2011 「常願寺川畠状地の形成と災害についての2、3の知見」『立山カルデラ移防博物館研究紀要』第12号 立山カルデラ移防博物館



第3図 地形と周辺遺跡 (1/60,000)

1. 常願寺川旧流路復原図 2. 周辺遺跡位置図

第6表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	48	201039 平桜龜田	平桜、横越	集落、城館、散布地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
2	42	201037 沢黒崎野田、平桜	沢黒崎、野田、横越、平桜	集落	縄文（前・中・後・晚）、弥生、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
3	1049	201658 横越水庭	横越	集落	中世
4	47	201038 野中新長畠	野中、平桜、沢黒崎	集落	縄文（後）、弥生、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世
5	44	201036 沢黒崎悪地	沢黒崎	集落	縄文（後・晚）、弥生（中）、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
6	46	201035 横越	横越、野田	集落	縄文（晚）、奈良、平安、中世、近世
7	43	201034 沢黒崎野田Ⅱ	野田、沢黒崎、横越	散布地	縄文（後・晚）、弥生、古墳（前）、古代
8	41	201032 沢黒崎飯田	沢黒崎	散布地	奈良、平安、中世、近世
9	40	201030 沢黒崎	沢黒崎	散布地	奈良、平安、中世
10	14	201031 沢黒崎町塙	沢黒崎	散布地	奈良、平安
11	45	201033 高来	高来、沢黒崎、野田	集落	縄文（晚）、奈良、平安、近世
12	56	201044 水橋荒町、辻ヶ堂	水橋荒町、水橋辻ヶ堂、川原町	集落、官衙	縄文（中～晚）、弥生、古墳（前・後）、白鳳、奈良、平安、中世、近世
13	61	201045 水橋高寺	水橋高寺、水橋辻ヶ堂	散布地	弥生、古墳、近世
14	63	201048 水橋水削	水橋水削	散布地	平安、近世
15	62	201047 水橋朝日町	水橋市江、水橋中村町、水橋辻町	散布地	弥生、奈良、平安、中世
16	15	201046 水橋東出町	水橋高月、水橋中村町、水橋町	散布地	奈良、平安
17	60	201049 水橋通田船屋	水橋通田船屋	散布地	奈良、平安、中世
18	59	201052 水橋通田船屋	水橋通田船屋、水橋伊勢屋、水橋中村、本橋町塙	散布地	縄文、古墳、奈良、平安、中世
19	57	201050 水橋伊勢屋	水橋伊勢屋	散布地	中世、近世
20	58	201051 水橋中村	水橋中村	散布地	奈良、平安
21	55	201043 宮条	宮条、町塙、野中	集落	縄文（後～晚）、弥生（中）、古墳（前）、平安、中世、近世
22	49	201040 高島鳥瀬	高島、野中新、宮条、封原中町	集落	縄文（晚）、弥生、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
23	51	201042 封原中町Ⅰ	封原中町、高島	集落	縄文（後）、弥生（中）、古墳、奈良、平安、中世、近世
24	50	201041 高島	高島	散布地	縄文（後・晚）、弥生、古墳、奈良、平安
25	52	201215 封原中町Ⅱ	封原中町	集落	縄文（晚）、弥生、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
26	361	201216 宮城	宮城	散布地	奈良、平安、中世、近世
27	54	201599 封原中町性寺	封原中町	散布地	中世、近世
28	12	201028 日方江Ⅱ	日方江	散布地	奈良、平安
29	10	201027 そうけ塙	日方江	塙	中世
30	11	201654 日方江	日方江、針日	集落	縄文（後・晚）、弥生、奈良、平安、中世
13	201026 日方江城跡	日方江	城址	中世	
31	39	201029 宝集寺	田嶋	散布地	平安、中世、近世
32	8	201003 大村	海岸通、田嶋	集落	弥生（後）、奈良、平安、中世、近世
9	201025 大村城跡	海岸通、田嶋	城址	中世	
33	7	201002 精靈塙	海岸通	塙	中世
34	5	201001 岩瀬天神	岩瀬古志町、岩瀬天神町、岩瀬元池町	集落	縄文（中～晚）、弥生（後）、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
35	6	201018 岩瀬天神Ⅱ	岩瀬通田町、岩瀬古志町	散布地	弥生
36	31	201019 森	森一丁目、森三丁目、森	散布地	縄文（晚）、奈良、平安、近世
37	32	201580 森B	森三丁目	散布地	奈良、平安、中世、近世
38	30	201017 千原塙	千原塙一丁目、上野新、西宮町、千原塙	集落	縄文（中～晚）、弥生（後）、古墳（前）、奈良、平安、中世、近世
39	33	201020 薗町	薗町四丁目、薗町五丁目	散布地	縄文、弥生、奈良、平安、近世
40	34	201021 米田大覚	米田町一～三丁目、米田すずかけ台一～丁目、薗町五丁目	集落	縄文、弥生、奈良、平安、中世、近世

第Ⅲ章 遺構・遺物

1 概要

平櫻龜田遺跡は、常願寺川左岸の平野部に立地する。遺跡は、あいの風鉄道の線路南側252.500mにわたって広がっており、調査区は遺跡西半に位置する。調査区全域は北東側に緩く傾斜するものの、ほぼ平坦な地形で、標高は4~6mを測る。調査区は、市道平櫻東1号線以南の水路部分でA1・A3・B1~B3・C1・C2の7地区を設定しており、遺構は堅穴建物2棟、柱穴列1列、井戸5基、土坑95基、堀1条、溝78条を検出している。遺物は、弥生時代~近現代の土器・陶磁器、土製品、金属製品、木製品、石製品があり、古代と近世以降のものが比較的まとまって出土している。

2 遺構

(1) 柱穴列

1号柱穴列 (SA1, 第14・20図, 図版6)

B1地区中央から南に位置する。10基の柱穴がN-20°-Eの方位にほぼ一直線上に並ぶ。古代~中世の掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。柱間距離を基にして、2.30~2.51mのS P114・117・120からなる2間の柱穴列が分離できる。最北のS P126は柱穴列の直線上に位置するためSA1に含めたが、最も近いS P114との距離が3.50mであるため、これらとは別にした方がいいかもしれない。残りの柱穴6基は5間を構成するが、このうちS P116・121の柱間距離は3.62mと広く、S P122・124・125の柱間距離は3.02~3.22m、S P125・127の柱間距離は2.42mと狭くなる。これらが1棟の建物であるのか、2棟に分かれるのかは調査区の幅が狭いため確定しがたい。柱穴の平面形は円形が多いが、S P125は方形に近い形をとるようである。S P117・120・122は検出面近くが崩れたりシミ状の搅乱があるなどしてやや広がるが、本来はどの柱穴も直径0.30~0.40m前後の規模であったと思われる。深さはS P126のみ浅く0.15m、他は0.23~0.42mを測る。出土遺物はS P124の土師器椀体部片、S P125の土師器椀口縁部片、S P127の須恵器杯体部片(37)がある。

(2) 堅穴建物

423号堅穴建物 (SI423, 第15図, 図版9)

C1地区中央北寄りに位置する。SD416の掘削中に南部の底面において確認した遺構で、埋土の違いからSD416とは別遺構と判断した。西端ではSE417と新旧の切り合い関係があり、SE417より新しい。大半が調査区外にかかるため、西の一辺を検出する形となった。長さ3.66m、深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土と黒色粘土、地山のにぶい黄色粘土質シルトのブロック状混土である。焼土や炭化物層、貼床等はいずれも認められない。柱穴の痕跡も残っていないかった。出土遺物はない。

515号堅穴建物 (SI515, 第15図, 図版9)

C2地区中央やや北寄りに位置する。SD502の掘削中に底面において確認した遺構で、埋土の違いからSD502とは別遺構と判断したものである。西側は調査区外にかかる。長さ2.28m、深さ0.18mを測る。埋土は黒色粘土を基調とする。底面には地山の黄褐色シルトが多く混じる黄灰色粘土が薄く堆積しており、貼床の痕跡と考えられる。貼床はSI515の中央部を中心とするほぼ全域に薄く残る。

焼土や炭化物層は認められなかったが、炭化材の小片が埋土中から出土した。柱穴の痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器壺胴部片、須恵器杯底部片（17）がある。

(3) 堀

527号堀（S D527、第22図、図版7）

C 2 地区中央南寄りに位置し、東西方向に延びる。南側と北側に2条の堀が重複しており、北側堀が南側堀よりも新しい時期のものである。南側堀は検出面からの深さが0.52mを測り、底面はほぼ平坦であるため、箱堀と思われる。北側堀は断面形がV字状となるため薬研堀と考えられる。壁面の一部が崩落したため完掘はしていないが、北側堀の検出面からの深さは、最深部で1.20m前後を測ることを確認した。調査区西壁の土層堆積をみると、南側堀の埋土には、地山であるⅢ層を基調とする土層（第22図9断面の土層注記1・4）や北側堀の最深部付近の地山であるⅣ層を基調とする土層（第22図9断面の土層注記3・8）があり、北側堀を掘削した際の排出土を南側堀内に堆積させた可能性がある。北側堀の埋土はしまりのやや弱い黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器小片、須恵器横瓶胴部片（50）、唐津鉢口縁部片（110）がある。土師器、須恵器は周辺からの流れ込みと思われる。唐津は北側堀の埋め戻しに伴うものか。

なお平成26年度に富山市教育委員会が実施した試掘調査においても薬研堀が検出されており、S D 527の北側堀に繋がる可能性が高い。

(4) 溝

2号溝（S D 2、第18図）

A 1 地区西端に位置し、南西から北東へ直線的に延びる。調査区内の平面では他の遺構と重複はないが、調査区北壁において東のS D 3との間に新旧の切り合いがあり、S D 3より古いことを確認した。S D 2・3ともI c層直下から切り込んでおり、近世～近代の遺構と思われる。幅1.80m、深さ0.56mを測る。埋土上層は黒褐色粘土質シルト、下層はオリーブ黑色粘土を基調とする。S D 3と同様に、ほ場整備以前の農業用水路の可能性が高い。出土遺物は須恵器杯底部片（28）があるが、周辺からの流れ込みであろう。

3号溝（S D 3、第18図）

A 1 地区西端に位置する。全体に南西から北東へ直線的に延びるが、東の浅い部分にはやや方向の違う流路がある。調査区内の平面では他の遺構と重複はないが、調査区北壁においてS D 2との間に新旧の切り合いがあり、S D 2より新しいことを確認した。S D 2・3ともI c層直下から切り込んでおり、近世～近代の遺構と思われる。幅4.40m、深さ0.55mを測る。埋土上層は黒褐色粘土、中層は細砂が帶状に混じる黒褐色砂質シルトや灰色砂質土、下層は灰色粗砂を基調とする。東の浅い部分の埋土は暗灰黄色・灰色粗砂を基調とする。S D 2と同様に、ほ場整備以前の農業用水路である可能性が高い。出土遺物は須恵器の杯体部片・杯底部片・壺胴部片（54）があるが、流れ込みであろう。

11号溝（S D 11、第20図）

A 1 地区西からB 1 地区南にかけて広がる。最大幅6.30mを測る不整形な溝であるが、本来は南から北へ延びる幅0.80m程度の溝であったと思われる。深さは深いところで0.25mを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とし、浅く広がる範囲では黒色粘土質シルトを基調とする。II層直下から地山を切り込んでおり、古代～中世の遺構と思われる。出土遺物はない。

13号溝（S D 13、第20図）

A 1 地区西に位置する。調査区北壁で、西のS D 12と東のS D 14との間に新旧の切り合いがあり、

S D12・14より新しいことを確認した。I c層直下から切り込んでおり、近世～近代の遺構と思われる。深さ0.08mを測る。A 1 地区にわずかにかかる形であるため平面形は不明であるが、浅い落ち込み状の遺構であるのかもしれない。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、にぶい黄褐色粗砂が混じる。S D14の東側に南東から北西へ向かう溝状の落ち込みがあり、S D13とつながるようにもみえるが、この部分の埋土はS D14と同一であり、特ににぶい黄褐色粗砂の混入で区別できたため、S D14の一部と判断した。出土遺物はない。

14号溝（S D14、第20図）

A 1 地区西に位置し、南西から北東へ直線的に延びる。東側に南東から北西へ向かう溝状の落ち込みがあるが、埋土が同一であったため一連の遺構とした。幅1.22m、深さ0.14mを測る。南西から北東へ延びる部分では溝中央がやや高くなっている、不安定ながらも流路が2条あったようである。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。調査区北壁においてI c層直下からII層を切り込むことを確認しており、近世～近代の遺構と思われる。出土遺物はない。

19号溝（S D19、第20図）

A 1 地区中央西寄りに位置し、南西から北東へ延びる。調査区北壁においてII層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と思われる。幅0.41m、深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

101号溝（S D101、第20図）

B 1 地区北に位置する。東西方向へ延びるが、南西角が一段深くなり、北は浅く広がる。調査区内の平面では他の遺構と重複はないが、調査区西壁において北のS K102との間に新旧の切り合いがあり、S K102より新しいことを確認した。幅2.45m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は土師器壺胴部片がある。

103号溝（S D103、第20図）

B 1 地区北に位置し、北東から南西へ延びる。調査区西壁でI c層直下からII層および地山を切り込むことを確認しており、近世～近代の遺構と思われる。幅0.30m、深さ0.23mを測る。埋土は黒色粘土や黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器壺胴部片があるが、流れ込みであろう。

107号溝（S D107、第20図）

B 1 地区中央北寄りに位置し、西から東へ延びる。調査区西壁でI c層直下からII層および地山を切り込むことを確認しており、近世～近代の遺構と思われる。幅0.96m、深さ0.35mを測る。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物は土師器の椀口縁部片・椀体部片・壺胴部片がある。

109号溝（S D109、第21図）

B 1 地区中央に位置し、西から東へ延びる。幅5.20m、深さ0.22mを測る浅い落ち込み状であるが、北部には幅約30cmの溝状の凹みが東西方向に延びる。この凹みは北の搅乱溝と方向が同じであることから、近世～近代の遺構である可能性がある。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は土師器椀口縁部片（61）・椀体部片・壺口縁部片（72）がある。

110号溝（S D110、第20図）

B 1 地区中央に位置し、S D111と並行して南東から北西に延びる。S D111と同様の古代～中世の遺構である可能性がある。幅0.30m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器椀体部片がある。

111号溝（S D111、第20図）

B 1 地区中央に位置し、S D110と並行して南東から北西へ延びる。南東端でS D112と新旧の切り合い関係があり、S D112より古い。調査区西壁においてⅡ層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と思われる。幅0.39m、深さ0.06mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

112号溝（S D112、第14図）

B 1 地区中央に位置し、西から東へ延びる。幅5.90m、深さ0.37mを測る浅い落ち込み状であるが、南部には幅約0.90mの溝状の凹みがあり、S D113と並行して北東から南北方向に延びる。浅い落ち込み状の部分はS D113・S A1-S P126と新旧の切り合い関係があり、S D113より古く、S P126より新しい。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は土師器椀体部片・椀底部片、須恵器杯底部片(29)・壺胴部片・甕胴部片、炭化材がある。

115号溝（S D115、第21図）

B 1 地区中央南寄りに位置し、北東から南西へ延びる。S A1-S P116と新旧の切り合い関係があり、S P116より新しい。幅0.82m、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

123号溝（S D123、第21図）

B 1 地区南に位置し、北東から南西へ延びる。南西端でS A1-S P124と新旧の切り合い関係があり、S P124より古い。幅0.56m、深さ0.07mを測る。埋土は暗灰黄色粘土を基調とする。出土遺物はない。

130号溝（S D130、第21図）

B 1 地区南に位置し、西から東へ延びる。調査区西壁においてⅡ層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と思われる。幅1.54m、深さ0.05mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は須恵器壺胴部片がある。

201号溝（S D201、第18・19図、図版8）

B 2 地区中央北寄りに位置し、南東から北東へ弧を描くように延びる。調査区東壁において、I a層直下からI b・Ⅱ層および地山を切り込むことを確認しており、近現代の遺構と思われる。幅1.10m、深さ0.41mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、灰オリーブ色粘土質シルトが大きなブロックで混入あるいはこれと互層をなすが、下層は腐食した木や炭化物が混じる黒褐色粘土が堆積する。調査区東壁にかかる断面（第18図2・3断面）においては、暗オリーブ褐色粘土質土や暗灰黄色シルトなどの堆積もあり、数回の流路の変遷がみられる。出土遺物は多く、弥生土器甕（2・6）、高杯（10）、土師器椀体部片・甕胴部片、須恵器杯体部片・壺胴部片（44）・甕胴部片・双耳瓶胴部片（46）、伊万里杯（126）、人形（135）、近世陶器（112）、木製品（146・147・149）、砥石（157）、銅錢（145）がある。木製品は、板材や桶などがある。なお、板材は1断面付近の西岸からまとまって出土しており、これらは板材を丸木杭で止めた護岸施設に転用された可能性がある。

202号溝（S D202、第23図）

B 2 地区中央北寄り、S D201の南に位置し、南から北に延びる。調査区東壁において、I b層直下からI c層と地山を切り込むことを確認しており、近現代の遺構と思われる。幅1.10m、深さ0.38mを測る。埋土は黒色や黒褐色の砂質土、砂質シルトを基調とし、褐灰色細砂や黄褐色粗砂が帶状に混入するもので、下層には黒色粘土質シルトが堆積する。出土遺物は多く、土師器碗小片多数・皿（67）・

壺胴部片多数、須恵器杯蓋部片・杯口縁部片・杯体部片（20）・壺胴部片・壺口縁部片（52）・壺胴部片・双耳瓶胴部片（47）、越中瀬戸皿小片（98）、唐津皿（132）・椀体部片・瓶胴部片、磨製石斧（152）などがある。

215号溝（S D215、第21図）

B2地区北に位置する。調査区東壁において、Ib層直下からII層と地山を切り込むことを確認しており、近世以降の遺構と思われる。調査区内では幅2.14mを測る溝であるが、調査区東壁をみると更に浅く北へ広がっており、幅約5.4mを測ることがわかる。深さは0.10mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトや粘質土を基調とし、南部の下層には腐食した木が混じる。北から緩やかに落ち込む南部域は、湿地のような環境にあったことがうかがえる。出土遺物はない。

223号溝（S D223、第21図）

B2地区中央北寄りに位置する。南から北へ延び、幅0.54mを測る。深さは0.05mと浅い。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器椀胴部片・壺胴部片、炭化材がある。

251号溝（S D251、第21図、図版8）

B2地区南に位置し、南西から北東へ延びる。調査区東壁においてII層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と思われる。幅1.04m、深さ0.60mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土上層は黒色・黒褐色粘土質シルト、下層は黒色粘土を基調とする。出土遺物は弥生土器高杯脚部片（88）・壺胴部片、土師器鉢口縁部片（65）・壺胴部片がある。

252号溝（S D252、第21図）

B2地区南に位置し、西から東へ延びる。調査区東壁においてII層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と思われる。幅0.82m、深さ0.05mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器椀口縁部片がある。

302号溝（S D302）

B3地区中央北寄りに位置する。幅3.05mを測る東西方向の緩やかな溝と考えたが、検査面の土質が締まりの弱い粘土であったため、遺構検出は困難を極めた。湿地帯に残る染み状のものであるかもしれない。深さ0.10mを測る。埋土はS D301と同様のオリーブ黒色粘土を基調としており、近世以降の遺構と思われる。出土遺物はない。

407号溝（S D407、第21図）

C1地区北、S X401とS X402の間に位置し、東西方向へ延びる。幅1.10m、深さ0.13mを測る。埋土は黒色粘土を基調とし、地山がブロック状に混じる。出土遺物は鉄滓（143）がある。

410号溝（S D410、第21図）

C1地区北の中央寄りに位置する、逆T字状の溝である。南東から北西へ、また南西から北東へ延びる。合流する部分で新旧の切り合い関係を確認するための畦を設定したが、切り合いは認められなかった。よって2本の溝は、南西から北東へ延びる溝の方が新しいか、もしくは同時期のものと考えられる。埋土は黒色粘土の単層で同一であるため、同時期の溝である可能性が高い。幅0.70m、深さ0.09mを測る。出土遺物は珠洲壺胴部片がある。

418号溝（S D418、第21図）

C1地区中央北寄りに位置し、南西から北東へ延びる。幅0.66m、深さ0.05mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。なおS D418南側の検査面に植物の株や根の痕跡が多く残っており、このうちのひとつから馬か牛の骨が出土した。

424号溝（S D424）

C 1 地区北の中央寄りに位置し、西から東へ延びる。幅3.82m、深さ0.10mを測る。南部はS X408と新旧の切り合い関係があり、S X408より新しい。近年の地図に「素掘り溝」との記載があり、調査区北東にある池まで延びていたとみられ、現代の溝と考えられる。埋土は黄灰色粘土を基調とするが、酸化鉄の沈着のため一部黄褐色を呈する。出土遺物はない。

501号溝（S D501、第21図）

C 2 地区中央から北にかけて位置する、全長約18mの溝である。南西から北東へ延びるが、緩やかに北に進路を変えて、調査区外に抜ける。S D518と重複する範囲では、検出面である地山が軟弱な粗砂に変化した上に著しい湧水があったため、S D501の検出が一部不明瞭となったが、調査区西壁を精査したところ、S D501と同一の土層を確認したため、これに繋がり北へ抜けると解釈した。また調査区西壁において、I b 層直下から I c 層や S D518・519を切り込むことを確認しており、近現代の造構と思われる。S X502と同様に地山のⅢ層を人為的に掘り込んでつくられており、S X502・528との境が筋状に掘り残されて小高く残る。幅0.28m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、南半では地山の黄褐色シルトがブロック状に混じる。調査区西壁で確認した上層には褐灰色砂質土や黒色粘土が堆積するが、どちらにも地山類似土の帶状混入があり、水流の影響がみられる。出土遺物は土師器小片、近世磁器椀口縁部片がある。

510号溝（S D510、第22図）

C 2 地区中央南寄りに位置し、北西から南東へ延びる。重複するS X502に大部分が削平されており、S X502底面においては浅く残る痕跡を検出するにとどまった。S X502・503間の小高く残った範囲で計測した幅0.57m、深さ0.16mである。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は種子1点、玉韁剥片（153）がある。

513号溝（S D513、第22図）

C 2 地区北に位置し、南西から北東へ延びる。幅0.53m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は伊万里椀体部片がある。

518号溝（S D518、第21図、図版8）

C 2 地区北に位置し、西から東へ延びる。S D501と新旧の切り合い関係があり、S D501より古い。調査区西壁において、I c 層直下から地山を切り込むことを確認した。珠洲が出土していることから、中世～近代の溝と考えられる。幅1.34m、深さ0.23mを測る。埋土は黒色砂質土を基調とする。出土遺物は珠洲壺胴部片（85）がある。

519号溝（S D519、第21図、図版8）

C 2 地区北、S D518の北に位置し、西から東へ延びる。S D501と新旧の切り合い関係があり、S D501より古い。調査区西壁をみると、少なくとも3回、掘り直されていることがわかる（第21図16断面）。最古段階は土層8の黒色粘土質シルトを基調とする溝で、幅約1.60mを測り、隣接するS D518・520と検出面を同じくする。時期は中世と考えられる。次段階は土層7の黒褐色砂質シルトを基調とする溝で、前段階の中世の溝と重複する位置に掘る。南から延びるS D501に南部を切られるため正確な幅は不明だが、前段階とはほぼ同規模と思われる。時期は近現代であろう。最終段階は土層5・6の灰白色・黄褐色シルトを基調とする溝で、幅約1.20mと狭くなっている。耕盤と同様の土で埋め戻されており、ほ場整備以前の溝と考えられる。いずれの溝からも遺物は出土していない。

524号溝（S D524、第22図）

C 2 地区南、S D523の南に位置し、西から東へ延びる。調査区西壁において、I c 層直下から地山を切り込むことを確認した。出土遺物に土師器と伊万里があることから、近世～近代の遺構と考えられる。幅1.41m、深さ0.25mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器小片、伊万里体部小片がある。

525号溝（S D525、第22図）

C 2 地区南、S D524の南に位置し、南西から北東へ延びる。調査区西壁において S D526を切り込んでいるが、S D526西端部の埋土は東部とは異なる暗灰黄色粗砂となっており、S D526とは別遺構である可能性がある。幅1.00m、深さ0.27mを測る。埋土上層は黒色粘土質シルトや褐灰色粘土、下層は灰黄褐色粗砂を基調とする。この灰黄褐色粗砂層から多くの遺物が出土した。出土遺物は弥生土器甕口縁部片（3）、土師器甕口縁部ほか小片多数、須恵器杯口縁部片がある。

526号溝（S D526、第22図）

C 2 地区南、S D525の南に位置し、西から東へ延びる。幅0.69m、深さ0.08mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。西端で一段深くなった部分では深さ0.26mを測るが、この部分の埋土は東部とは異なる暗灰黄色粗砂となっており、S D526とは別遺構である可能性がある。出土遺物は土師器小片がある。

604号溝（S D604、第22図）

A 3 地区西に位置し、南西から北東へ延びる。幅1.63m、深さ0.24mを測る。埋土上層は黒色粘土質シルト、下層は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は、土師器小片、越中瀬戸甕体部片・鉢体部片、伊万里皿底部片（130）、唐津甕体部片・すり鉢体部片がある。

606号溝（S D606、第22図）

A 3 地区西、S D604の東に位置し、南から北へ延びる。調査区南壁で I b 層直下から I c 層を切り込むことを確認しており、近現代の遺構と思われる。平面では S K607との間に新旧の切り合い関係はないが、調査区南壁では切り合いが確認でき、S K607よりも新しい。幅0.52m、深さ0.17mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

621号溝（S D621、第22図）

A 3 地区東、S X619の東に位置する。南に隣接する S D622と並行に、西から東へ向かって緩やかな弧を描く。南肩のみ検出した。幅0.52m、深さ0.17mを測る。埋土は黒色粘土を基調としており、S D622と同様に古代～中世の遺構と考えられる。出土遺物は土師器甕胴部片がある。

622号溝（S D622、第22・23図）

A 3 地区東、S X619の東に位置する。北に隣接する S D621と並行に、西から東へ向かい緩やかに曲がりながら延びる。幅0.77m、深さ0.11mを測る。調査区南壁で II 層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と考えられる。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物はない。

(5) 井 戸**222号井戸（S E222、第17図、図版9）**

B 2 地区北端に位置する。西側が調査区外にかかるため、東半のみ検出した。調査終了後に調査区西壁にかかる部分を完掘し、掘方と平面形を確認した。平面形は円形で、直径0.66～0.72mを測る。深く垂直に掘り込まれており、深さは1.01mを測る。埋土上層は黒色粘土、下層は黒色粘土質シルトを基調とする。地山の黄褐色砂質シルトが硬質で粒子の細かい土質であるため、調査期間中は比較的澄

んだ湧水が常に溜まる状態であった。出土遺物は弥生土器壺胴部片・壺底部片(7)、土師器壺胴部片がある。

417号井戸 (S E 417, 第15図, 図版9)

C 1 地区中央北寄りに位置する。S D 416・S I 423の掘削中に南部の底面において確認した井戸である。S I 423と新旧の切り合い関係があり、S I 423より古い。平面形は円形で、直径1.16~1.23m、深さ0.48mを測る。調査期間中は湧水が著しく、常に縁まで水が溜まつた状態であった。また地山のにぶい黄色粘土質シルトが脆弱で、掘削直後に壁面が崩落してしまう状況であり、掘削は非常に困難であった。埋土は黒色粘土を基調とするもので、東西両側の掘方においては、黒色粘土とにぶい黄色シルト、炭の層が互層をなしており、井戸の裏込めと考えられる。出土遺物はない。

508号井戸 (S E 508, 第16図, 図版9)

C 2 地区中央北寄りに位置する。平面形はやや角のある楕円形で、長径1.23m、短径0.87m、深さ0.62mを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とする。は場整備以前の水田区画と考えられるS X 502と埋土が同じであるため、同時期のものと考えられる。底部近くから那大の白い石英質の玉石(163)が出土した。石が混じる埋土ではなく他に土器等も出土していないことから、井戸を埋め戻す際に意図的に入れたものと思われる。他の土器等の出土遺物はない。

521号井戸 (S E 521, 第16図, 図版9)

C 2 地区北端に位置する。平面形は不整形であるが、地山が脆い粗砂であるため、本来楕円形であった造構が崩れたものと思われる。長さ1.58m、幅1.17m、深さ0.35mを測る。埋土上層は黒褐色砂質土、下層は黒色粘土質土を基調とする。湧水が著しく、また地山の脆さもあって掘削中に壁面が崩落してしまう状況であったため、深さが正確でないおそれがある。規模等から、井戸である可能性が高いと考える。調査期間中は、常に縁まで湧水が溜まる状態であった。出土遺物は、須恵器壺胴部片、越中瀬戸鉢口縁部片(107)、砥石(158)がある。

605号井戸 (S E 605, 第16図, 図版9)

A 3 地区西、S D 604の東に位置する。北側が調査区外にかかるため、南半を検出した。平面形は楕円形と思われ、長さ1.01m、深さ0.57mを測る。埋土は黒色・黒褐色粘土質シルトを基調とし、地山がブロック状に混じる。周辺の他の造構よりも深さがあり、またS E 508には規模や地山への掘り込み方に共通するところが多く、井戸と考えた。出土遺物はない。

(6) 土 坑

1号土坑 (SK 1, 第17図)

A 1 地区西端に位置する。平面形は楕円形で、長径0.92m、短径0.54m、深さ0.09mを測る。埋土は黄褐色粘土質シルトを基調とするが、黄褐色粗砂の帶状の混入が認められ、水流の影響で埋土が流れ込み堆積したと考えられる。出土遺物は土師器壺胴部ほか小片多数、須恵器杯蓋部片(33・38)・杯体部片がある。

102号土坑 (SK 102, 第17図)

B 1 地区北に位置する。西側が調査区外にかかるため、東半のみ検出した。長さ0.77m、深さ0.11mを測る。調査区西壁において南のS D 101との間に新旧の切り合いがあり、S D 101より古いことを確認した。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物は須恵器壺胴部片がある。

211号土坑 (SK 211, 第17図)

B 2 地区北、S D 215の南に位置する。平面形は円形で、長径0.23m、短径0.19m、深さ0.10mを測

る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器椀底部片がある。

227号土坑（S K227、第17図）

B 2 地区中央北寄り、S D202の南に位置する。西側が調査区外にかかるため、東半のみ検出した。平面形は楕円形と思われ、長さ0.62m、深さ0.03mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器小片がある。

231号土坑（S K231、第17図）

B 2 地区中央北寄り、S D202の南に位置する。東側の一部が調査区外にかかる。平面形は不整形で、長さ0.54m、深さ0.06mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。南に隣接する S K233との切り合いは不明瞭で、どちらの埋土にも地山のマーブル状の混入が認められることから、浅い窪地に堆積したものである可能性が高い。出土遺物は土師器椀体部片がある。

233号土坑（S K233、第17図）

B 2 地区中央北寄り、S D202の南に位置する。東側の一部が調査区外にかかる。平面形は不整形で、長さ1.31m、深さ0.06mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。北に隣接する S K231との切り合いは不明瞭で、どちらの埋土にも地山のマーブル状の混入が認められることから、浅い窪地に堆積したものである可能性が高い。出土遺物は土師器椀体部片がある。

406号土坑（S K406、第17図）

C 1 地区北、S X401の北に位置する。東側が調査区外にかかるため、西側のみ検出した。平面形は不整形で、長さ1.60m、幅1.27m、深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色粘土。出土遺物はない。

413号土坑（S K413、第17図）

C 1 地区中央北寄り、S D415の北に位置する。平面形は円形で、長径0.93m、短径0.88m、深さ0.16mを測る。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物はない。

505号土坑（S K505、第22図）

C 2 地区中央南寄りに位置する。北部で S D506と新旧の切り合い関係があり、S D506より古い。平面形は半円形で、長さ0.75m、幅0.68m、深さ0.09mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は須恵器杯蓋体部片（40）がある。

512号土坑（S K512、第16図）

C 2 地区中央北寄りに位置する。東部は調査区外にかかり、西部は S D501と新旧の切り合い関係があり、S D501に切られる。平面形は楕円形と思われ、長径1.60m、短径1.46m、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は唐津椀体部片がある。

601号土坑（S K601、第16図）

A 3 地区南西端に位置する。平面形は不整形で、長さ2.10m、幅1.54m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は越中瀬戸椀口縁部片（105）、近世陶器小片、伊万里皿底部片・椀口縁部片（122）・椀体部片がある。

603号土坑（S K603、第16図）

A 3 地区西角に位置する。北側が調査区外にかかるため南から西の一部を検出した。平面形は楕円形と思われ、長さ1.50m以上を測る。深さは0.42mを測る。断面をみると東西に大きく新旧の切り合いが確認でき、2基の土坑が重複したものである可能性がある。埋土上層は黒色粘土質シルト、下層は褐灰色シルトや黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

607号土坑（S K607、第16図）

A 3 地区西、S D606の西に位置する。北側が調査区外にかかるため、南半のみ検出した。平面では S D606との間に新旧の切り合い関係はないが、調査区南壁では切り合いが確認でき、S D606より古い。平面形は楕円形で、長径0.54m、短径0.44m、深さ0.22mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

(7) その他**401号落ち込み（S X401、第23図）**

C 1 地区北に位置し、東西方向へ延びる。幅11.50m、深さ0.20mを測る。ほ場整備以前の水田区画の可能性がある。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は、弥生土器壺底部片、土師器小片、須恵器杯底部片、珠洲壺胴部片（83）、近世陶器小片がある。

402号落ち込み（S X402、第24図）

C 1 地区北、S X401の南に位置し、東西方向へ延びる。幅6.50m、深さ0.17mを測る。S X401と同様に、ほ場整備以前の水田区画の可能性がある。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物は土師器碗体部片ほか小片、珠洲鉢口縁部片（87）、砥石（161）がある。

405号落ち込み（S X405）

C 1 地区北、S X401の北に位置し、東西方向へ延びる。幅2.72m、深さ0.06mを測る。南肩のラインはS X401と同方向に延び、北肩のラインはS X401南にある搅乱や暗渠と同方向である。ほ場整備以前の水田区画であるか、さらに新しい時期のものである可能性がある。埋土は黒色あるいは黒褐色粘土を基調とする。出土遺物はない。

408号落ち込み（S X408）

C 1 地区北の中央寄りに位置し、東西方向に広がる。幅は、西端では6.14m、東端では2.52mを測り、方形か長方形の区画の一部と考えられる。S X401・402と同様に、ほ場整備以前の水田区画であろう。北部はS D424と新旧の切り合い関係があり、S D424より古い。深さは0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物は土師器小片、須恵器壺胴部片、炭化材がある。

409号落ち込み（S X409）

C 1 地区北の中央寄り、S X408の南に位置する。方形か長方形の区画の一部と考えられ、角の一部を検出した形となった。S X401・402・408と同様に、ほ場整備以前の水田区画であろう。最大幅3.30m×2.90m、深さ0.11mを測る。埋土は黒色粘土を基調とする。出土遺物は中世土師器皿底部片（77）ほか小片、珠洲壺胴部片がある。

415号落ち込み（S X415）

C 1 地区中央北寄りに位置する。方形か長方形の区画の一部と考えられ、一辺を検出した形となった。S X401・402・408・409と同様に、ほ場整備以前の水田区画であろう。幅4.02m、深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

416号落ち込み（S X416）

C 1 地区中央北寄り、S X415の南東に位置する。方形か長方形の区画の一部と考えられ、S X415と同方向に延びる一辺を検出した形となった。S X401・402・408・409・415と同様に、ほ場整備以前の水田区画であろう。南部ではS X416底面で古代の堅穴住居S I 423を検出した。S I 423と重複する範囲でS X416の南端が上がると思われるが、確認できなかった。最大長5.85m、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色粘土を基調とする。出土遺物はない。

502号落ち込み（S X502、第15・24図）

C 2 地区中央北寄りに位置する。西側に S D501 と S X528、東側に S X503 が同方向に延びる。地山のⅢ層を人為的に掘り込んでつくられた、は場整備以前の水田区画と考えられ、S D501・S X503 との境は筋状に掘り残されて小高く残る。長さ約24.90m、幅約1.60m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。北部で S E508 と重複するが、埋土がほぼ同じであり、同時期のものと思われる。中央部では底面で S I 515 を検出した。調査区西壁においても、S X502 は S I 515 より新しいことを確認している。南部では S D510 と新旧の切り合い関係があり、S D510 より新しい。出土遺物は、土師器壺胴部ほか小片、須恵器杯体部片・壺体部片、瀬戸美濃皿口縁部片・底部片、青磁碗体部片、越中瀬戸皿口縁部片（96）、鉢胴部片、唐津鉢体部片、近世陶器小片、伊万里碗口縁部片（118）、体部片、算盤玉（150）、砥石（160）、板状金属製品（140）がある。

503号落ち込み（S X503、第15・24図）

C 2 地区中央北寄りに位置する。西側に S X502 が同方向、同規模で延びる。S X502 と同様に、は場整備以前の水田区画と考えられるが、底面の標高は S X502 よりも一段低くなるようつくられている。地山のⅢ層を人為的に掘り込んでつくられているため、S X502 との境が筋状に掘り残されて小高く残る。長さ約24.40m、深さは最大0.35mを測り、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器小片、珠洲壺胴部片、越中瀬戸鉢体部片がある。

608号落ち込み（S X608、第24図）

A 3 地区西、S D606 の東に位置し、南から北へ蛇行しながら延びる。幅1.47m、深さ0.25mを測る。落ち込みとしたが床面の高さは一定ではなく、土坑の集合であるかもしれない。調査区南壁では、東に位置する S X610 との間に新旧の切り合いは確認できず、一連の遺構である可能性が高い。S X608・610とも I c 層直下から地山を切り込んでおり、西に隣接する S D606 より古い時期の遺構とわかる。埋土は黒色粘土質シルトを基調とし、地山がブロック状に混じる。出土遺物はない。

610号落ち込み（S X610、第24図）

A 3 地区西、S X608 の東に位置し、西から東へ蛇行しながら延びる。幅0.72m、深さ0.14mを測る。落ち込みとしたが床面の高さは一定ではなく、土坑の集合であるかもしれない。調査区南壁では、西に位置する S X608 との間に新旧の切り合いは確認できず、一連の遺構である可能性が高い。S X608・610とも I c 層直下から地山を切り込んでおり、西に位置する S D606 より古い時期の遺構とわかる。埋土は S X608 と同様に黒色粘土質シルトを基調とするが、S X608 よりも地山の混入が少ない傾向にある。出土遺物は土師器小片、須恵器横瓶胴部片（49）がある。

612号落ち込み（S X612、第24図）

A 3 地区西、S X611 の東に位置し、南から北へ蛇行しながら延びる。幅2.44m、深さ0.55mを測る。溝としたが床面の高さは一定でなく、土坑の集合であるかもしれない。北へ行くほど掘り込みが多く深くなるが、南部では徐々に浅くなり、調査区南壁では I c 層直下に厚さ0.66m程しかあらわれない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、下層の一部では黒色粘土が堆積する。出土遺物はない。

619号落ち込み（S X619、第23図）

A 3 地区東に位置し、北西から南東方向に落ち込む。北東角で S K620 と新旧の切り合い関係があり、S K620 より古い。幅2.44m、深さ0.23mを測る。調査区南壁で II 層直下から地山を切り込むことを確認しており、古代～中世の遺構と考えられる。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器壺胴部片、須恵器壺胴部片がある。

（朝田亜紀子）

3 遺物

(1) 土器・陶磁器 (第25~28図、図版10~12)

弥生土器 (1~13)、須恵器 (14~57)、土師器 (58~73)、中世土師器 (74~77)、青磁 (78·79)、白磁 (80~82)、珠洲 (83~88)、瀬戸美濃 (89~93)、越中瀬戸 (94~109)、近世陶磁器 (110~134) が出土しているが、いずれも破片で、全体の形を復元できるものは少ない。

弥生土器のほとんどは、摩耗しており調整も不明瞭なものが多く、周辺からの流れ込みの痕をでない。1~9は壺・甕、10~14は高杯である。9は甕底部片で、底部に孔径1cmの孔があく。

須恵器は杯 (14~32)、杯蓋 (33~40)、壺 (41~45)、双耳瓶 (46~48)、横瓶 (49·50)、甕 (51~57) があるが、小片が多い。22は口縁内面に墨痕がみられる。33は回転ヘラ切り未調整の頂部にボタン状のつまみが付く。41は丸みのある肩部に突帯を巡らす壺で、内面に指頭圧痕がわずかに残る。42·44は肩部に沈線が巡る短頸壺で、44はやや肩が張る。46·47は鰐状の耳が付く双耳瓶で9世紀後半代所産か。52は櫛描波状文を施した甕口縁部。

土師器は椀 (58~64·66)、鉢 (65)、皿 (67·68)、鍋 (69)、甕 (70~73) がある。58~60は外外面とも赤彩された椀で、59·60は口縁部に煤が付着する。底部糸切り主体である。67は糸切り底の皿で、10世紀前半頃のものか。70は口縁端部が肥厚し上下に拡張しており、9世紀代。69·72·73は口縁端部を内側に折り返し丸く成形したもので、10世紀代所産のものか。

74·76は口縁部に煤が付着する。77は内面に煤の付着がみられる糸切り底部片。

82は端反の白磁皿で、被熱している。

珠洲は甕 (83~85)、鉢 (86~88) がある。87·88は方頭水平口縁の櫛鉢で、88は2.5cm幅8条1単位の鉢目を引く。

89·90は灰釉の小皿、91·92は見込みに16弁菊の印花文を施した灰釉内禿皿。93は天目茶椀底部で、被熱しており全体に煤が付着する。

越中瀬戸は椀 (94·105·106)、皿 (95~100)、壺 (101·102)、匣鉢 (103·104)、鉢 (107~109) がある。94は鉄釉の天目茶碗。105は鉄釉、106は銅緑釉を流し掛けた椀で、小杉焼きの可能性がある。97は見込みに重ね焼き痕が残る皿。103·104は糸切り底部の匣鉢。

近世陶磁器は鉢 (110~116)、椀 (117~124)、杯 (125·126)、皿 (127~133)、壺 (134) がある。椀、皿、杯の多くは草花文や風景を描く染付けの椀、皿で佐賀県有田町近隣の窯で生産され、所謂、伊万里と称される一群のものが主体である。113と115は接合しないが、同一個体とみられる。122·124は簡型椀で、外面に草花文、口縁部内面に四方櫛文を描く。125は朱色と金色で彩色した小杯。128は蛇の目四形高台の菊皿で18世紀以降のもの。131は見込みに手書きの五弁花を描く皿。132·133は見込みを蛇の目釉剥ぎする銅緑釉の皿で、132は被熱している。

(2) 土製品 (第29図、図版13)

人形 (135)、鳥形 (136)、泥面子 (137)、羽口 (138) がある。135は頭部が欠けているが、太鼓を叩く磁器製の唐子人形で、白生地に赤と金で彩色する。136は頭部、胸部、羽を藍色で彩色した磁器製の鳥形で、胴体は空洞となり、肩に孔径約0.4mmの小孔があくことから水滴とみられる。137は上下2cm弱の扁平な土製品で、鬼とみられる人面をモチーフとする泥面子。138は羽口で、端部に溶解物が付着する。復元径は約9cm。

(3) 金属製品（第29図、図版13）

煙管（139）、板状製品（140・141）、鉄滓（142～144）、銭（145）がある。139は雁首で脂返しが長い。140は片側が緩くカーブする板状製品で、鎌とみられる鉄製品。141は鋸びて赤色を呈する板状製品で、鉄鍋口縁部片とみられ、緩く弧を描く。145は寛永通宝。裏面に11波の波文が描かれており、明和6（1769）年以降の真鍮四文銭である。

(4) 木製品（第29図、図版14）

板材（146～149）、算盤玉（150）がある。146はスギの板材で、左右両端は欠損している。表裏両面に墨書きがあり、表面に「會席箱」「席」「警」、裏面に「奉」と読めるが、表裏両面とも欠損部に統く大きな文字が書かれており、文字の大きさや向き、位置などに規則性はない。147は桶等の側板か。149は外側に赤色漆の塗られたブナの板材。146・147・149はS D201の護岸施設付近から出土している。150は算盤玉で、樹種はツバキ属。ツバキは木口割れの少ない硬い木材であることから、ツゲと同様な用途に用いられる。現代の木製算盤玉の材料としては、ツゲやカバノキが主力であり、150は樹種の特性を活かした木材利用がなされているといえる。

(5) 石製品（第30図、図版15）

石鎌（151）、磨製石斧（152）、剥片（153）、玉未成品（154・155）、砥石（156～162）、円礫（163）がある。151は木葉形を呈する無茎鎌で、石材は緑灰色のチャート^{注1}。152は基部が小さく、刃部が聞く二等辺三角形状の磨製石斧で、刃部が欠損する。石材は輝銀岩。154・155は緑色凝灰岩製の四角柱状の未成品で、155は管玉の形割工程品であろう。157は、裏面に鑿状の工具で敲いて幅約0.2cmの溝が0.5～0.7cm間隔で刻まれている。下半分は、この溝が摩耗しており、中心部はほぼ平坦になっている。使用により凹んだ砥石の砥面を水平な状態に研ぎ直す過程のもの、あるいは、研ぎ直し用の砥石である「面直し砥石」の可能性がある。159・161は被熱している。163は半透明の白色の円礫で、石材は石英である。加工痕等、人為的な痕跡は認められないが、SE508の底面出土で、遺構埋土に礫が混じらないことから、意図的に埋められたものと考えられる。

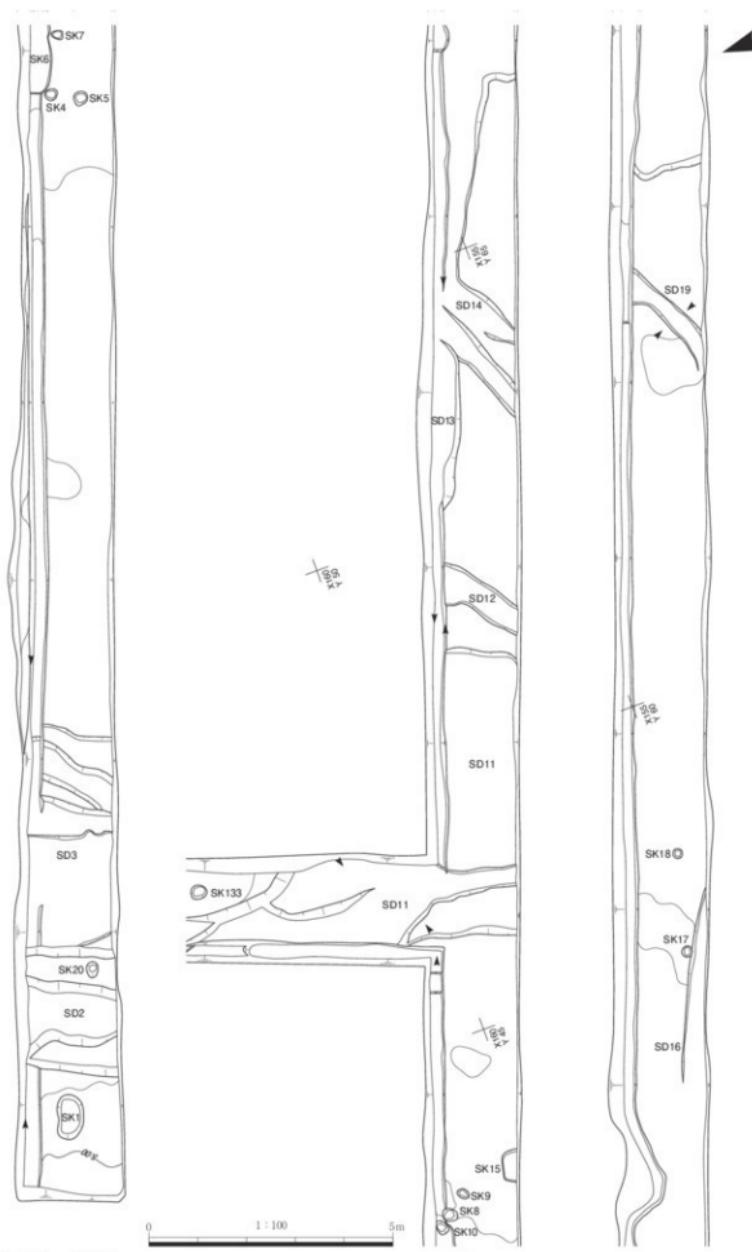
（金三津道子）

注

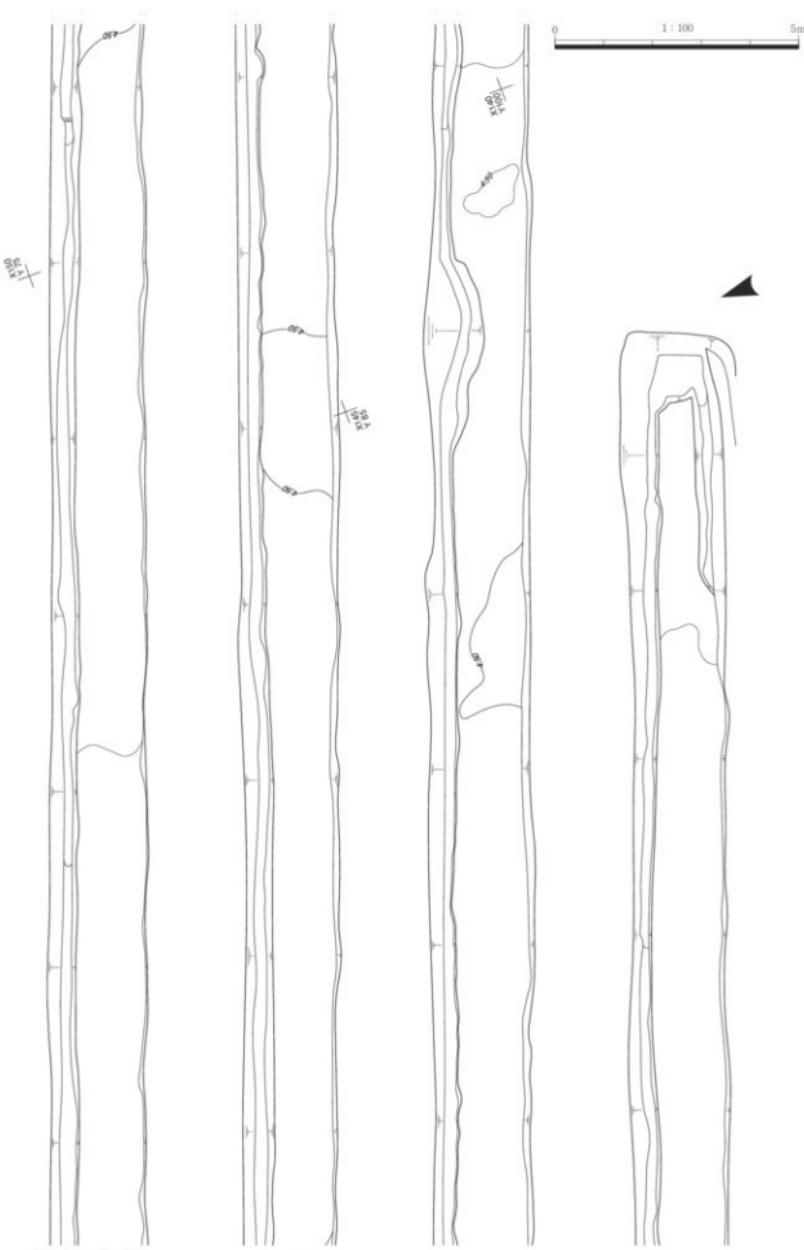
注1 石材鑑定は、明治大学研究・知財戦略機構黒耀石研究センター客員教授 中村由氏に依頼した。結果は第15表 石製品一覧に掲載している。

参考文献

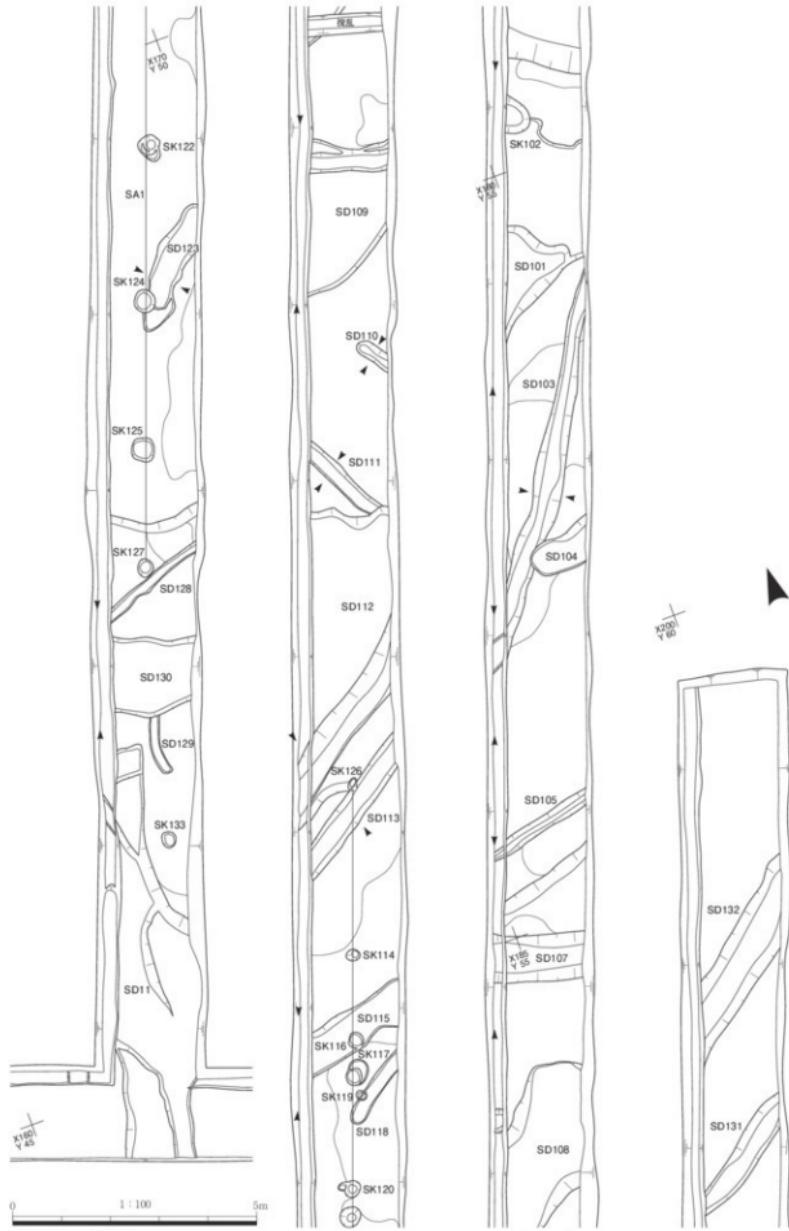
- 池野正男 2013 「越中古代後半の土師器食器」『富山考古学研究』第16号 公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 内田並紀子 2000 「越中婦負郡の古代土師器煮炊具－婦中町中名I・V・VI遺跡の堅穴住居出土資料を中心にして－」『富山考古学研究』第3号 財团法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書」
- 高木好美・鹿島昌也 2016 「富山城下町出土の流し掛け碗について」『富山市考古資料館紀要』第35号 富山市考古資料館
- 永井久美男 1998 「近世の出土銭II 分類図版編」兵庫県埋蔵鉄調査会



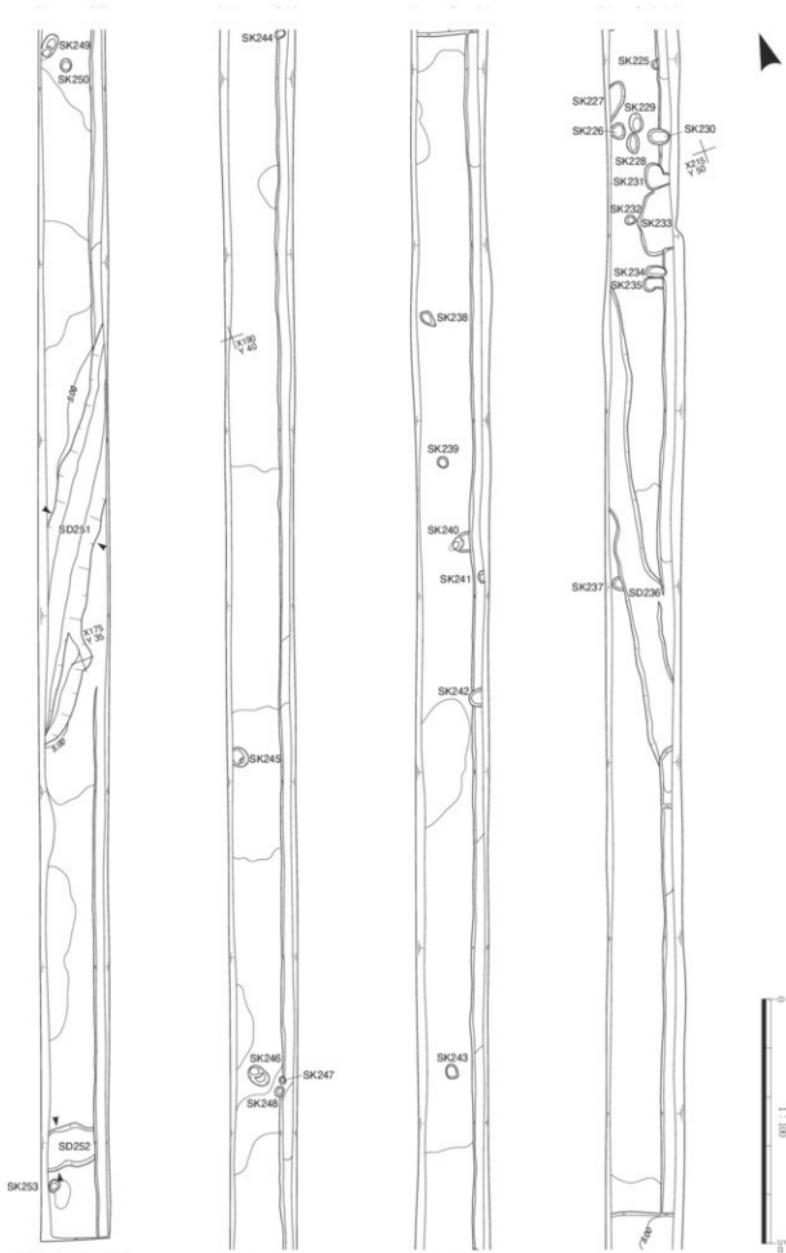
第4図 全体図
A 1地図(①)



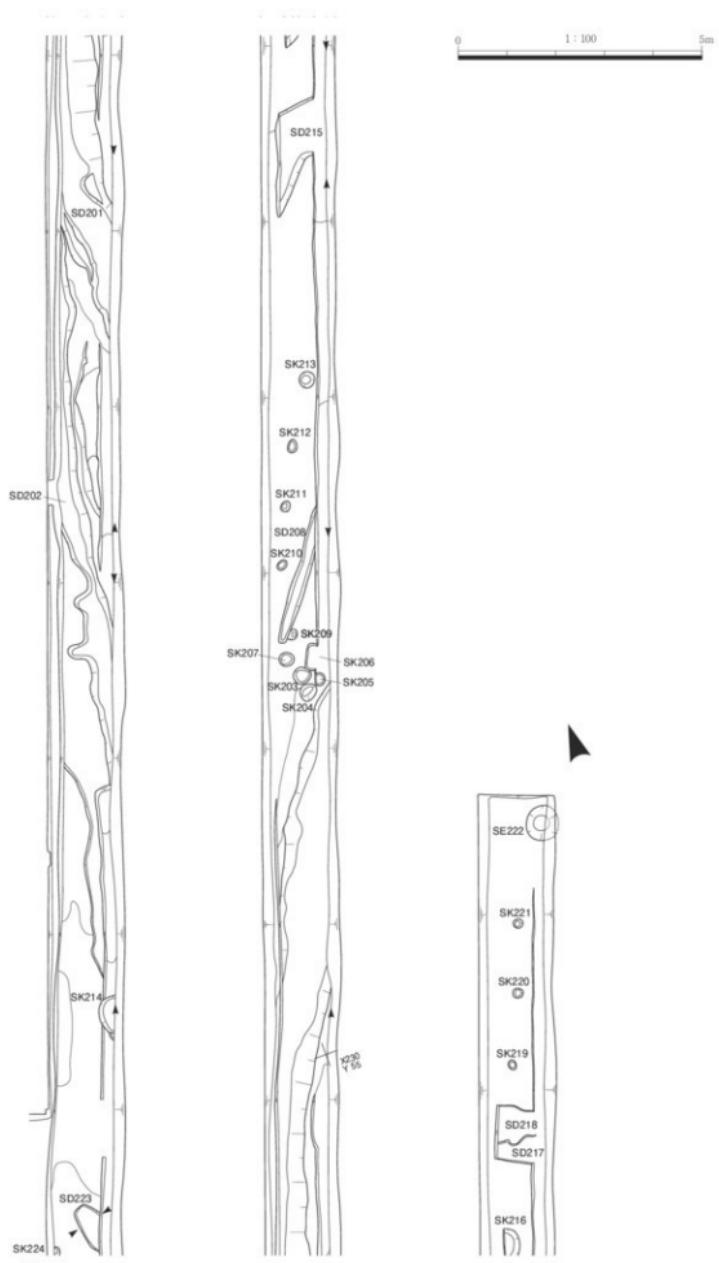
第5図 全体図
A1 地図(②)



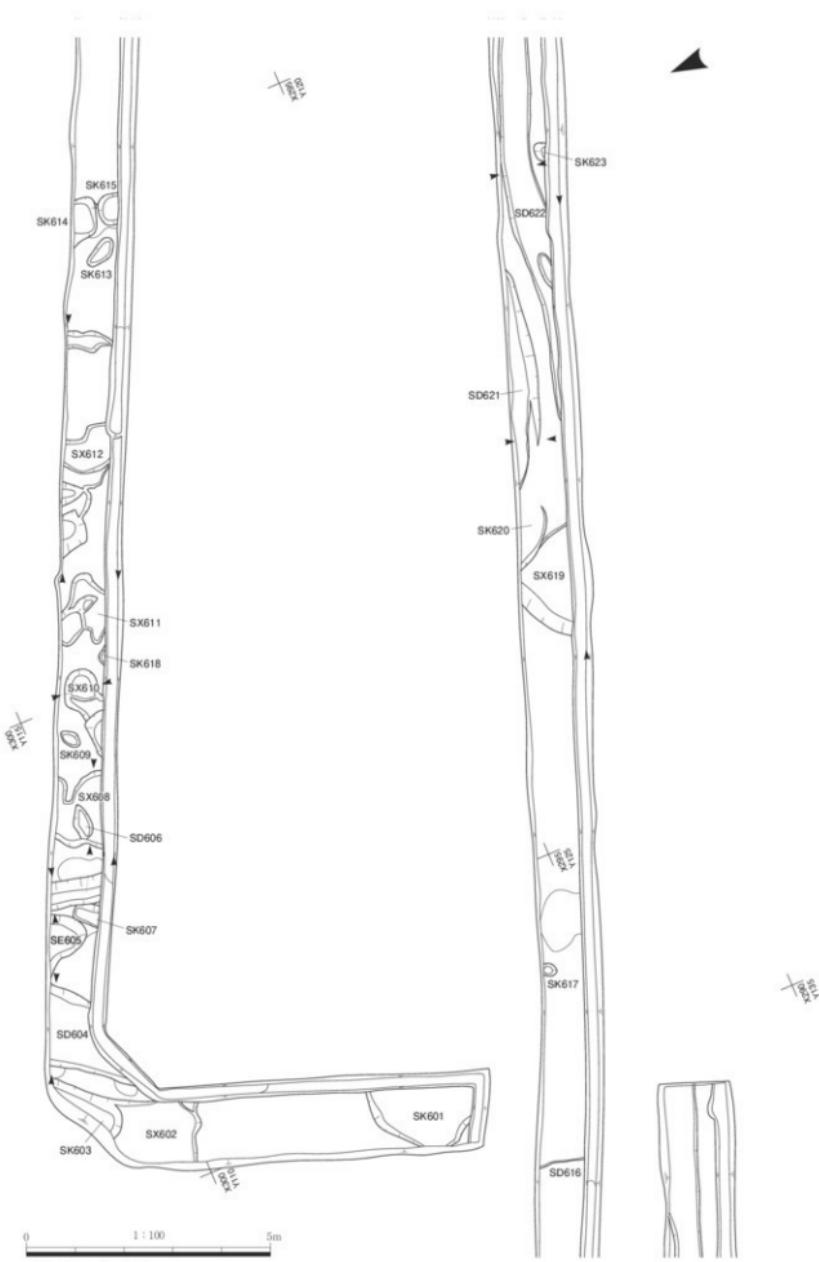
第6図 全体図
B1地区



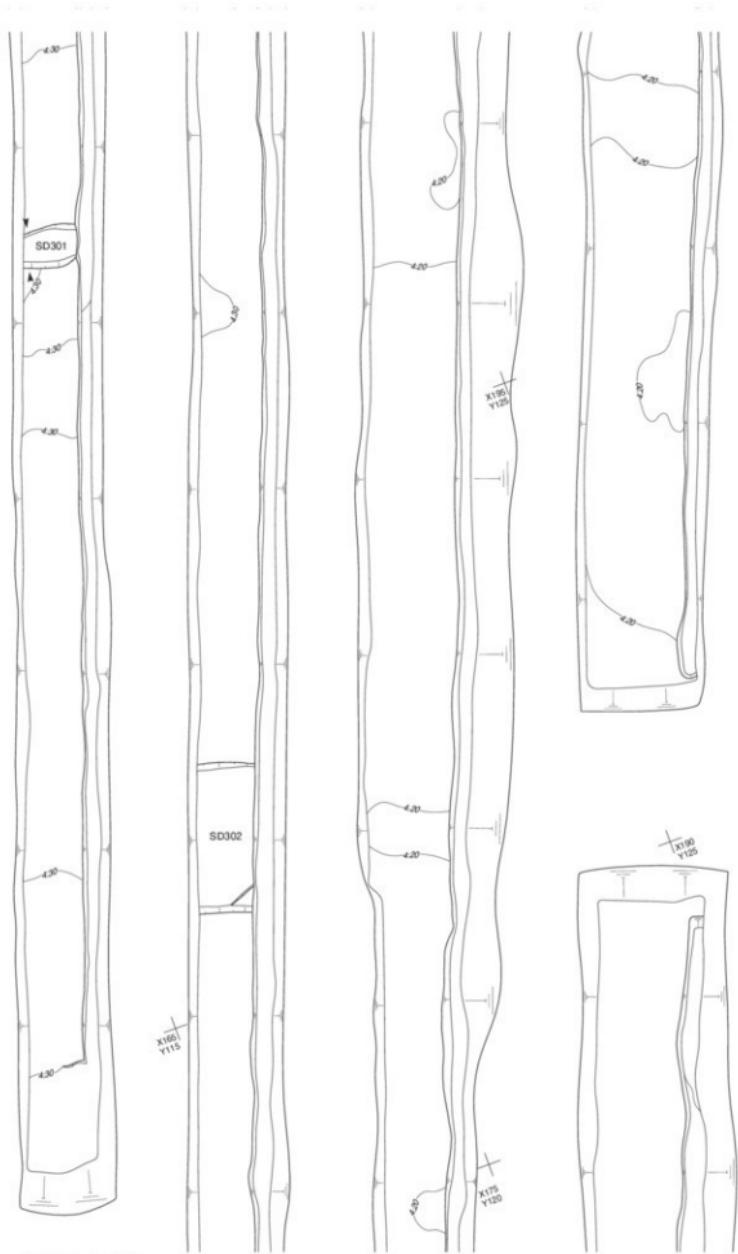
第7図 全体図
B2地区①



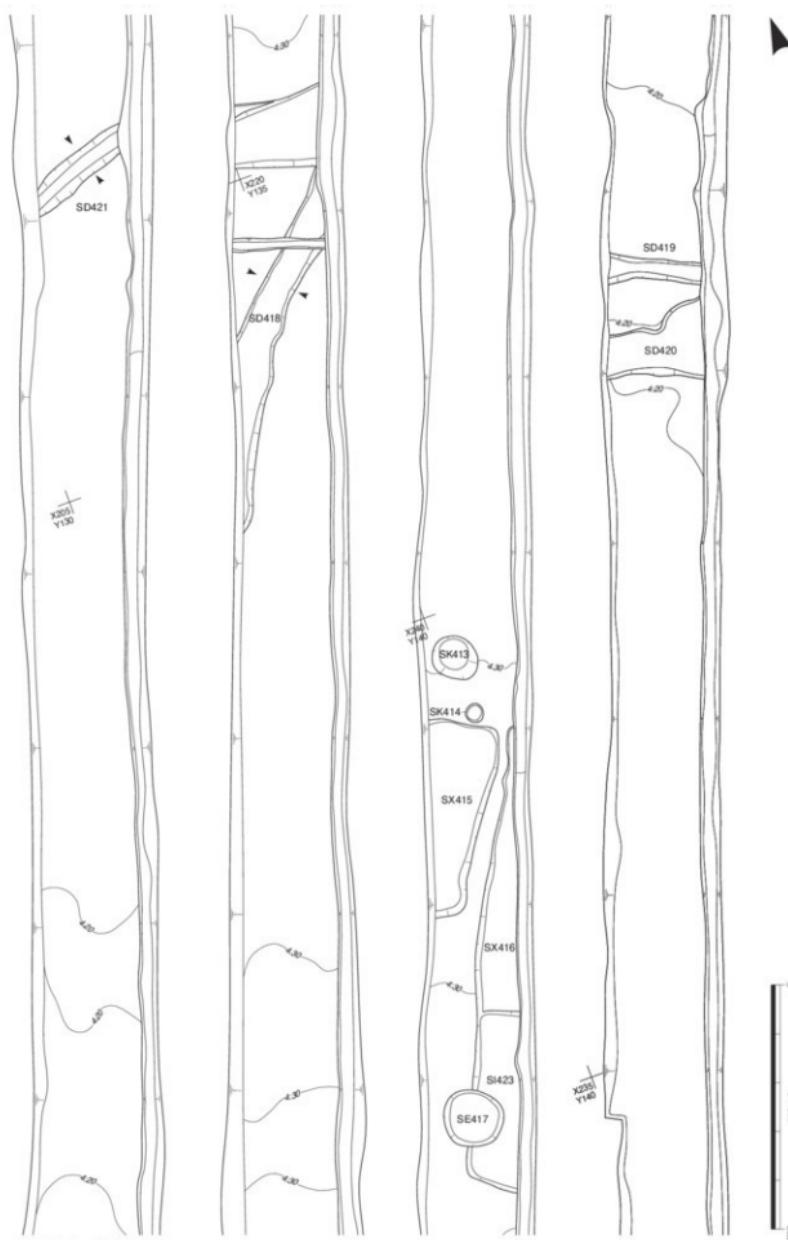
第8図 全体図
B2地図②



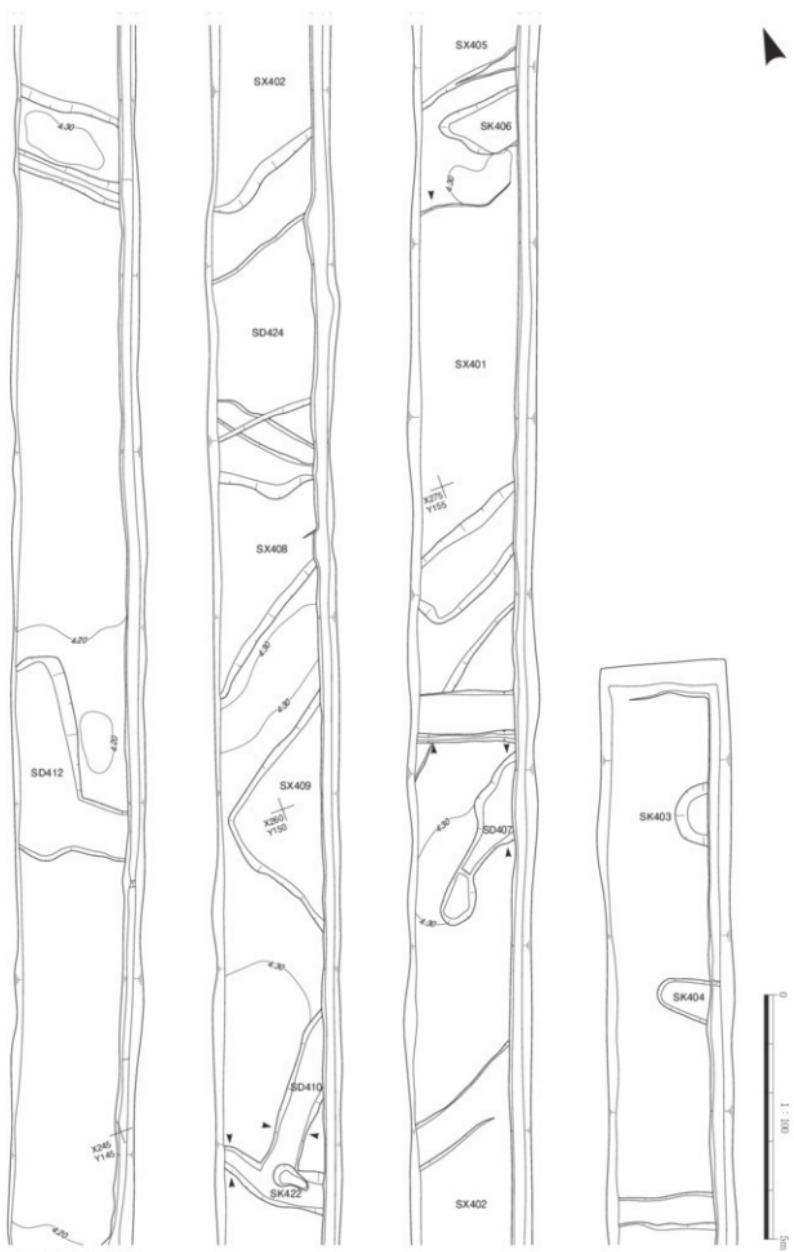
第9図 全体図
A3地区



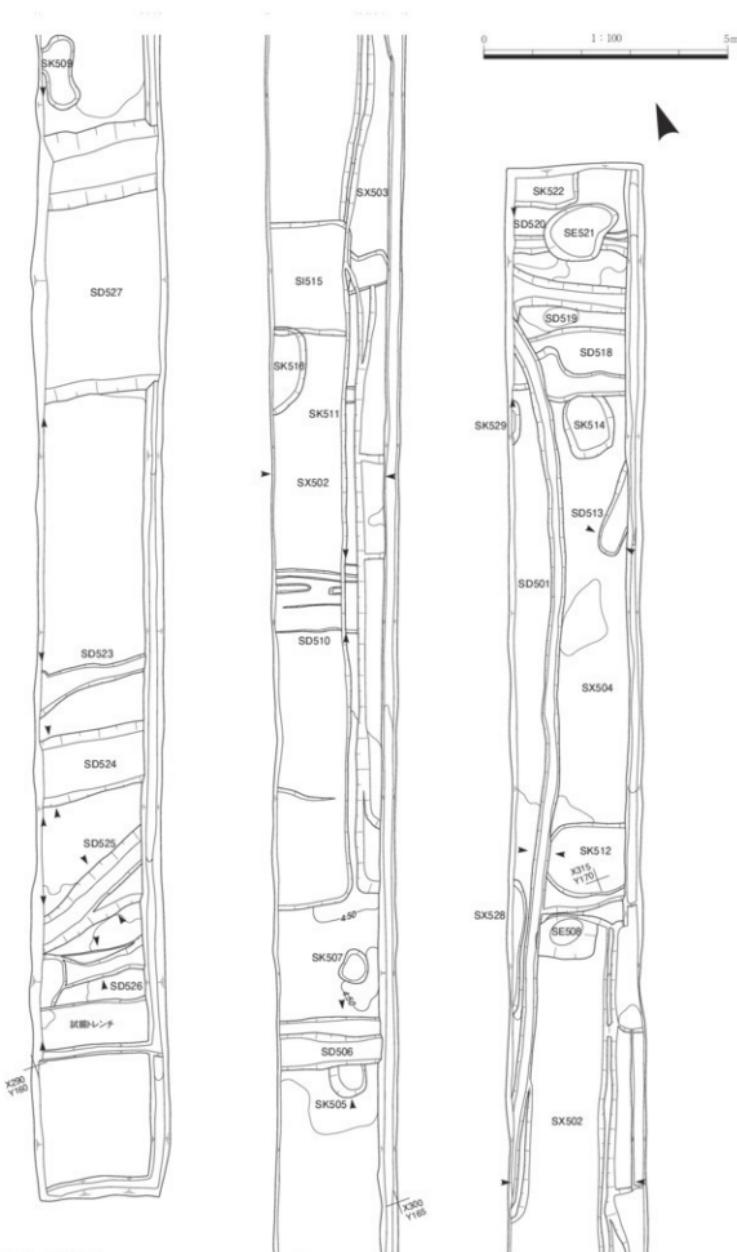
第10図 全体図
B3・C1 地区(①)



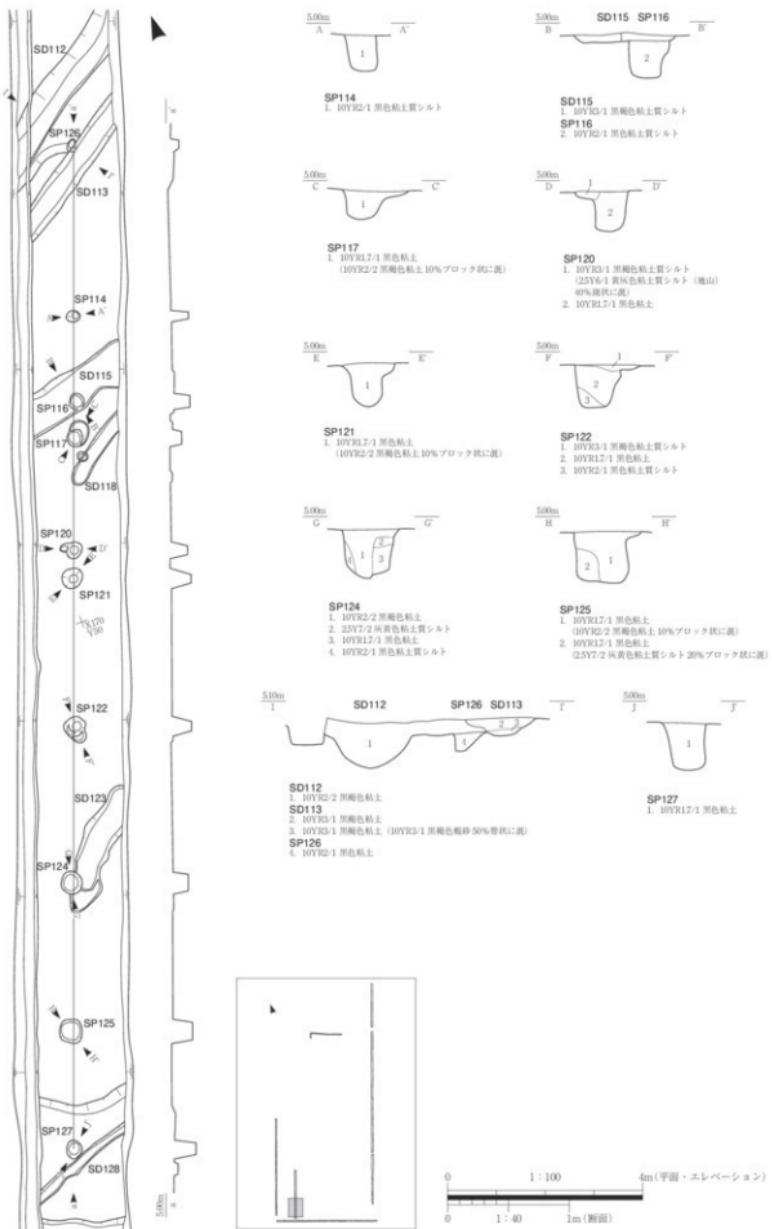
第11図 全体図
B3・C1地[②]



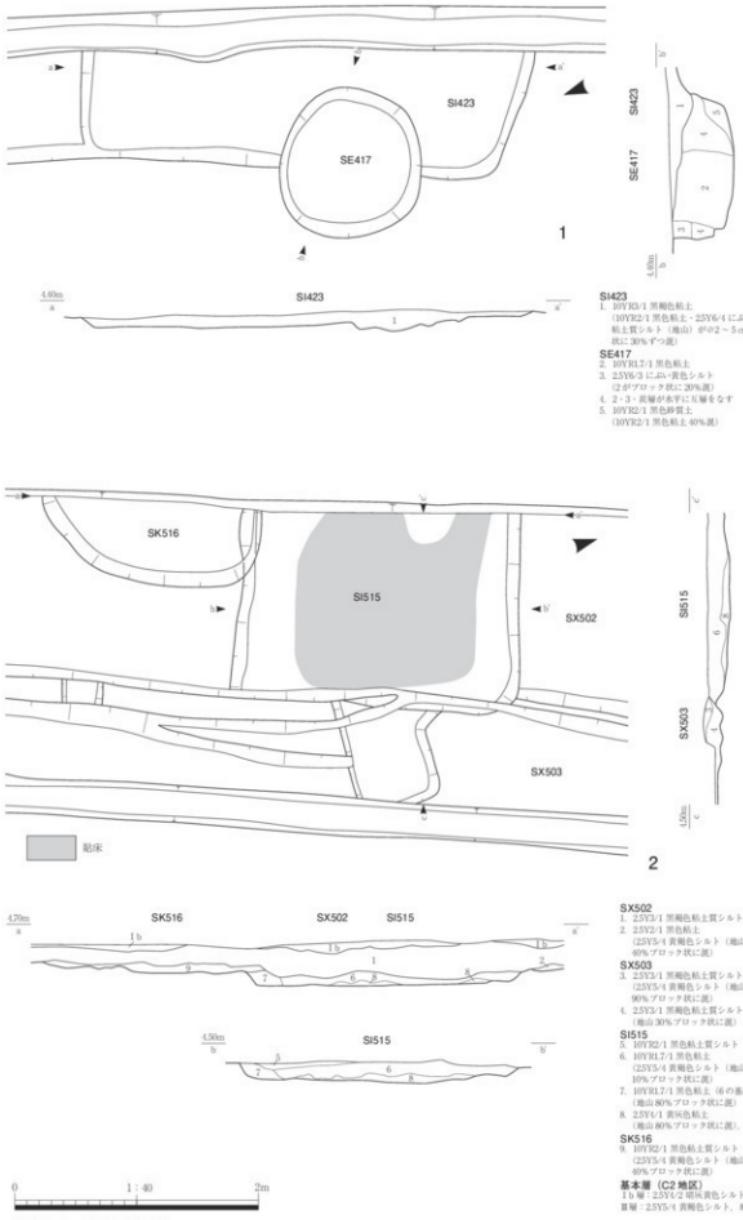
第12図 全体図
B3・C1地[③]



第13図 全体図
C2地区

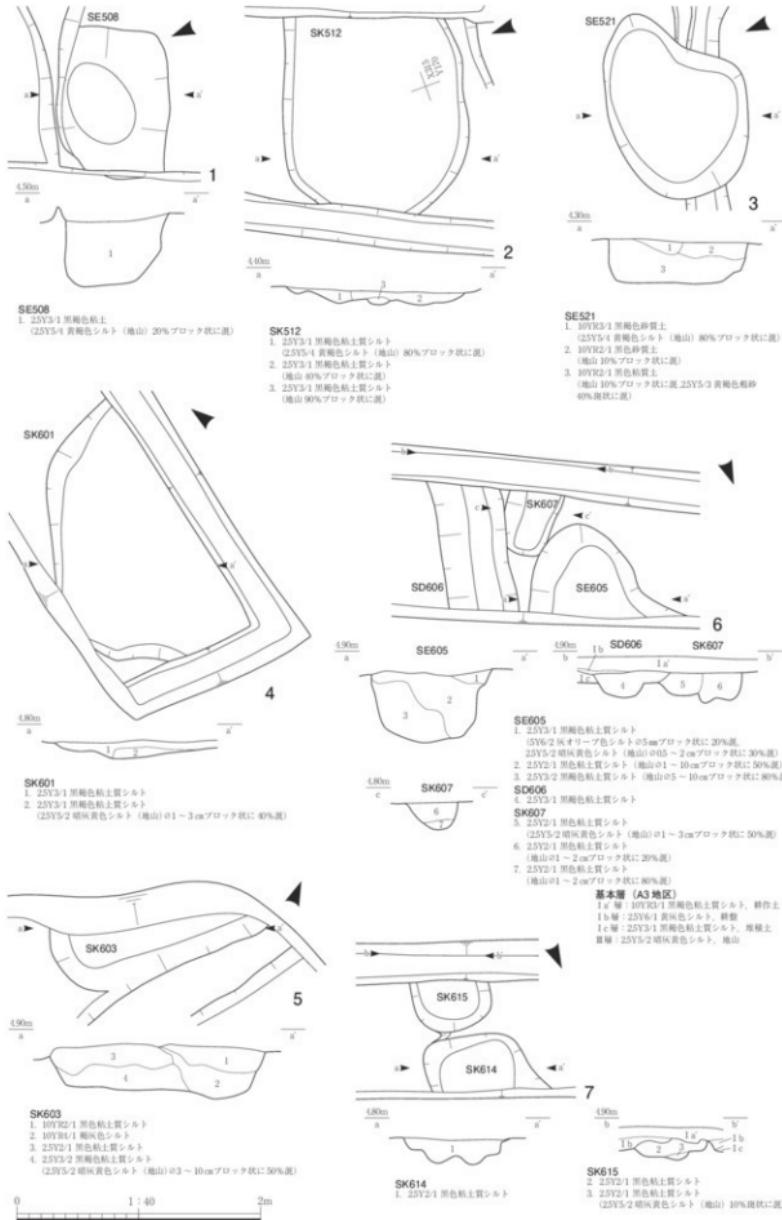


第14図 遺構実測図
SA 1



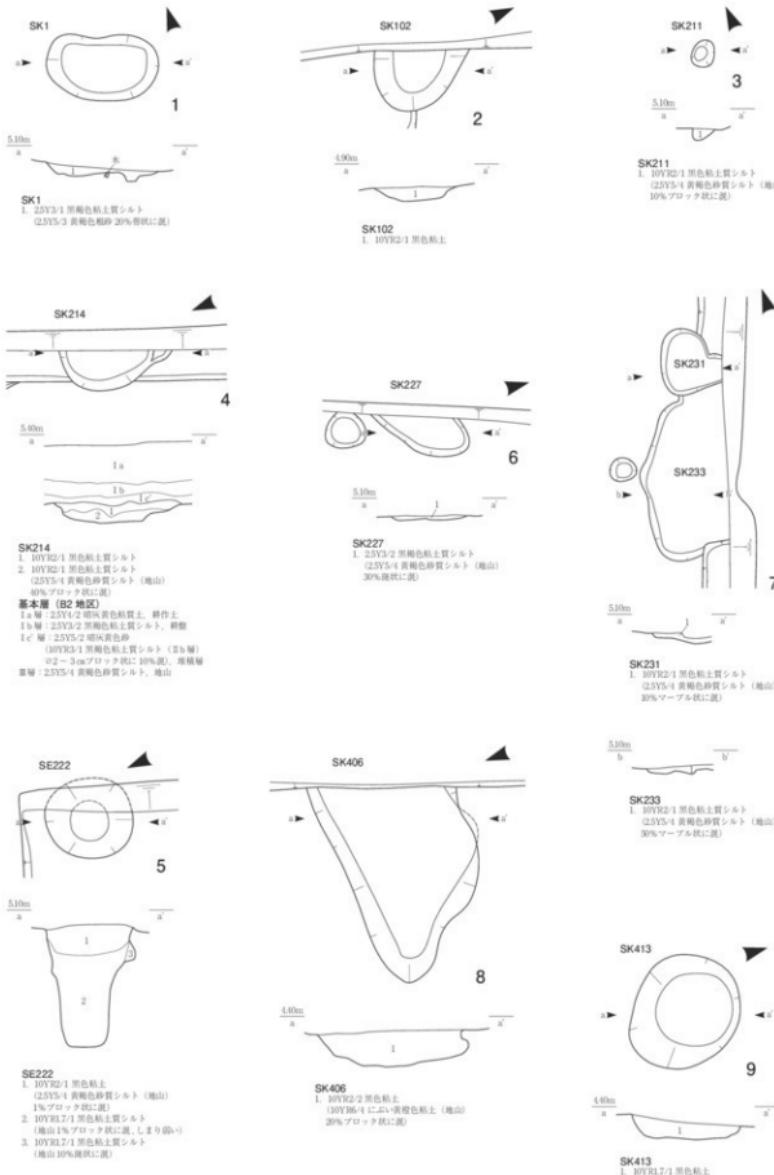
第15図 遺構実測図

1. SE417・SI423 2. SX502・SX503・SI515・SK516



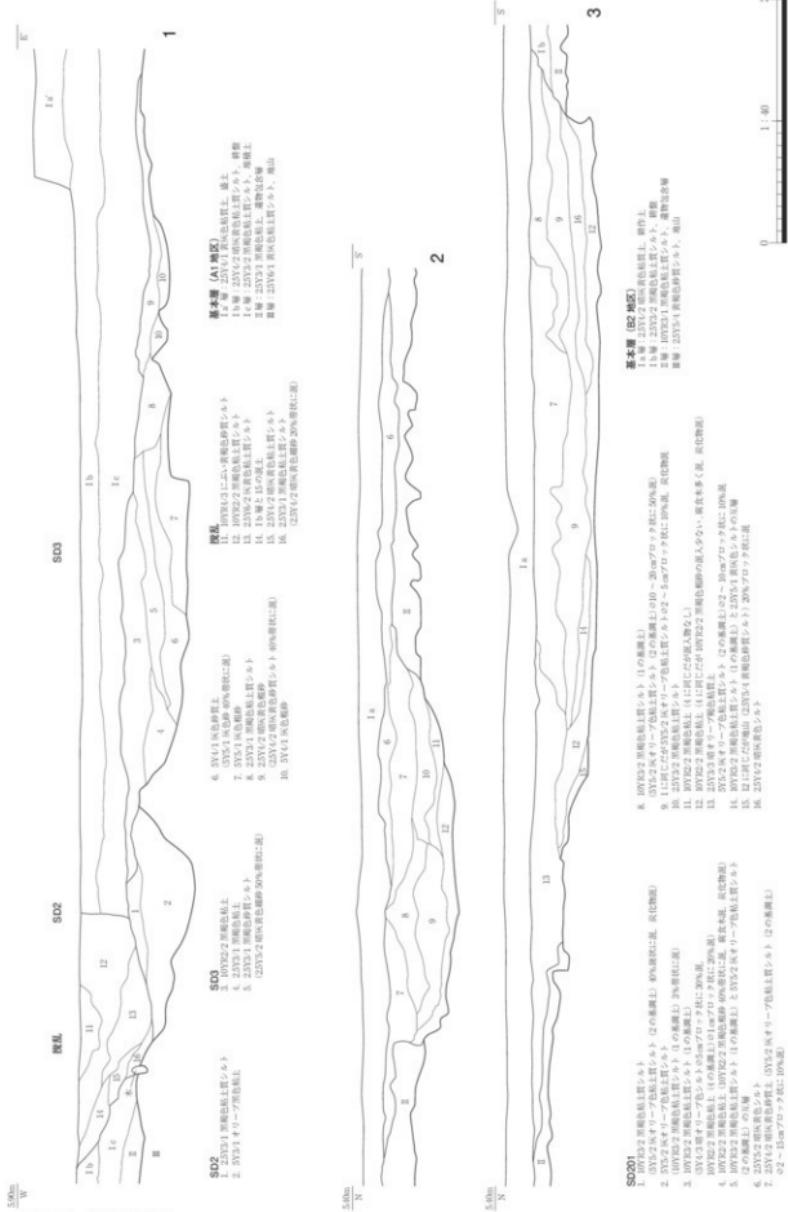
第16図 遺構実測図

1. SE508
2. SK512
3. SE521
4. SK601
5. SK603
6. SE605 · SD606 · SK607
7. SK614 · SK615



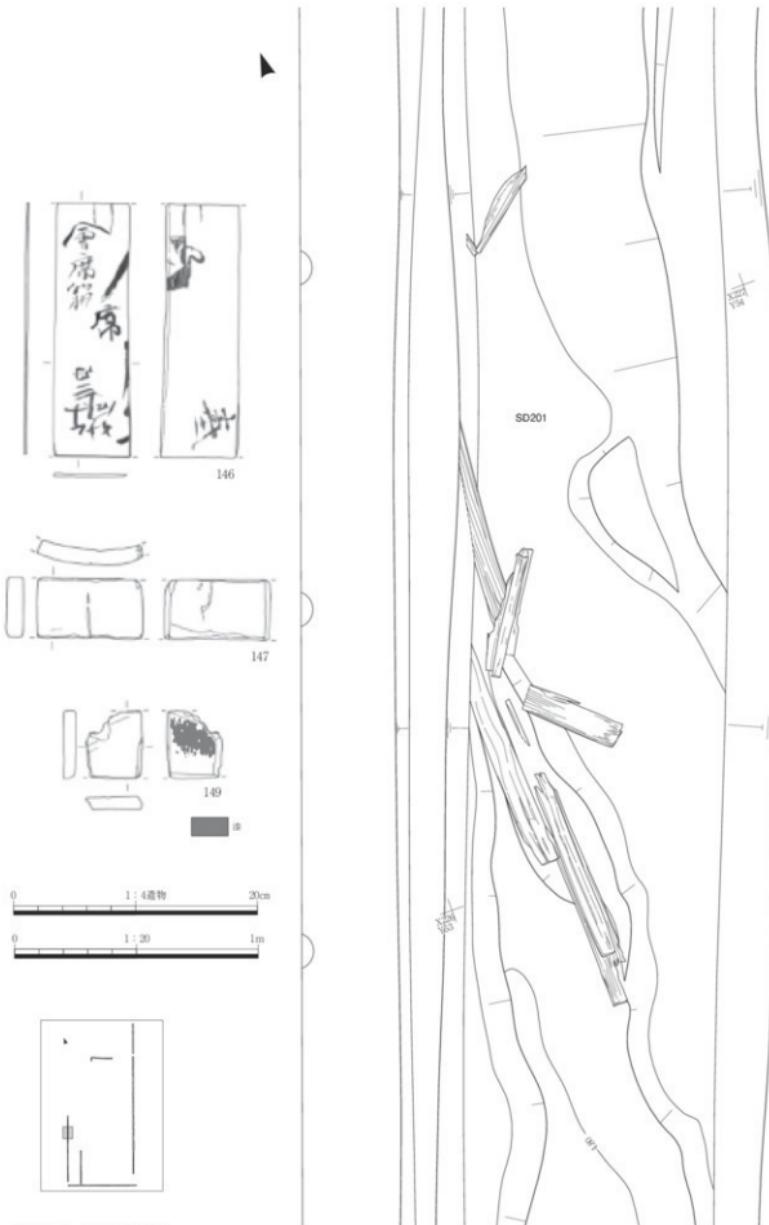
第17図 遺構実測図

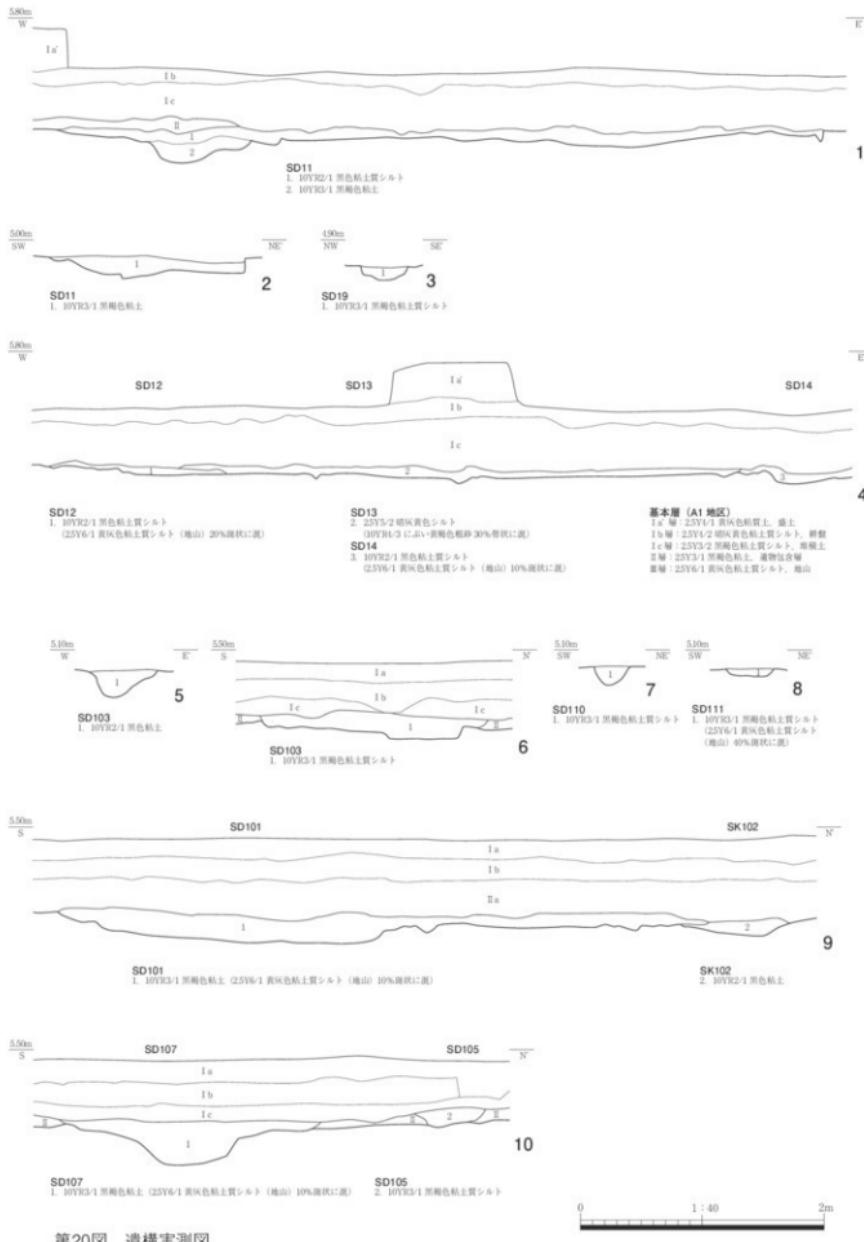
1. SK1 2. SK102 3. SK211 4. SK214 5. SE22 6. SK227 7. SK231・SK233
8. SK406 9. SK413



第18図 遺構実測図

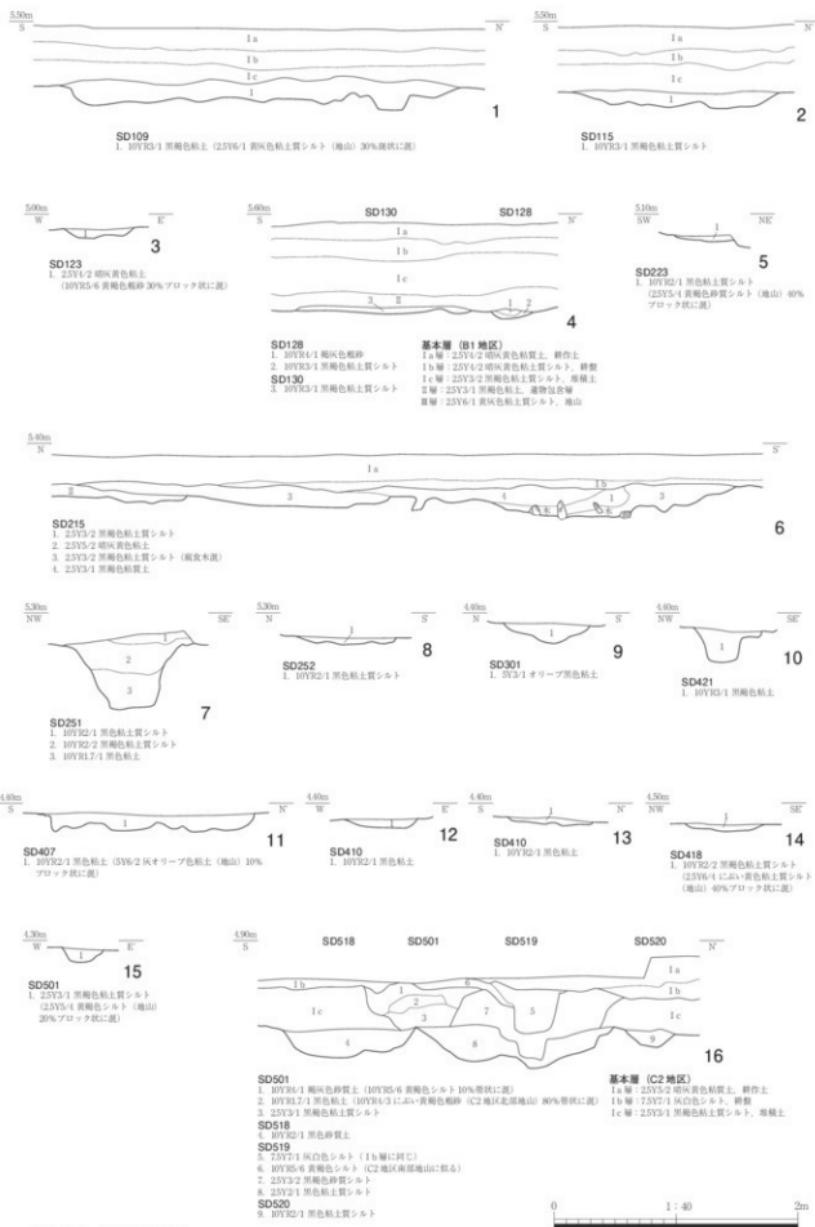
1. SD2 · SD3 2 · 3. SD201





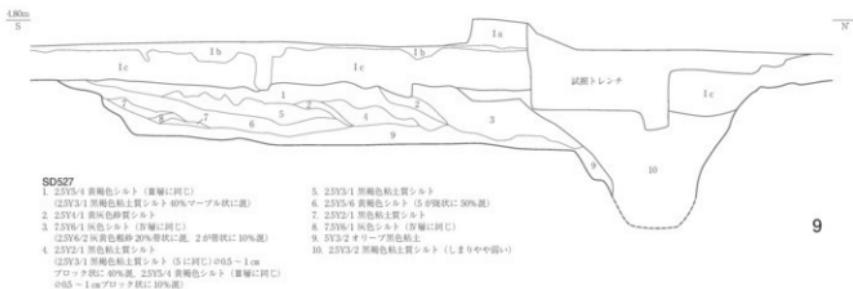
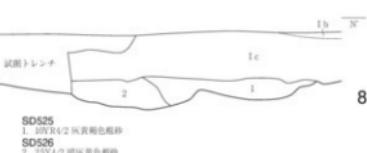
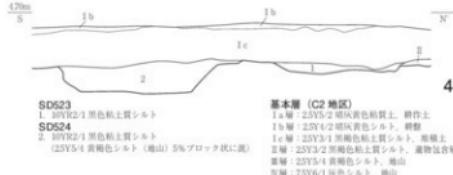
第20図 遺構実測図

1. SD11
2. SD11
3. SD19
4. SD12~14
5. SD103
6. SD103
7. SD110
8. SD111
9. SD101~SK102
10. SD105·SD107



第21図 遺構実測図

1. SD109 2. SD115 3. SD123 4. SD128 · SD130 5. SD223 6. SD215 7. SD251 8. SD252
9. SD301 10. SD421 11. SD407 12. SD410 13. SD410 14. SD418 15. SD501
16. SD501 · SD518 · SD501 · SD519 · SD501 · SD520

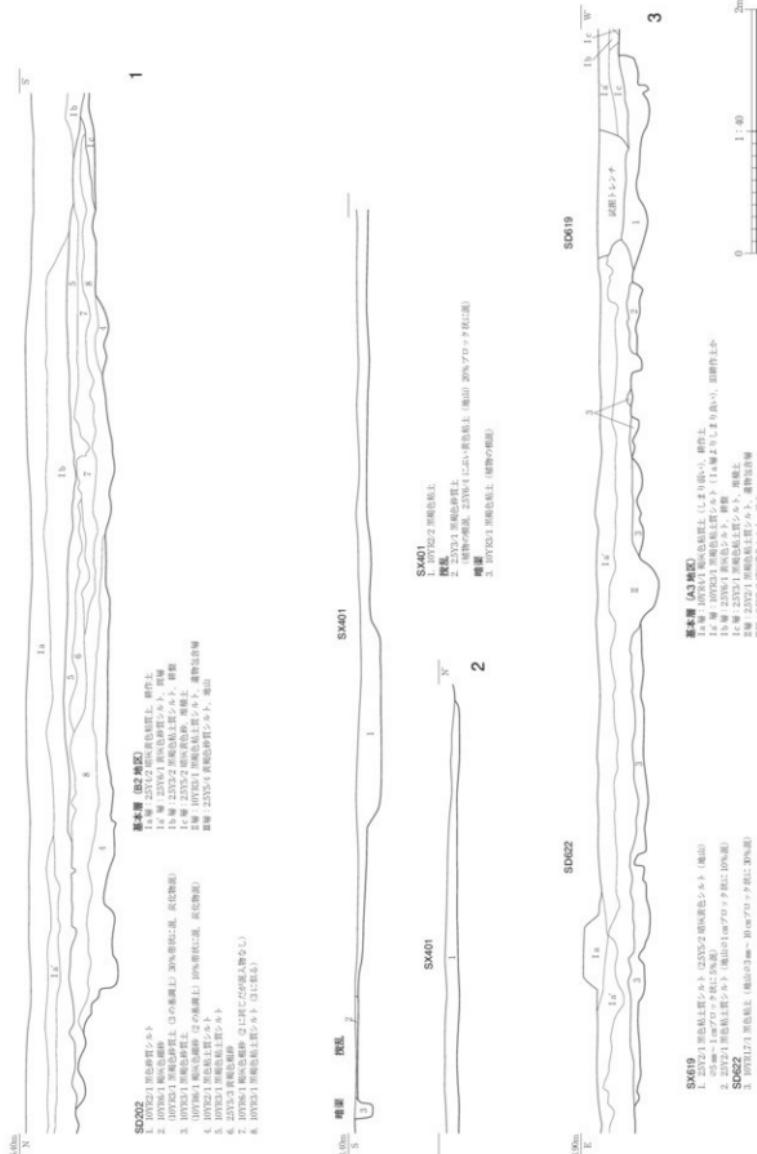


第22図 遺構実測図

1. SK505 · SD506
2. SD510
3. SD513
4. SD523 · SD524
5. SD524
6. SD604
7. SD525
8. SD525 · SD526
9. SD527
10. SD606
11. SD621
12. SD622

第23図 遺構実測図

1. SD202 2. SX401 3. SX619・SD622





SX501
1. 25Y3/1 黒褐色粘土質シルト
(2SY5/4 黄褐色シルト (地山) 10% ブロック状に混)

SX502
2. 25Y3/1 黒褐色粘土質シルト
(2SY5/4 黄褐色シルト (地山) 10% ブロック状に混)

SX503
3. 25Y3/1 黒褐色粘土質シルト
(2SY5/4 黄褐色シルト (地山) 10% ブロック状に混)



SX608 - SX610
1. 25Y2/1 黒褐色土質シルト
(2SY5/2 噴灰黄色シルト (地山) の1~5cmブロック状に30%混)

SX611
2. 25Y2/1 黒褐色土質シルト
(地山の1~2cmブロック状に20%混)

基本層 (A3 地区)
1a 層 : 10Y3/1 黒褐色粘土 (しまり固い)。耕作土
1a 層 : 10Y3/1 黒褐色粘土質シルト (1a 層よりしまり良い)。深耕作土か
1b 層 : 25Y6/1 黄褐色シルト。耕盤
1c 層 : 25Y3/1 黒褐色粘土質シルト。堆積土
2 層 : 25Y2/1 黑褐色粘土質シルト。堆積物含含層
基層 : 25Y5/2 噴灰黄色シルト。地山



SX608
1. 25Y2/1 黒褐色土質シルト (2SY5/2 噴灰黄色シルト (地山)
の1~5cmブロック状に30%混)

SX610
1. 25Y2/1 黒褐色土質シルト
(2SY5/2 噴灰黄色シルト (地山) の1~2cmブロック状に20%混)

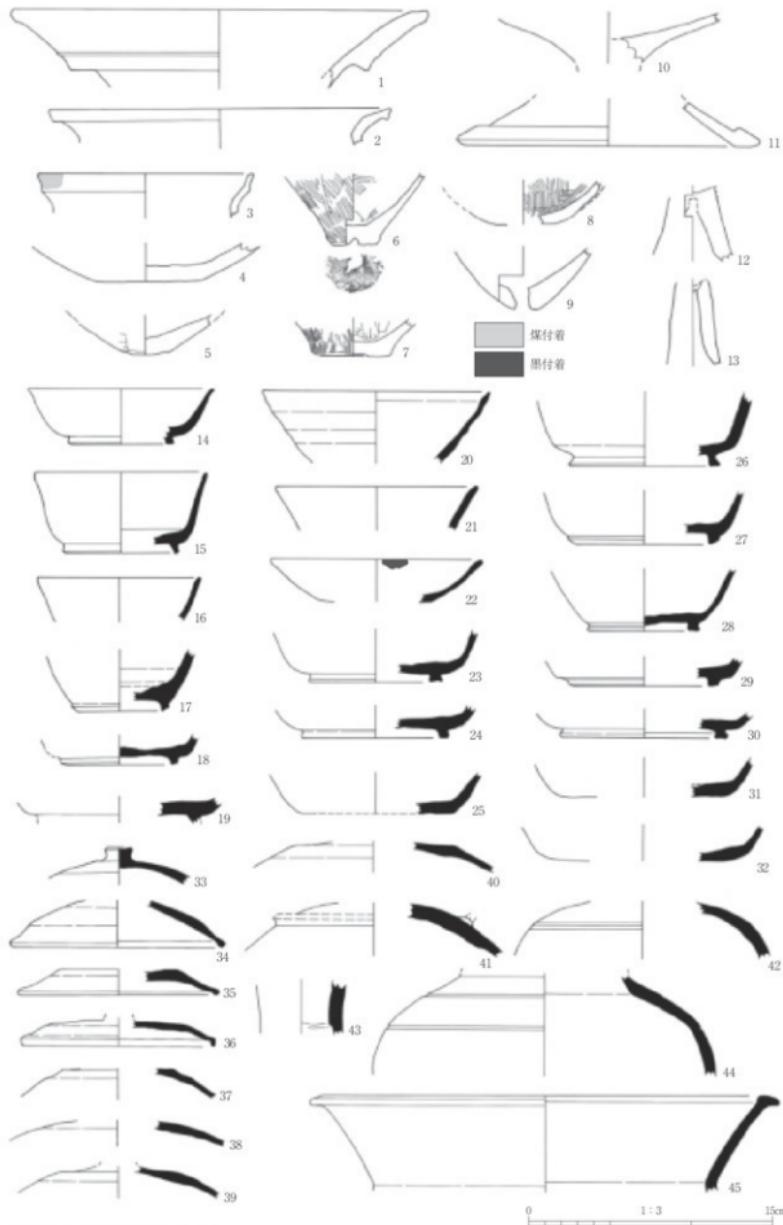


SX612
1. 25Y3/1 黒褐色粘土質シルト (1a 層に粗石)
2. 25Y2/2 黑褐色粘土質シルト (2SY5/2 噴灰黄色シルト (地山) の1~2cmブロック状に10%混)
3. 25Y2/2 黑褐色粘土
4. 25Y3/2 黑褐色粘土質シルト (地山 70% 鹿状に混)



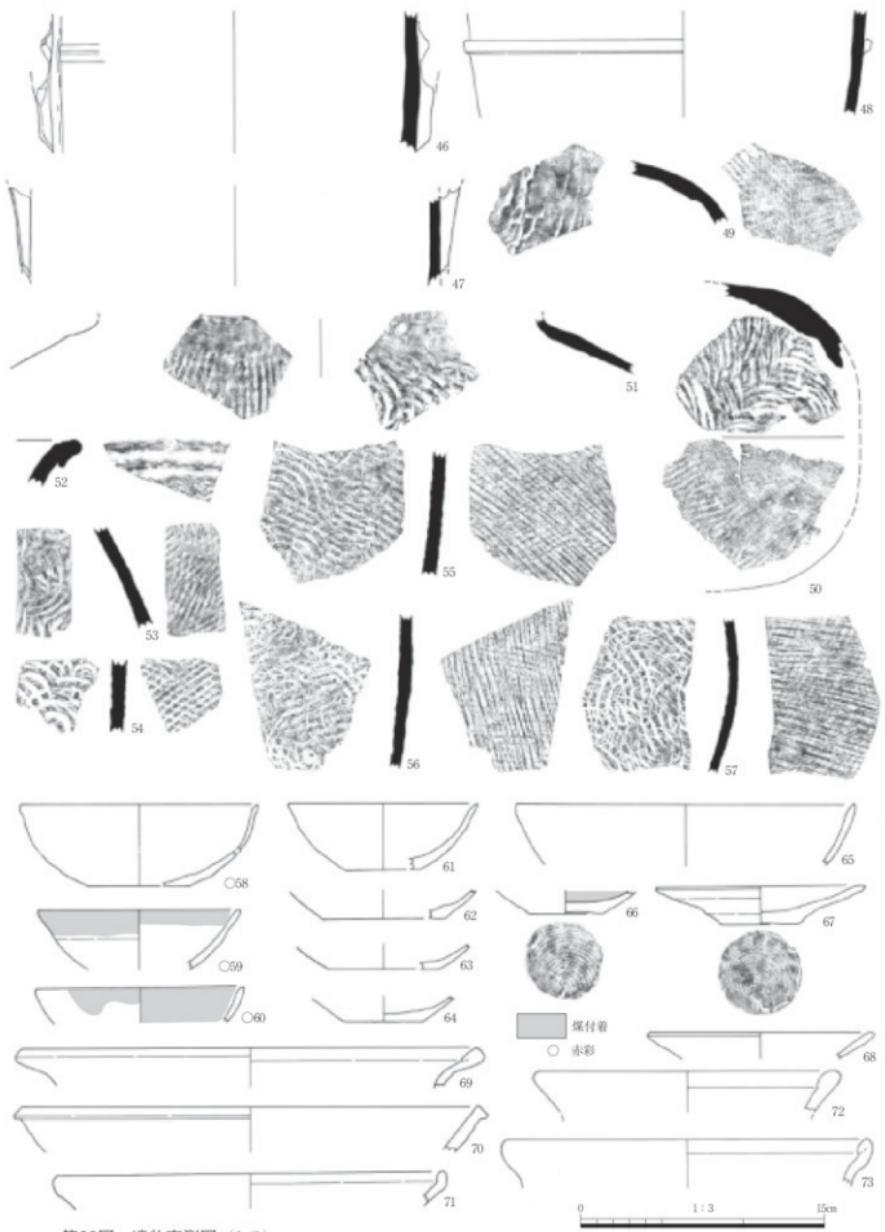
第24図 遺構実測図

1. SX402
2. SD501・SX502・SX503
3. SX502・SX503
4. SX608・SX610・SX611
5. SX608
6. SX610
7. SX612



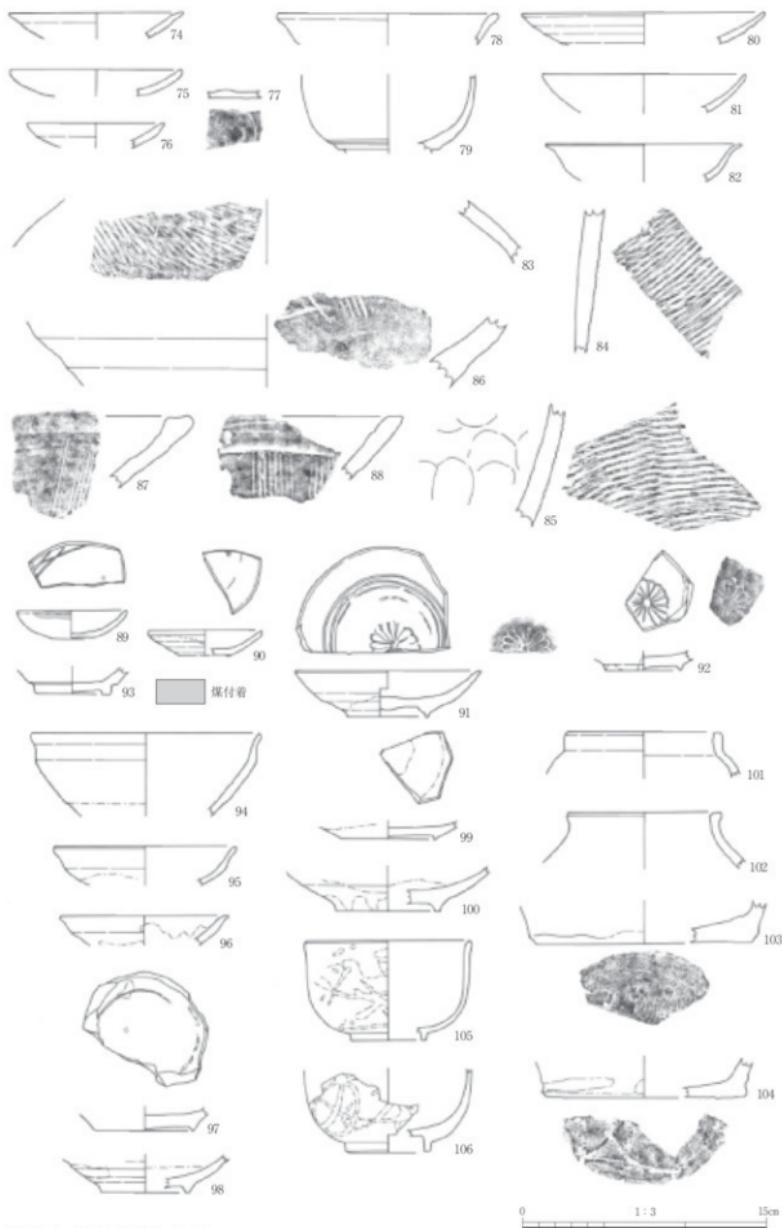
第25図 遺物実測図 (1/3)

SD2 (28) SD112 (29) SD201 (2・6・10・44) SD202 (20) SD251 (11) SD525 (3) SE222 (7)
SI515 (17) SK1 (33・38) SK127 (37) SX505 (40)



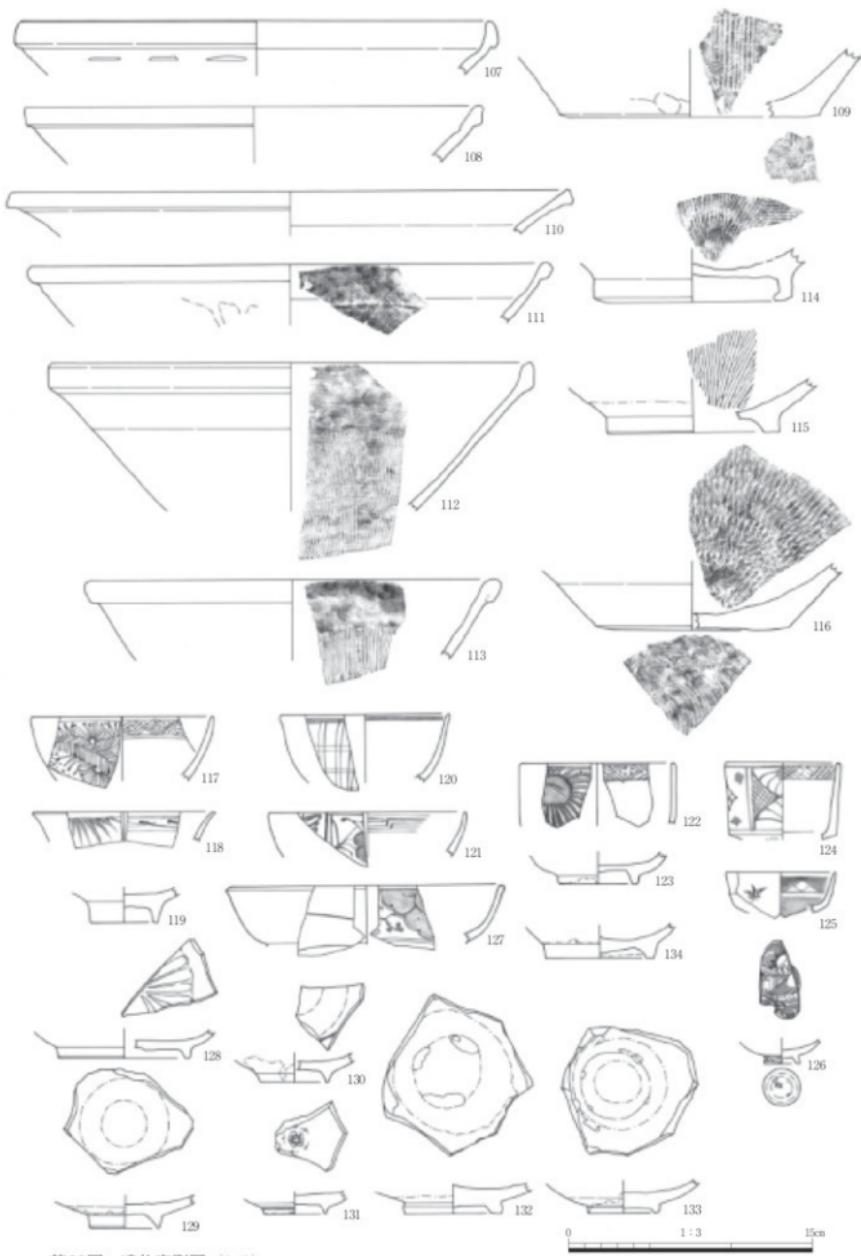
第26図 遺物実測図 (1/3)

SD3 (54) SD109 (72) SD201 (46) SD202 (47・52・67) SD251 (65) SD527 (50) SX610 (49)



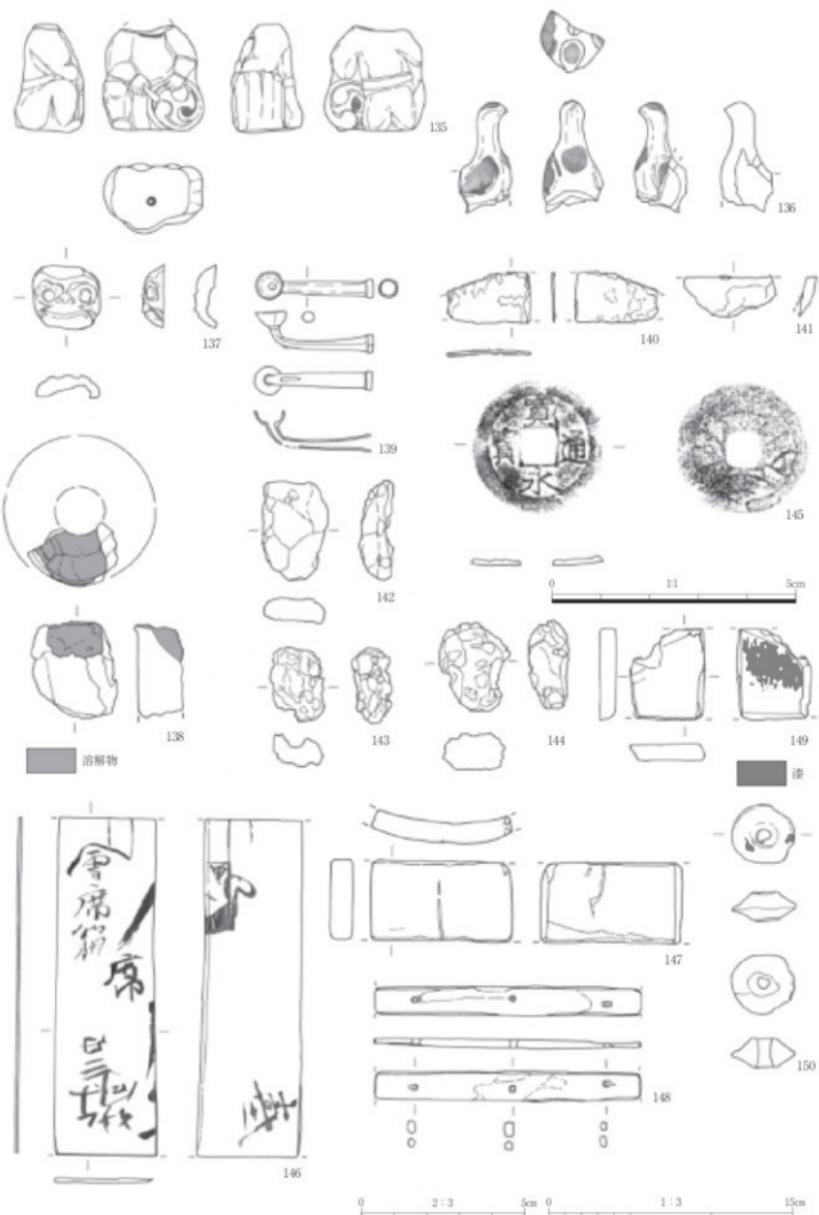
第27図 遺物実測図 (1/3)

SD202(98) SD518(85) SK601(105) SX401(83) SX402(87) SX409(77) SX502(96) SX503(84)



第28図 遺物実測図 (1/3)

SD201 (112・126) SD202 (132) SD527 (110) SD604 (130) SE521 (107) SK601 (122) SX502 (118)



第29図 遺物実測図 (145 1/1, 135~137 · 150 2/3, 138~144 · 146~149 1/3)
SD201 (135 · 145~147 · 149) SD407 (143) SX502 (140 · 150)



第30図 遺物実測図 (151・153~155 2/3, 152・156~163 1/3)

SD201 (157) SD202 (152) SD510 (153) SE508 (163) SE521 (158) SX402 (161) SX502 (160)

第7表 柱穴列一覧

地区	遺構名	柱番号	平面形	法面 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合い	掉回	写真
				長	幅	深						
B1	SA1		円	0.95			土師器、須恵器	古代～中世	J-2種の掘立柱建物か、N-20°-E		14	6
B1	SP114	SA1	円	0.28	0.24	0.30		古代～中世			14	6
B1	SP116	SA1	円	0.32	0.29	0.30		古代～中世		SP116<SD115	14	
B1	SP117	SA1	楕円	0.57	0.41	0.23		古代～中世			14	
B1	SP120	SA1	不整	0.47	0.35	0.31		古代～中世			14	6
B1	SP121	SA1	円	0.62	0.42	0.35		古代～中世			14	
B1	SP122	SA1	不整	0.55	0.47	0.34		古代～中世			14	6
B1	SP124	SA1	円	0.48	0.43	0.40	土師器	古代～中世		SP124>SD120	14	6
B1	SP125	SA1	不整	0.48	0.45	0.42	土師器	古代～中世			14	
B1	SP126	SA1	楕円	0.58	0.17	0.15		古代～中世		SP126<SD112+SD113	14	
B1	SP127	SA1	円	0.67	0.42	0.38	須恵器	古代～中世			14	

第8表 穴穴建物一覧

地区	遺構名	平面形	法面 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合い	掉回	写真
			長	幅	深						
C1	S423	楕丸方	3.66	(1.05)	0.20				S423>SE417, S423<SX416	15	9
C2	SD515	楕丸方	2.28	(1.62)	0.18	土師器、須恵器、灰化材	古代	貼床	SD515>SX502+SX503+SK516	15	9

第9表 溝一覧 (1)

地区	遺構名	種類	法面 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合い	掉回	写真	
			長	幅	深							
A1	SD02	溝	1.80	0.56	須恵器		近世～近代		SD02<SD03	18		
A1	SD03	溝	4.40	0.55	須恵器		近世～近代		SD03>SD02	18		
A1	SD11	溝	3.00	0.25			古代～中世			20		
A1	SD12	溝	0.90	0.07					SD012<SD03	20		
A1	SD13	溝	(0.60)	0.08					SD013>SD02+SD14	20		
A1	SD14	溝	1.22	0.14					SD014>SD03	20		
A1	SD15	溝	0.90	0.07						20		
A1	SD19	溝	0.41	0.11			古代～中世			20		
B1	SD101	溝	2.45	0.26	土師器				SD101>SK932	20		
B1	SD103	溝	0.58	0.23	土師器		近世～近代		SD103>SD104	20		
B1	SD104	溝	0.79	0.07					SD104>SD103	20		
B1	SD105	溝	0.30	0.11					SD105>SD104	20		
B1	SD107	溝	0.96	0.35	土師器		近世～近代			20		
B1	SD108	溝	2.78	0.22						20		
B1	SD109	溝	5.20	0.22	土師器		近世～近代			21		
B1	SD110	溝	0.30	0.15	土師器		古代～中世			20		
B1	SD111	溝	0.39	0.06			古代～中世		SD111<SD112	20		
B1	SD112	溝	3.00	0.37	土師器、須恵器、灰化材				SD112>SD113+SD115+SD112+SD113	14		
B1	SD113	溝	0.54	0.14					SD113>SD114+SD116	14		
B1	SD115	溝	0.82	0.10					SD115>SF116	21		
B1	SD118	溝	0.30	0.08						21		
B1	SD123	溝	0.56	0.07					SD123>SF124	21		
B1	SD128	溝	0.25	0.07						21		
B1	SD129	溝	0.21	0.08					SD129>SD130	21		
B1	SD130	溝	1.54	0.05	須恵器		古代～中世		SD130>SD129	21		
B1	SD131	溝	0.54	0.10						21		
B1	SD132	溝	0.92	0.14						21		
B2	SD201	溝	1.10	0.41	墳上部、土師器、須恵器、伊万里、青磁、白磁、人形、木製品、石製品、金銀製品		近現代				18-19 8	
B2	SD202	溝	(1.10)	0.38	土師器、須恵器、越中漆口、赤津、石製品		近現代				23	
B2	SD208	溝	0.27	0.06					SD208>SK209			
B2	SD215	溝	2.14	0.10						21		
B2	SD217	溝	0.40	0.07					SD217>SD218			
B2	SD218	溝	(0.80)	0.05						21		
B2	SD223	溝	0.54	0.05	土師器、灰化材					21		
B2	SD236	溝	0.60	0.14					SD236>SK237			
B2	SD251	溝	1.04	0.60	埴生土器、土師器		古代～中世			21 8		
B2	SD252	溝	0.82	0.05	土師器		古代～中世			21		
B3	SD301	溝	0.26	0.04						21		
B3	SD302	溝	3.65	0.10						21		
C1	SX401	旧水田区画	(2.00)	1.10	0.20	牛軒土器、土師器、須恵器、埴生器、陶器		近現代			23	
C1	SX402	旧水田区画	(2.00)	0.60	0.17	土師器、珠洲、石製品		近現代			24	
C1	SX405	旧水田区画	(2.00)	0.27	0.06			近現代				
C1	SD407	溝	1.10	0.13	金属製品						21	
C1	SX406	旧水田区画	(2.00)	0.50	0.20	土師器、須恵器、灰化材						
C1	SX409	旧水田区画	(3.30)	(2.90)	0.11	土師器、珠洲						
C1	SD410	溝	0.70	0.09	珠洲							
C1	SD412	溝	2.20	0.10								
C1	SX415	旧水田区画	4.02	(1.10)	0.11							
C1	SD416	旧水田区画	(5.85)	(0.87)	0.08							
C1	SD418	溝	0.66	0.05	被骨 (牛骨馬?)							
C1	SD419	溝	0.63	0.15								
C1	SD420	溝	1.00	0.25								
C1	SD421	溝	0.58	0.27								
C1	SD424	溝	3.82	0.10								
C2	SD501	溝	0.28	0.12	土師器、近世陶器		近現代					
C2	SX502	旧水田区画	24.40	(2.00)	0.14	土師器、須恵器、漏戸美濃、青磁、越中漆口、赤津、近世陶器、伊万里、木製品、石製品、金銀製品		近現代			SD502>SE512+SK511+SD519+SD520	21-24
C2	SX503	旧水田区画	23.90	(0.85)	0.35	土師器、珠洲、須恵器、青磁、金銀製品		近現代			SD503>SE512+SK511	21-24
C2	SX504	北山相当			0.35	土師器、須恵器、青磁、金銀製品					SD504>SE512+SK511	

第9表 溝一覧 (2)

地区	遺構No.	種類	法量 (m)			出土遺物	時期	参考	切り合い	博団	写真	
			長	幅	深							
C2	SD006	溝	1.02	0.23				SD506>SK505		22		
C2	SD510	溝	0.57	0.16		木製品、石製品		SD510>SK502		22		
C2	SD513	溝	0.53	0.09		伊万里				22		
C2	SD518	溝	1.34	0.23		珠洲		SD518<SD519・SD503	23	8		
C2	SD519	溝	1.20	0.68				中世～近代		SD519・SD518、SD519・SD501	23	8
C2	SD520	溝	0.40	0.14				SD520<SE521		23		
C2	SD523	溝	0.97	0.06				近世～近代		22		
C2	SD524	溝	1.41	0.25		土師器、伊万里		近世～近代		22		
C2	SD525	溝	1.00	0.27		赤手土器、土師器、鐵燈器		SD525>SD526		22		
C2	SD526	溝	0.69	0.08		土師器		SD526<SD525		22		
C2	SD527	塹	5.30	1.29		土師器、須恵器、唐津		中世 豪族窯(北館 155m脇、V字状)		22	7	
C2	SD528	旧水田(溝)	2.77	0.26	0.49			現近代 網跡や掘り前の 水田(△面か)	SK528>SE501			
A3	SK602	溝・込み	(1.61)	(1.23)	0.20			SK602>SK603				
A3	SK604	溝	1.63	0.24		土師器、越中繩印、吉津				22		
A3	SK605	溝	0.52	0.17				近現代	SK606>SK607	22		
A3	SK608	角立ち込み	(0.99)	0.27	0.27				中世～近代	上坡部?	23	
A3	SK610	角立ち込み	(1.30)	0.72	0.14	土師器、須恵器		中世～近代	上坡部?	23		
A3	SK611	角立ち込み	(0.99)	1.14	0.2			中世～近代	上坡部?	24		
A3	SK612	角立ち込み	(0.99)	2.44	0.55			上坡部?	上坡部?	24		
A3	SD616	溝	0.67	0.06						24		
A3	SK619	溝・込み	(1.00)	2.44	0.23	土師器、須恵器		古代～中世	SK619・SK620	23		
A3	SD621	溝	(0.52)	0.17		土師器		古代～中世		22		
A3	SD622	溝	0.77	0.11						22-23		

第10表 土坑一覧 (1)

地区	遺構No.	平面形	法量 (m)			出土遺物	時期	参考	切り合い	博団	写真
			長	幅	深						
A1	SK1	格円	0.92	0.54	0.09	土師器、須恵器	古代～中世			17	
A1	SK4	円	0.27	0.16	0.06						
A1	SK5	円	0.39	0.30	0.04						
A1	SK6	不整	1.89	(0.43)	0.08			SK6>SK10			
A1	SK7	不整	0.23	0.18	0.04						
A1	SK8	格円	0.30	0.27	0.06						
A1	SK9	格円	0.28	0.18	0.05						
A1	SK10	格円	0.30	0.22	0.08			SK10<SK16			
A1	SK15	不整	0.70	(0.30)	0.12						
A1	SK17	円	0.24	0.22	0.11						
A1	SK18	円	0.29	0.19	0.02						
A1	SK19	格円	0.26	0.25	0.14						
B1	SK102	井戸(円)	0.77	(0.70)	0.10	頭蓋器	古代～中世	SK102<SD101	17-20		
B1	SK119	円	0.28	0.22	0.11						
B1	SK133	円	0.31	0.29	0.08						
B2	SK203	円	0.35	0.32	0.12						
B2	SK204	不整	0.37	0.32	0.08						
B2	SK205	椭円	0.28	0.20	0.15						
B2	SK206	不整	0.56	(0.22)	0.08						
B2	SK207	円	0.31	0.29	0.12						
B2	SK209	(円)	0.25	(0.20)	0.19			SK209<SD106			
B2	SK210	椭円	0.24	0.18	0.08						
B2	SK211	椭円	0.25	0.19	0.10	土師器	古代～中世			17	
B2	SK212	格円	0.28	0.22	0.14						
B2	SK213	円	0.34	0.31	0.13						
B2	SK214	格円	0.09	(0.33)	0.16						
B2	SK216	不整	0.80	(0.33)	0.07						
B2	SK219	円	0.20	0.18	0.08						
B2	SK220	円	0.21	0.21	0.07						
B2	SK221	円	0.20	0.20	0.11						
B2	SK224	(円)	0.20	(0.12)	0.19						
B2	SK225	(円)	0.20	(0.12)	0.04						
B2	SK226	円	0.32	(0.29)	0.03						
B2	SK227	椭円	0.62	(0.32)	0.03	土師器	古代～中世			17	
B2	SK231	椭円	0.65	0.37	0.06						
B2	SK228	椭円	0.69	0.28	0.04						
B2	SK230	椭円	0.45	0.30	0.05						
B2	SK231	不整	0.54	(0.50)	0.06	土師器	古代～中世	自然地形?		17	
B2	SK232	円	0.23	0.20	0.05						
B2	SK233	不整	1.31	(0.72)	0.06	土師器	古代～中世	自然地形?		17	
B2	SK234	椭円	0.42	0.22	0.06						
B2	SK235	不整	(0.41)	0.30	0.06						
B2	SK237	不整	0.28	(0.20)	0.07			SK237<SD236			
B2	SK238	不整	0.49	0.24	0.21						
B2	SK239	椭円	0.24	0.23	0.10						
B2	SK240	不整	0.60	(0.37)	0.12						
B2	SK241	不整	0.18	(0.10)	0.15						
B2	SK242	不整	0.28	(0.20)	0.31						
B2	SK243	不整	0.39	0.24	0.15						
B2	SK244	不整	0.25	0.20	0.15						
B2	SK245	(円)	(0.40)	0.37	0.19						
B2	SK246	椭円	0.49	0.32	0.18						
B2	SK247	円	0.14	0.13	0.06						
B2	SK248	格円	0.22	0.17	0.15						
B2	SK249	格円	0.50	0.28	0.22						
B2	SK250	円	0.28	0.24	0.17						
B2	SK251	格円	0.22	0.22	0.07						
C1	SK403	(円)	1.28	(0.63)	0.11						
C1	SK404	(不整)	(1.10)	0.83	0.14						
C1	SK406	不整	(1.60)	1.29	0.30					17	
C1	SK413	円	0.93	0.88	0.16					17	
C1	SK414	円	0.29	0.27	0.06						
C1	SK422	不整	0.75	0.47	0.16			SK422<SD410			

第10表 土坑一覧

地区	遺構名	平面形	法量 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合い	邦国	写真
			長	幅	深						
C2	SK506 (円)	0.75 (0.68) 0.09	環状器	古代～中世	SK506<SK506	22					
C2	SK507 不整	0.67 0.54 0.12									
C2	SK509 不整	1.53 0.54 0.06									
C2	SK511 (不整)	0.34 (0.19) 0.05									
C2	SK512 積円	(1.60) 1.46 0.10	筒津か	前世以降	SK512<SK501	16					
C2	SK514 (不整)	(1.23) 1.04 0.21									
C2	SK516 (不整)	1.81 (0.70) 0.08									
C2	SK520 (不整)	2.27 (0.66) 0.15									
C2	SK529 (不整)	0.89 (0.24) 0.24									
A3	SK601 不整	2.10 (1.54) 0.15	鏡・中鏡口?・近世陶器、伊万里	近世以降		16					
A3	SK603 積円	(1.50) 0.40 0.42				SK603>SK602	16				
A3	SK607 積円	(0.54) 0.44 0.22				SK607<SE605 + SD606	16				
A3	SK609 積円	0.47 0.28 0.07									
A3	SK613 積円	0.70 0.32 0.08									
A3	SK614 積円	0.84 (0.47) 0.21									
A3	SK615 積円	(0.66) 0.65 0.13									
A3	SK617 (積円)	(0.28) 0.26 0.18									
A3	SK618 (不整)	0.42 (0.13) 0.14									
A3	SK620 (不整)	(0.72) 0.30 0.22				SK620>SK619					
A3	SK623 (不整)	0.32 (0.20) 0.17									

第11表 井戸一覧

地区	遺構名	平面形	法量 (m)			出土遺物	時期	備考	切り合い	邦国	写真
			長	幅	深						
B2	SE222 円	0.72 0.66 1.01	先史土器・土器類	古代～中世?						17	9
C1	SE417 円	1.23 1.16 0.48		古代～中世?						15	9
C2	SE508 積円	1.23 (0.67) (0.62)	右製品	古代～中世?	内蔵直面土器					16	9
C2	SE521 (積円)	1.58 1.17 0.35	鏡・扇形・越中鏡口?・右製品	古代～中世?	SE521>SD520	16	9				
A3	SE605 積円	1.01 (0.76) 0.57		古代～中世?	SE605>SK607	16	9				

第12表 土製品一覧

邦国	遺物	写真	地区	遺構	出土地点	台帳番号	種類	材質	法量 (cm・g)			備考
									長	幅	厚	
39	135	13	B2	SD201	120 上層	D150001	人形	磁器	3.2	3.1	2.2	22.27
39	136	13	C1		SS1	D150002	鳥形	磁器	3.4	1.9	1.5	4.47
39	137	13	C2		64 下層	D150003	泥面子?	粘土	2.0	2.0	0.7	1.99
39	138	13	C1		84 Ⅱ層	D150003	引子?	粘土	5.9	5.3	2.7	82.33

第13表 金属製品一覧

邦国	遺物	写真	地区	遺構	出土地点	台帳番号	種類	材質	法量 (cm・g)			備考
									長	幅	厚	
39	139	13	C1		30 Ⅲ層	K150003	環管	銅	7.2	2.5	0.8	7.41
39	140	13	C2	SK502	34	K150006	板状	銅	5.1	3.1	0.4	7.05
39	141	13	C2		62 Ⅲ層	K150006	板状	銅	5.6	2.5	0.7	13.28
39	142	13	C2		12 Ⅲ層	K150007	板状	銅	6.0	4.0	2.1	49.62
39	143	13	C1	SD407		K150002	板状	銅	4.5	3.4	2.5	25.29
39	144	13	C1		48 Ⅲ層	K150006	板状	銅	5.4	4.4	2.5	28.06
39	145	13	B2	SD201	130 東	K150003	板?	銅?	2.8	2.7	0.1	3.20

第14表 木製品一覧

邦国	遺物	写真	地区	遺構	出土地点	台帳番号	種類	柄種	法量 (cm)			備考
									長	幅	厚	
39	146	14	B2	SD201	132 下層	M150003	板状	スギ?	1	20.6	6.3	0.2
39	147	14	B2	SD201	131 7層	M150004	扇形板			8.7	5.0	1.4
39	148	14	B2		80 Ⅲ層	M150001	折枝?			16.3	1.9	0.7
39	149	14	B2	SD201	132 7層	M150005	漆油板	ブナ属?	2	56	4.6	1.1
39	150	14	C2	SK502	45	M150001	そろはん生	漆油?	3	20	18	0.8

第15表 石製品一覧

邦国	遺物	写真	地区	遺構	出土地点	台帳番号	種類	石種	法量 (cm・g)			備考	
									名稱	分類	長		
39	151	15	C1		13 Ⅲ層	H150008	石獅	チャート	CH32	3.1	1.3	0.4	
39	152	15	B2	SD202	112 7層	H150004	石製石斧	DS-A	(9.6)	4.2	2.4	134.7	
39	153	15	C2	SD510	15 Ⅲ層	H150005	石斧?	CL-1	1.4	1.7	1.1	1.67	
39	154	15	C2		60 Ⅲ層	H150001	玉未成品	GT	2.2	2.1	1.8	9.36	
39	155	15	A3		7-8 Ⅲ層	H150001	玉未成品	GT	4.5	1.5	1.5	12.60	
39	156	15	C1		7-8 Ⅲ層	H150009	石製石斧	TU	7.9	5.3	2.3	29.18	
39	157	15	B2	SD201	123 上層	H150004	石獅	SH	(14.2)	7.1	1.5	158.83	
39	158	15	C2	SE521	45	H150004	石獅	TU	(5.9)	(4.9)	(3.9)	10.72	
39	159	15	C1		87 表様	H150005	鷹性磁灰岩	(4.0)	4.0	1.9	35.21	被熱	
39	160	15	C2	SK502	41 bセラフ	H150010	石獅	TU	(4.4)	3.9	2.0	52.67	
39	161	15	C1	SK402	50	H150006	石獅	TU	(6.8)	(4.9)	(2.4)	80.06	被熱
39	162	15	B1		78 Ⅲ層	H150002	石獅	SH-4	(6.5)	(4.3)	(1.2)	42.93	
39	163	15	C2	SE508	下層	H150012	円盤	Q-T	4.9	3.8	2.6	66.31	舟戸底上

第16表 土器・陶磁器一覧 (1)

埠固	遺物	地区	遺構	出土地点	種類	器種	法量 (cm)				時期	鉢土色	備考	
							口径	底高	底径	高台径				
1	10	C1-1	84 II層	馬牛上器?	鉢?		25.4				ROYR/4	にふい黄褐色	内面保付着?	
2	10	B2	SD031	140西	馬牛上器?	鉢?	20.8				ROYR/4	にふい黄褐色	内面保付着?	
3	10	C2	SD025		馬牛上器?	鉢?	13.0				ROYR/3	にふい黄褐色	内面保付着?	
4	11	B1	39 II層	馬牛上器?	鉢?		6.7				25Y6/4	にふい黄褐色	風化により表面剥離(調査不可)	
5	10	A3	34 II層	馬牛上器?	鉢?						ROYR/6	2	灰黃褐色	
6	10	B2	SD031	E23中	馬牛上器?	鉢?	3.3				SYR6/6	褐色	底部地盤露出?	
7	10	B2	SE/222		馬牛上器?	鉢?	4.8				ROYR/3	にふい黄褐色	外面保付着?	
8	11	B2	65西	馬牛上器?	鉢?						25YB6/6	褐色	外面剥離のため調査不実現	
9	10	C1-2	83東	馬牛上器?	鉢?						ROYR/4	にふい黄褐色	底部保付 丸底10cm	
10	10	B2	SD031	E23中	馬牛上器?	鉢?					25Y7/2	灰黃褐色	風化による調査不実現	
11	10	B2	SD025		馬牛上器?	鉢?					SYR7/1	褐色		
12	10	C1-2	130 西	馬牛上器?	鉢?						25YB6/4	にふい褐色	風化による調査不実現	
13	10	B2	33東	馬牛上器?	鉢?						SYR7/6	褐色		
14	11	B1	46 II層	銀色器	杯鉢?	杯鉢	11.3	3.4	6.5	8C~	5Y6/1	灰褐色		
15	11	B1	54 II層	銀色器	杯鉢?	杯鉢	10.5	4.9	6.9	8C~9C	25Y6/1	灰黃褐色		
16	11	B2	101西	銀色器	杯鉢?	杯鉢	9.8				3Y5/1	褐色		
17	11	S2	SD515		銀色器	杯鉢?					5Z/8~	25Y6/1	灰黃褐色	
18	11	C1-2	89 II層	銀色器	杯鉢?	杯鉢	13.8				7/1	灰褐色		
19	11	B1	51 II層	銀色器	杯鉢?	杯鉢				(100)	3Y6/4	にふい褐色		
20	11	B2	SD0312下層	112	銀色器	杯鉢?	杯	12.2			5Y6/1	灰褐色		
21	11	B2	63東	銀色器	杯鉢?	杯	12.8				SYR6/1	灰褐色	L3縁部剥付着	
22	11	B2	8 II層	銀色器	杯鉢?	杯					5Y5/1	灰褐色		
23	11	B1	122	銀色器	杯鉢?	杯					25Y5/1	灰黃褐色		
24	11	B1	E22 II層	銀色器	杯鉢?	杯					SYR6/1	灰褐色		
25	11	A1	2 II層	銀色器	杯鉢?	杯					3Y5/1	灰白色		
26	11	C1-2	67 II層	銀色器	杯鉢?	杯					5Y5/1	灰褐色		
27	11	B2	109東	銀色器	杯鉢?	杯					25Y5/1	灰褐色		
28	11	A1	SD02下層	111 II層	銀色器	杯鉢?	杯				6.6	25Y5/1	灰黃褐色	
29	11	B1	SD112	32	銀色器	杯鉢?	杯				9.1	5Y6/1	灰褐色	
30	11	A1	10 II層	銀色器	杯鉢?	杯B					10.0	25Y6/1	灰黃褐色	
31	11	A3	28 II層	銀色器	杯鉢?	杯A					25Y7/2	灰黃褐色		
32	11	B2	23要 II層	銀色器	杯鉢?	杯					N5/2	褐色		
33	11	A1	SK1		銀色器	杯鉢?					9C~	5Y5/1	灰褐色	
34	11	B1	SD02下層	15 II層	銀色器	杯鉢?	杯				10YR/4	にふい黄褐色		
40	11	C2	SX506		銀色器	杯鉢?	杯				N6/2	褐色		
41	11	B2	128中	II層	銀色器	杯鉢?	杯				25Y6/2	灰褐色	堅部安部	
42	11	A3	110東	II層	銀色器	杯鉢?	杯				3Y4/1	灰褐色	堅部化粧	
43	11	A1	35	1層	銀色器	長颈瓶					10YR4/1	褐火色		
44	11	B2	SD031	123P	銀色器	杯?					25Y7/1	灰白色	堅部沈済	
45	11	A1	21 II層	銀色器	底付?	底付					25Y6/1	灰黃褐色		
46	11	B2	SD030下層	132	銀色器	耳対板					9C~	10Y5/1	灰褐色	
47	11	B2	SD030下層	112	銀色器	耳対板					9C~	25Y5/1	灰黃褐色	
48	11	A1	SD030下層	17北	銀色器	耳対板					25Y7/1	灰白色	要帶	
49	11	A3	SX610		銀色器	耳対板					SYR5/1	褐色		
50	11	C1-2	SD02下層	100 西	銀色器	耳対板?					5Y5/1	褐色		
52	11	B2	SD032	116東	銀色器	耳対板?					25Y6/1	灰褐色	難捲或枝状	
53	11	A1	119 II層	銀色器	耳対板?						25Y6/1	灰褐色		
54	11	A1	SD03下層	7北	銀色器	耳対板?					25Y5/1	灰褐色		
55	11	B1	59 II層	銀色器	耳対板?						N4/	灰褐色		
56	11	B1	38 II層	銀色器	耳対板?						5Y5/1	灰褐色		
57	11	B1	42 II層	銀色器	耳対板?						N4/	灰褐色		
58	11	B1	42東	II層	土器器	鉢	14.4	(5.0)	6.3	9C~10C	25Y6/4	にふい褐色	内面剥離影、堅部付毛切り痕	
59	10	B1	42 II層	II層	土器器	鉢	12.4			9C~10C	25Y7/3	浅黄色	内外面剥離影、堅部付毛切り痕	
60	10	B2	12中	II層	土器器	鉢	12.8			10YR2/4	にふい黄褐色	内面剥離影?		
61	10	B1	SD109		土器器	鉢	11.6	4.0	4.5	9C~10C	25YB6/6	褐色	内面剥離影、堅部付毛切り痕	
62	10	A1	SD109		土器器	鉢				10YR2/4	にふい黄褐色	内面剥離影?		
63	10	A1	61 且	II層	土器器	鉢				25YB6/6	褐色	堅部高付毛		
64	10	B1	49 II層	II層	土器器	鉢				SYR7/6	褐色	堅部高付毛系切引瓶		
65	10	B2	SD025下層	7北	土器器	鉢?					25YB6/8	褐色	堅部高付毛系切引瓶	
66	10	B2	140東	II層	土器器	鉢					10YR6/3	にふい黄褐色	内面剥離?	
67	10	B2	SD020下層	119	土器器	鉢	12.6	2.3	5.6	10C	25Y7/2	にふい褐色	堅部高付毛系切引瓶	
68	10	B1	42 II層	II層	土器器	鉢	13.5				25Y7/3	浅黄色		
69	10	B2	69中	II層	土器器	鉢?				10C	10YR2/3	にふい黄褐色	内面剥離付着	
70	10	A1	95北	II層	土器器	鉢?				9C	25Y7/4	浅黄色		
71	10	B2	155		土器器	鉢?					25Y7/4	にふい褐色		
72	10	B1	SD109	45	土器器	鉢?					10C	10YR6/4	にふい黄褐色	
73	10	B2	89東	II層	土器器	鉢?					10C	25Y7/2	にふい黄褐色	
74	10	C1-2	77 II層	中世土器	皿		10.6				25YB6/4	にふい褐色	内面剥離付着	
75	10	C1-1	87 II層	中世土器	皿		10.4				10YR6/4	にふい褐色		
76	10	C1-1	90 II層	中世土器	皿		8.2				25Y6/3	にふい褐色		
77	10	C1-2	SX409		中世土器?	皿					10YR6/4	にふい褐色	内面剥離付着	
78	12	A1	60 土器	青釉	碗						SYR8/1	灰褐色		
79	12	C1-1	89東	青釉	碗						SYT7/1	灰褐色	輪: 75Y6/9A オリーブ色	
80	12	C1-1	32 II層	白釉	碗						10C	25Y8/1	灰白色	輪: 75(5)6/1 オリーブ色
81	12	C1-1	196 II層	白釉	碗						25Y8/1	灰白色	輪: 75(5)6/1 灰白色	
82	12	C2	SD025下層	2 II層	白釉	碗					25Y8/2	灰白色	輪: 75(5)7/1 灰白色	
83	C1-2	SX401	20	珠陶	碗?						25Y5/1	灰褐色		
84	C2	SX503	55	珠陶	碗?						SY5/1	1灰褐色		
85	C2	S0518		珠陶	碗?						25Y5/1	灰褐色		
86	C1-2	SX402	39	珠陶	深鉢?						25Y5/1	灰褐色		
87	12	C2	SX402	39	珠陶	深鉢?					SY5/1	灰褐色		
88	12	B1	8 II層	珠陶?	深鉢?						25Y6/1	にふい褐色	輪: 75(5)6/1 壓目	
89	12	C2	54 II層	漏斗?	小皿	6.6	1.7	2.5			10YR6/3	にふい褐色	輪: 75(5)6/1 漏斗?	
90	12	A3	22 II層	漏斗?	小皿	6.9	1.5	3.2			25Y7/1	灰白色	輪: 75(5)7/1 漏斗?	

第16表 土器・陶磁器一覧 (2)

編図	遺物	写真	地区	遺構	出土地点	種類	器種	尺度 (cm)			時期	船上色		備考	
								上径	底高	底径		記号	色名		
25	91	12	C1-2		65 II層	縹口?	皿	11.2	28	5.0	25Y7/1	灰黄色		種: 25Y5/4 黄褐色, 16段 縹口: 3重の縹止め	
	92	12	C2		28 II層	縹口?	皿			4.6	5YR6/6	橙色		種: 5Y8/19K, 白色, 印文付	
	93	12	A1		46北 II層	縹口? 瓦片	皿			4.6	25Y7/4	淡黄色		種: 25Y5/3(縹褐色) 裏 種: 75YR3/3(縹褐色) 黄褐色, 探査者	
	94	12	C2		11 II層	縹中縹口?	瓦片	14.0			25Y7/1	灰白色		種: 75YR4/4 黄褐色(鉄輪)	
	95		C2		61 II層	縹中縹口?	瓦片	11.0			75YR6/4	に赤い橙色		種: 75YR3/3(縹褐色) 鉄輪	
	96		C2	SK602	48	縹中縹口?	瓦片	10.2			10YR7/4	に赤い黄褐色		種: 25Y6/6(鉄輪) 鉄輪	
	97		B1		40 II層	縹中縹口?	瓦片			5.9	25Y7/3	浅黄色		種: 25Y5/2(縹褐色) 裏 種: 75YR2/2(縹褐色) 裏	
	98	12	B2	SD602	115 下層	縹中縹口?	瓦片			5.5	75YR5/3	に赤い褐色		種: 75YR5/3(縹褐色) 裏	
	99	12	C2		11 II層	縹中縹口?	瓦片			5.8	10YR6/4	に赤い黄褐色		種: 75YR5/3(縹褐色) 裏	
	100	12	C1-2		130 II層	縹中縹口?	瓦片			6.4	25Y7/3	浅黄色		種: 10YR3/3(縹褐色) 裏 種: 内面保形土	
26	101	12	C1-2		70 II層	縹中縹口?	瓦片	9.3			25YR7/4	に赤い橙色		種: 5YR3/3(縹褐色) 種: 25Y6/6(鉄輪)	
	102	12	C1-1		131 II層	縹中縹口?	瓦片	9.4			10YR7/4	に赤い黄褐色		種: 75YR4/4(鉄輪)	
	103		C2		28 II層	縹中縹口?	匣跡?			13.2	25Y6/3	に赤い黄褐色		種: 25Y6/6(鉄輪)	
	104		A3		22 II層	縹中縹口?	匣跡			12.2	10YR7/3	に赤い黄褐色		種: 25Y5/3(縹褐色) 種: 10YR7/3(縹褐色)	
	105	12	A3	SK601		縹中縹口?	瓦片	9.9	6.1	4.5 19C	25Y6/3	に赤い黄色		種: 25Y5/2(縹褐色)	
	106	12	C2		70 II層	小籽?	瓦片			5.2	25Y7/2	灰黄色		種: 5Y5/1(縹褐色) (網 紋) (縹褐色) (切口)	
	107		C2	SE521		縹中縹口?	瓦片	28.5			10YR8/3	浅黄色		種: 5YR4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	108		B1		40 II層	縹中縹口?	瓦片	28.0			10YR7/4	に赤い黄褐色		種: 5YR4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	109		C1-2		130 II層	縹中縹口?	瓦片			16.0	10YR8/4	浅黄色		種: 75YR4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	110		C2	SD627		音津?	瓦片				25Y5/2	暗褐色		種: 75YR3/3(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
27	111		C2		59 II層	音津?	瓦片	31.6			75YR5/3	に赤い褐色		種: 75YR4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	112	12	B2	SD601	132中	近世陶瓶	瓦片	29.4			5YR5/6	明示褐色		種: 75YR3/3(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	113		A3		99II溝	近世陶瓶	瓦片	24.8			25Y7/3	浅黄色		種: 75YR2/3(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	114		C2		69 II層	音津?	瓦片			12.2	10RS/4	赤褐色		種: 75YR4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	115		A3		3 II層	近世陶瓶	瓦片			10.4	10YR7/4	に赤い黄褐色		種: 5YR2/2(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?) 113と同 種: 10YR7/4(縹褐色)	
	116	12	C2		70 II層	音津?	瓦片			11.8	25YR5/3	に赤い赤褐色		種: 25YR3/3(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (切口?)	
	117	12	C1-1		90 II層	伊万里?	瓦片	11.0			N8/	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 四方擦付	
	118	12	C2	SK602	40	伊万里?	瓦片	11.0			10YR7/1	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 四方擦付	
	119		C2		66 II層	伊万里?	瓦片?			4.2	25Y8/1	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 四方擦付	
	120	12	A3		3 II層	伊万里?	瓦片	10.2			5Y7/1	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 四方擦付	
28	121	12	C1-1		50 II層	伊万里?	瓦片	12.0			75Y8/1	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 四方擦付	
	122	12	A3	SK601		伊万里	通ふ柄	9.3			18C早~ 1810年代	25Y8/1	灰白色		染付: 10RG3/3(くする 青色) 亂擦剥離, 亂方擦付
	123	12	B1		地上	音津?	瓦片?				4.9	25Y6/2	灰黄色		染付: 10RG3/3(くする 青色) 亂擦剥離, 亂方擦付
	124	12	C2		70 II層	伊万里?	瓦片A柄	7.0			18C後半~ 1810年代	75Y8/1	灰白色		染付: 50G4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (乱擦剥離, 乱方擦付)
	125	12	C2		61 II層	伊万里?	杯?	6.6			17C後半~ 18C	5YB/1	灰白色		色付: 75Y8/4(8.6色) 一 部付
	126	12	B2	SD601下層	120	伊万里?	杯?				22 17C後半~	N8/	灰白色		染付: 25P9/2(くする 青色) 亂擦剥離, 亂方擦付
	127	12	C2		62 II層	伊万里?	瓦片	16.4			75Y8/1	灰白色		染付: 25H7/7(剪刀) (オリ... ブ色) 亂の四形高台 割付	
	128	12	A3		3 II層	伊万里?	瓦片?				8.0	18C~ 5YB/1	灰白色		染付: 10YV8/1(8.6色) 亂 方擦付
	129	12	A3		20 II層	伊万里?	瓦片			4.2	N8/	灰白色		染付: 10G5/1(8.6色) 亂 方擦付	
	130	12	A3	SD604		伊万里	瓦片			4.2	25Y7/4	浅黄色		染付: 10G5/1(8.6色) 亂 方擦付	
	131	12	C1-2		20 I層	伊万里?	瓦片?			3.8	25Y8/1	灰白色		染付: 25P9/3(くする 青色) 手引き瓦方擦付	
	132	12	B2	SD602中層	110	音津	瓦片			6.0	25Y7/2	灰黄色		染付: 35G4/4(縹褐色) (赤 褐色) (赤褐色) (乱擦剥離, 乱方擦付)	
	133	12	C1-1		115 II層	音津	瓦片?			4.2	10YR7/3	に赤い黄褐色		種: 75Y6/1(8.6色) (縹 緑色)	
	134	12	B2		158西 II層	音津?	音津?			6.6	75YR5/3	に赤い褐色		種: 10YR2/1(8.6色) (縹 緑色)	

第IV章 自然科学分析

1 樹種同定

(1) はじめに

常願寺川下流左岸の沖積平野に立地する平榎亀田遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、溝跡である S D201から出土した木製品2点、不明遺構である S X502から出土した木製品1点の、計3点である。時期については、発掘調査所見ではいずれも中世～近世と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹であるスギ1分類群と、広葉樹であるブナ属とツバキ属の2分類群の、計3分類群がみられた。S D201の板材がスギ、漆塗板がブナ属、そろばん玉がツバキ属であった。同定結果を第17表に示す。

第17表 平榎亀田遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

試料No.	地区	遺構	地点	台帳番号	遺物No.	器種	樹種	木取り	備考	時期
1	B 2	S D201	132 下層	M150003	146	板材	スギ	柾目	両面墨書きあり	中世～近世
2	B 2	S D201	132 下層	M150005	149	漆塗板	ブナ属	板目	赤色漆塗り	中世～近世
3	C 2	S X502	45	M150011	150	そろばん玉	ツバキ属	芯去削出	孔あり 漆塗りか？	中世～近世

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

A スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真1 1a-1c (No.1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

B ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真1 2a-2c (No.2)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4列のものと広放射組織がみられる。ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帶の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なイヌブナの材は重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

C ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 写真1 3a-3c (No.3)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～3列となる。ツバキ属にはヤツツバキやサザンカなどがあり、ヤツツバキは本州、四国、九州の温帶に、サザンカは山口県以南の温帶南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

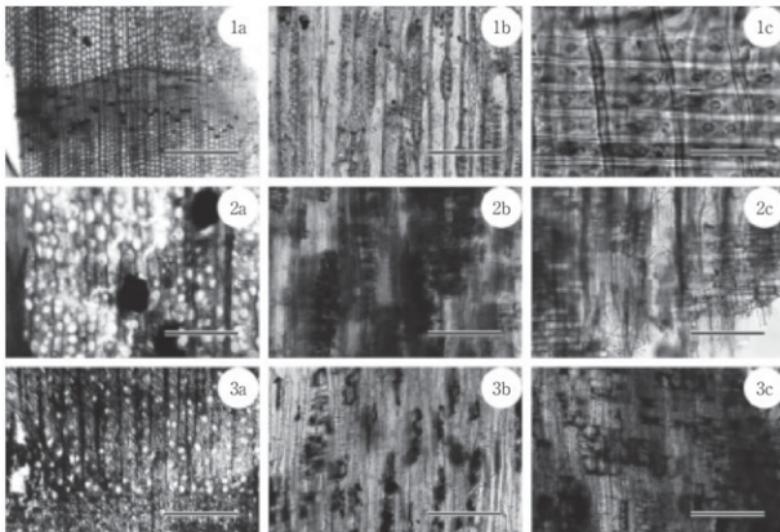
(4) 考察

板材はスギであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ（伊東ほか, 2011）。また漆塗板は、ブナ属であった。ブナ属はやや堅硬な樹種で（伊東ほか, 2011）、漆椀などの漆製品に多く利用される樹種である（伊東・山田編, 2012）。そろばん玉は、ツバキ属であつた。そろばん玉の樹種同定は、東京都の筑土八幡町遺跡などで戦国時代～江戸時代頃のものが行われており、サクラ属とタケツア科と同定されている（伊東・山田編, 2012）。当遺跡はツバキ属で、異なる樹種が利用されていたが、地域による用材傾向の差なのか、時期による用材傾向の差なのかは確認できなかった。

（株式会社パレオ・ラボ 小林克也）

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。



1a-1c.スギ (No.1), 2a-2c.ブナ属 (No.2), 3a-3c.ツバキ属 (No.3)

a : 横断面 (スケール = 500μm), b : 接線断面 (スケール = 200μm), c : 放射断面 (スケール = 1 : 50μm・2-3 : 200μm)

写真1 平櫻龜田遺跡出土木材の光学顕微鏡写真

第V章 総括

平榎亀田遺跡は水田地帯に広がる広大な遺跡である。調査は遺跡の南西側を中心に大きなトレンチを6本入れたような状態で、古代から近現代にかけての遺構・遺物を確認したが、調査区幅が狭く全体像は不明である。ここでは、遺物の分布から遺跡の変遷について検討し総括したい。

1 遺物の分布と集落変遷

(1) 地理的な環境

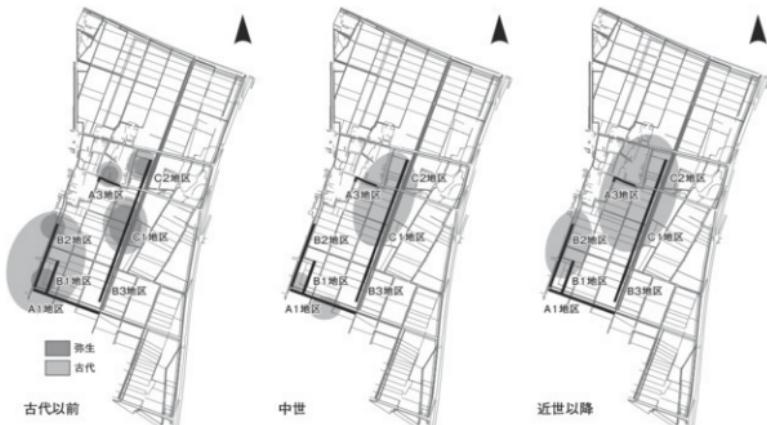
遺跡の立地する常願寺川左岸の平野部では、幾度となく流路を変えてきた常願寺川の旧河道が網の目のように広がり、旧河道の間に微高地が点在している(第3図)。遺跡はこの微高地上を中心に分布している。平榎亀田遺跡は現在常願寺川左岸の川縁から水田地帯にかけ広がっているが、本来は河道からもう少し離れた微高地上に立地している。現在の常願寺川は、明治24(1891)年の大洪水の後のヨハネス・デ・レークによる河川改修工事で付け替えられた河道であり、川幅も約150間(273m)から約200間(364m)に拡大されたものである。

(2) 時期別の遺物分布

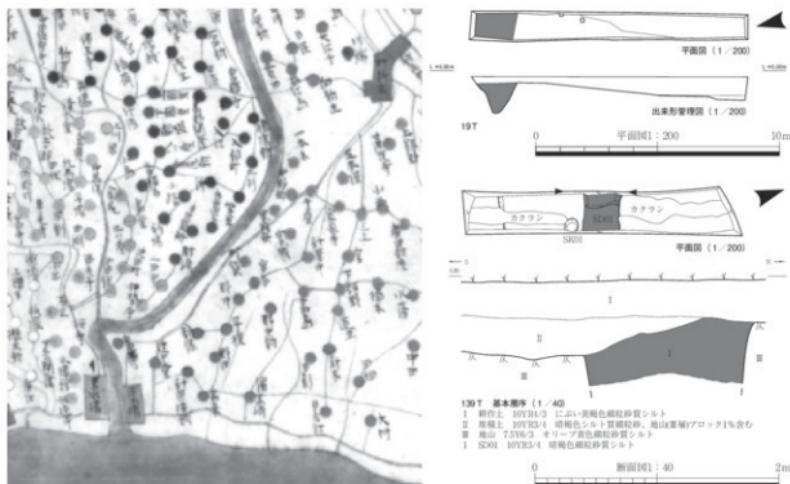
遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・瀬戸・越中瀬戸・伊万里・唐津などの土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品など少量ではあるが多様なものが出土しており、古代と近世以降のものが主体となる。これらの時期別分布を、第31図に示した。今回の調査で出土した遺物のうち、最も古いものは弥生時代のもので、B2地区北側、C1中央～C2地区に分布の中心があるが、摩耗した破片が多く、周辺からの流れ込みと考えられる。古代の遺物は比較的まとまって出土しており、A1地区西側～B1・B2地区及びC1地区北半～C2地区に二極化する。中世の遺物は少なく、C1地区北半～C2地区に集中する。近世以降の遺物分布は、B2地区北半、A3地区、C1地区北半～C2地区を中心としている。

(3) 集落の変遷

平榎亀田遺跡では、弥生時代の遺物も出土しているが、散布地の域を出す²、集落が形成されるのは、古



第31図 時期別遺物分布図



第32図 平櫻城関連遺構位置図 (1/2000)

※浜松市教育委員会作成、試掘トレンチ位置図・平櫻城・王塙図に一部加筆

代になってからと言える。古代の遺物分布はB1・B2地区を中心とする南プロックとC1～C2地区を中心とする北プロックに二極化しており、南プロックでは柱穴列、北プロックでは堅穴建物が確認されている。その後の中世、近世の遺物分布は、北プロックが中心となるが、中世以降の遺構は、溝が中心となり、集落の様相は不明となる。平榎亀田遺跡は、常願寺川の旧河道間に点在する微高地の1つから、現常願寺川の河川敷にかけて広がっており、平榎亀田遺跡の古代集落は、遺跡西側の土地の安定した微高地上を選んで形成されている。中世以降では、水路や水田区画などの耕作に関連した遺構を確認しております。集落の中心は古代集落よりやや北西側に移り、現代の平榎集落とはほぼ重なると推定される。

2 堀 S D 527について

平榎亀田遺跡周辺の平榎地区には、天正年間に落城したと伝えられる「平榎城」があったとされている。平榎城は、史料にわずかに出てくるが実態の明らかでない幻の城とされてきた。今回の調査で確認されたS D 527は、その形態から薬研堀と考えられ、平榎城との関連について検討したい。

平榎城は、嘉吉3(1443)年まで、河内国枚方の枚方城主であった塙崎(野崎)政光の子、筑前守政彌が永正元(1504)年8月に築城した城で、天正(1573～1591)の初めの頃に上杉謙信により落城したと伝えられている^{注2}。常願寺川流域は、洪水などの土砂災害を繰り返し受けており、天正8(1580)年から安政5(1858)年までの約280年間に24回を数え、平榎城はこうした土砂災害によって消失したと考えられている。

城跡は、河川改修後の常願寺川左岸河川敷から水田一帯にかけてが、その比定地とされている。堤防西側の平榎村18番地字南早稲田割一帯は、「東の宮」と称され葦などの生える沼地で、現在平榎集落の西側に位置する住吉社の旧宮地である。この住吉社は政彌が河内国枚方より平榎に移る際に、枚方城内に鎮守していた住吉社・玉津嶋社・入丸社の三社を平榎城内へ移したものとされており、河川改修工事に伴い現地に移転している。平榎城の中心はこの住吉社跡地「東の宮」の東側、河川改修により河川敷となった辺りにあるとされている。また、C2地区西側は宇屋敷割、屋敷東割と称し、微高地上となり、野崎氏の家老林久兵衛市良の屋敷跡と想定されている。

S D 527は、この住吉社跡「東の宮」と家老屋敷跡との間に位置している。東西方向の2条の堀が重複しており、南堀がある程度埋まった後、北堀を掘り込んでいる。このS D 527北堀は断面V字状の薬研堀で、富山市教育委員会の試掘調査の19T・139T・141Tなどで確認された堀跡に連なると考えられる。昭和50年代には、家老屋敷跡と想定される一角にある仲田氏宅には隣家との南境と西境に、屋敷堀の跡がわずかに残っていたとされ^{注3}、S D 527は、平榎城及び家老屋敷跡の一角である可能性が高い。平榎の地は、常願寺川河口に近く、海岸線や常願寺川沿いを通る街道などの交通の要所にある。また、射水・越後・能登の三郡を勢力下におく神保氏と新川郡の椎名氏の領地の中間地点でもある。平榎城はこうした交通・軍事の要所に位置する城館で、規模は不明だが、堀を巡らし、家臣の屋敷地が脇を固めていたと想定できる。

(金三津道子)

注

注1 (一財)高榎会蔵・射水市新湊博物館保管『清國 上下新川郡略絵図』(安政～明治初年)より一部抜粋。石黒信由が文政7(1824)年加賀藩に提出した都圖をもとにした写図。

注2 「前田文書経日録」(八) 富山県立図書館蔵
前田文書は、富山藩主前田家伝来の437点におよぶ史料群で、江戸中期～明治末期のもの。写本、記録、絵図等。大火等の焼失のためか、後の写し替えが多くみられるが、富山藩政研究の基本資料である。

注3 須森 英夫 1980 『平榎城』小泉印刷所

引用・参考文献

国土交通省北陸地方整備局・国土交通省国土地理院 2006 『古地理で探る越中・加賀の変遷』

須森 英夫 1980 『平榎城』小泉印刷所

富山県埋蔵文化財センター 2006 『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』

富山市 1987 『富山市史』通史<上巻>

富山市浜黒崎自治振興会 2000 『浜黒崎の近現代』



平櫻龜田遺跡

1



平櫻龜田遺跡

2

航空写真

1. 1946年 米軍撮影 2. 1961年 国土地理院撮影

図版2



航空写真

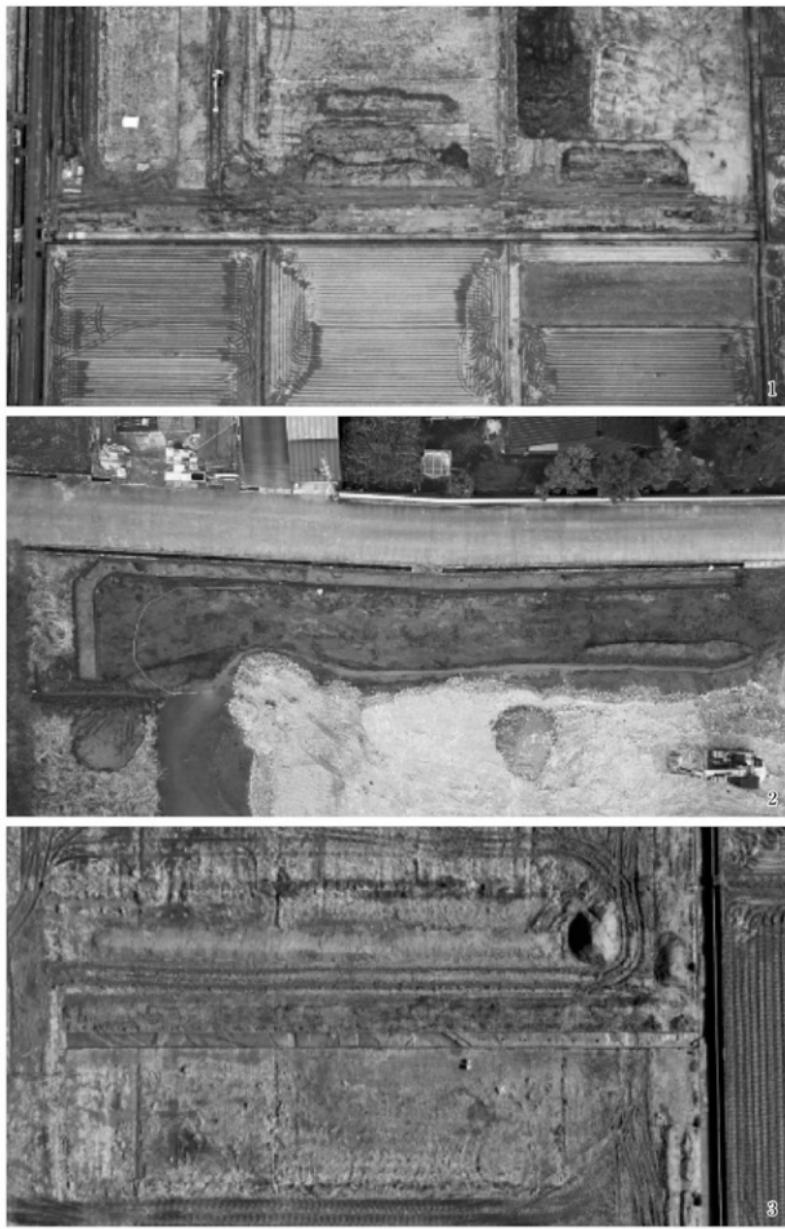
2007年 国土地理院撮影



遺跡遠景

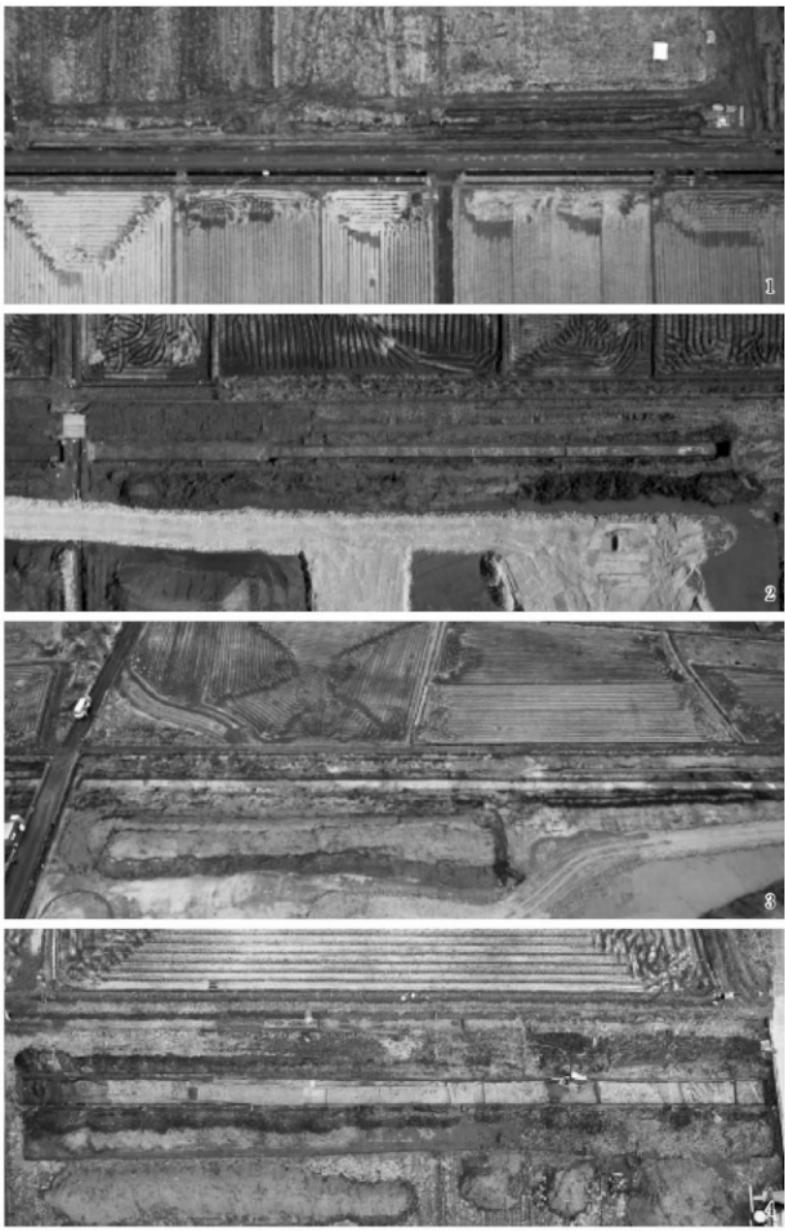
1. 南西から 2. 北から

図版4



遺跡全景

1. A1地区（真上から） 2. A3地区（真上から） 3. B1地区（真上から）



遺跡全景

1. B2地区（真上から） 2. B3・C1地区（真上から） 3. C1地区（真上から） 4. C2地区（真上から）

図版6



1



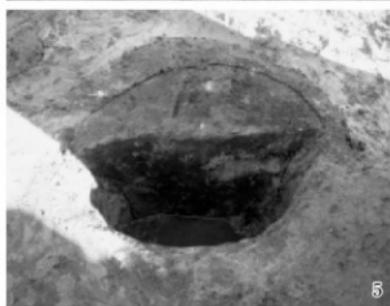
2



3



4



5

柱穴列

1. SA1 (北西から) 2. SP114 (南から) 3. SP120 (南から) 4. SP122 (南西から) 5. SP124 (西から)



1

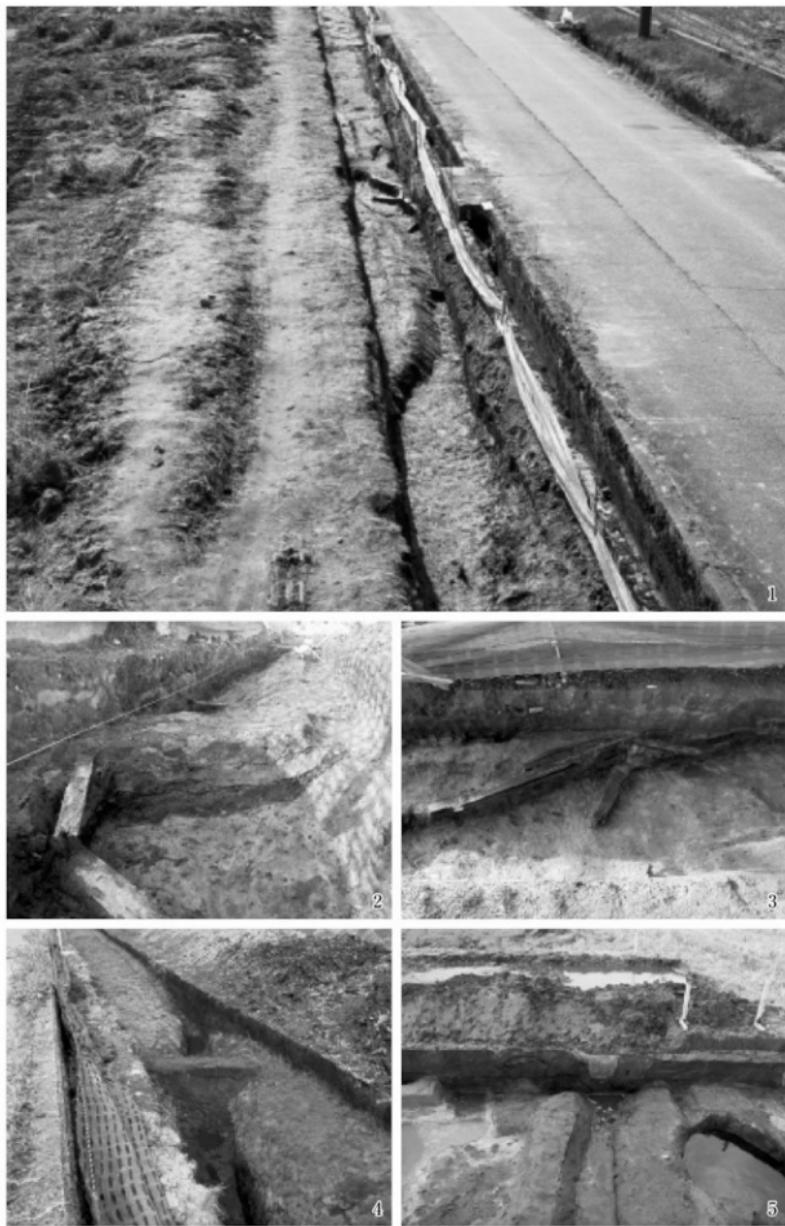


2

遺跡全景・堀

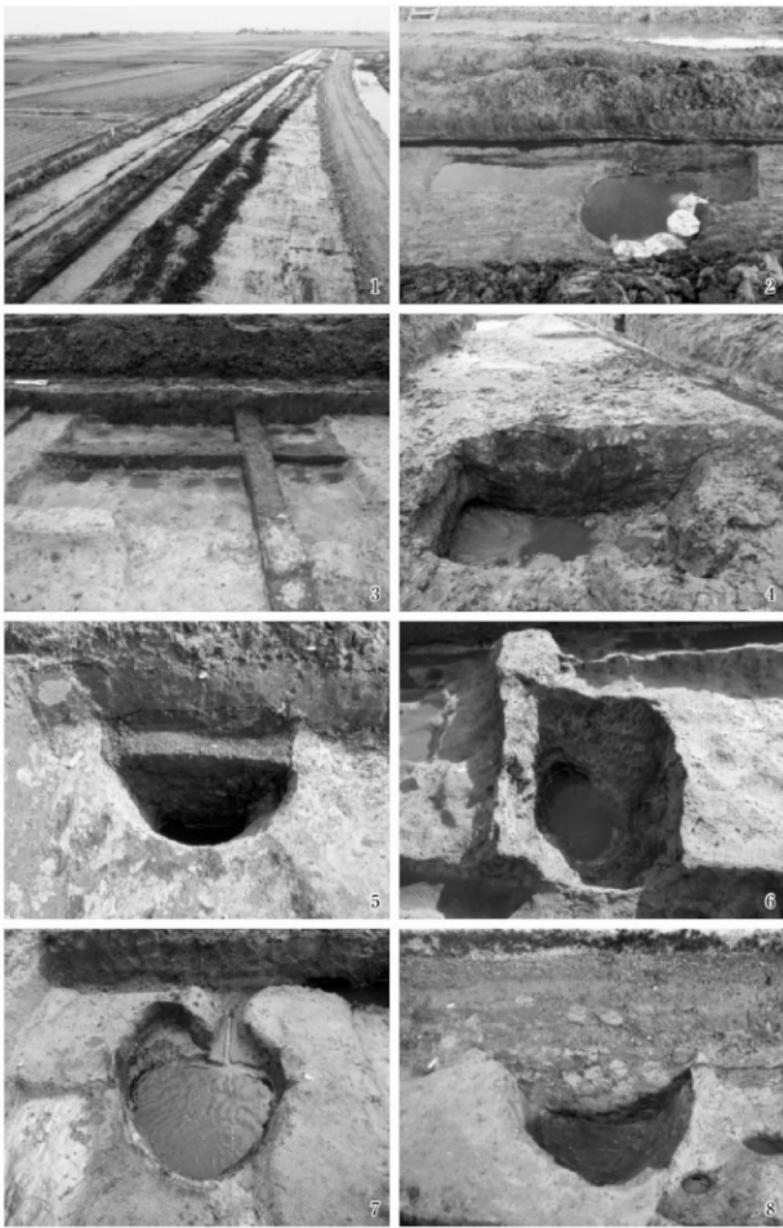
1. C2地区（北から） 2. SD527（東から）

図版8



溝

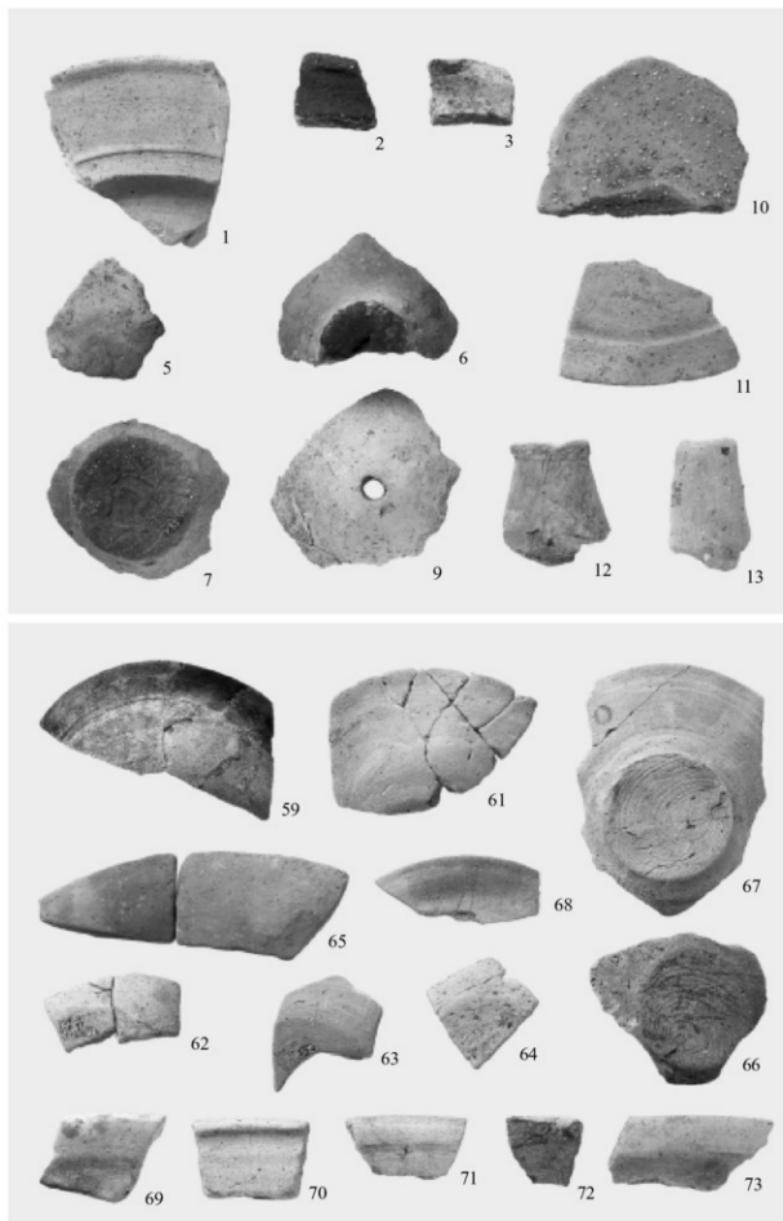
1. SD201（北から） 2. SD201（南から） 3. SD201本製品出土状況（東から） 4. SD251（南から）
5. SD518・SD519（東から）



竪穴建物・井戸

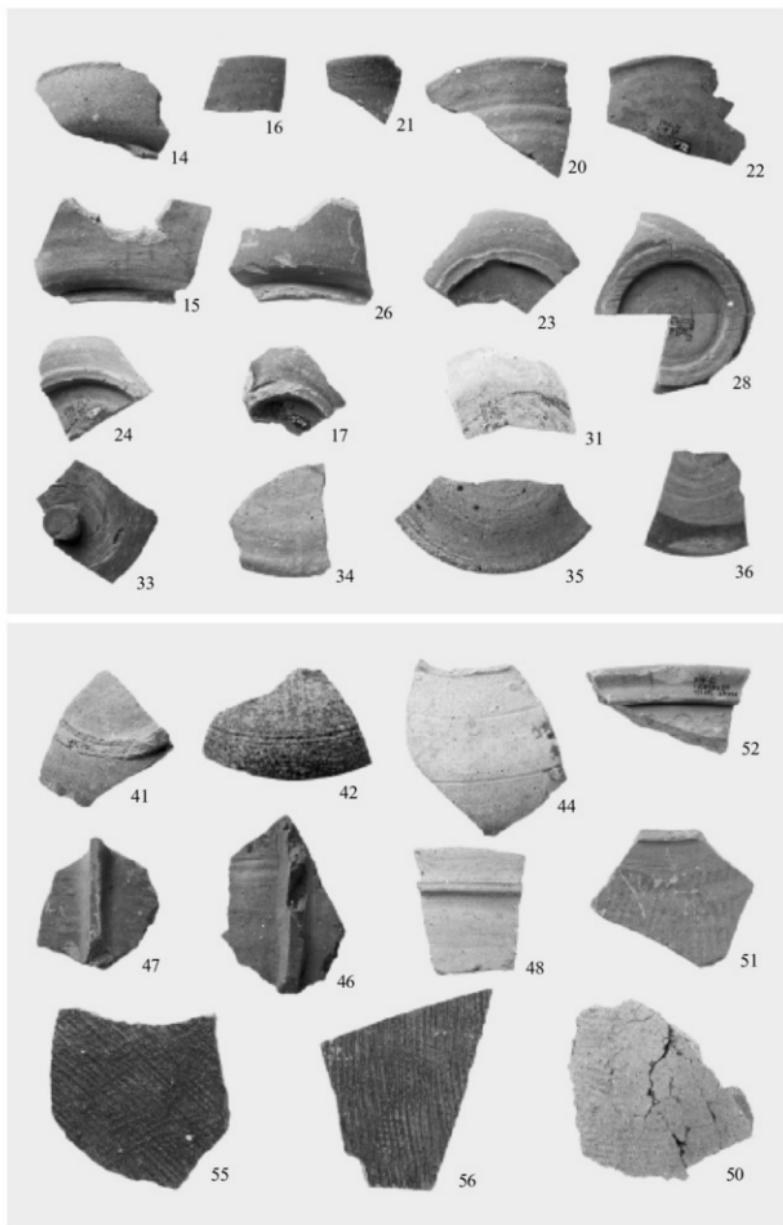
1. C1地区南半（北西から） 2. SI423（西から） 3. SI515（東から） 4. SE417（南から）
5. SE222（西から） 6. SE508（西から） 7. SE521（西から） 8. SE605（西から）

图版10



衍生土器・土師器

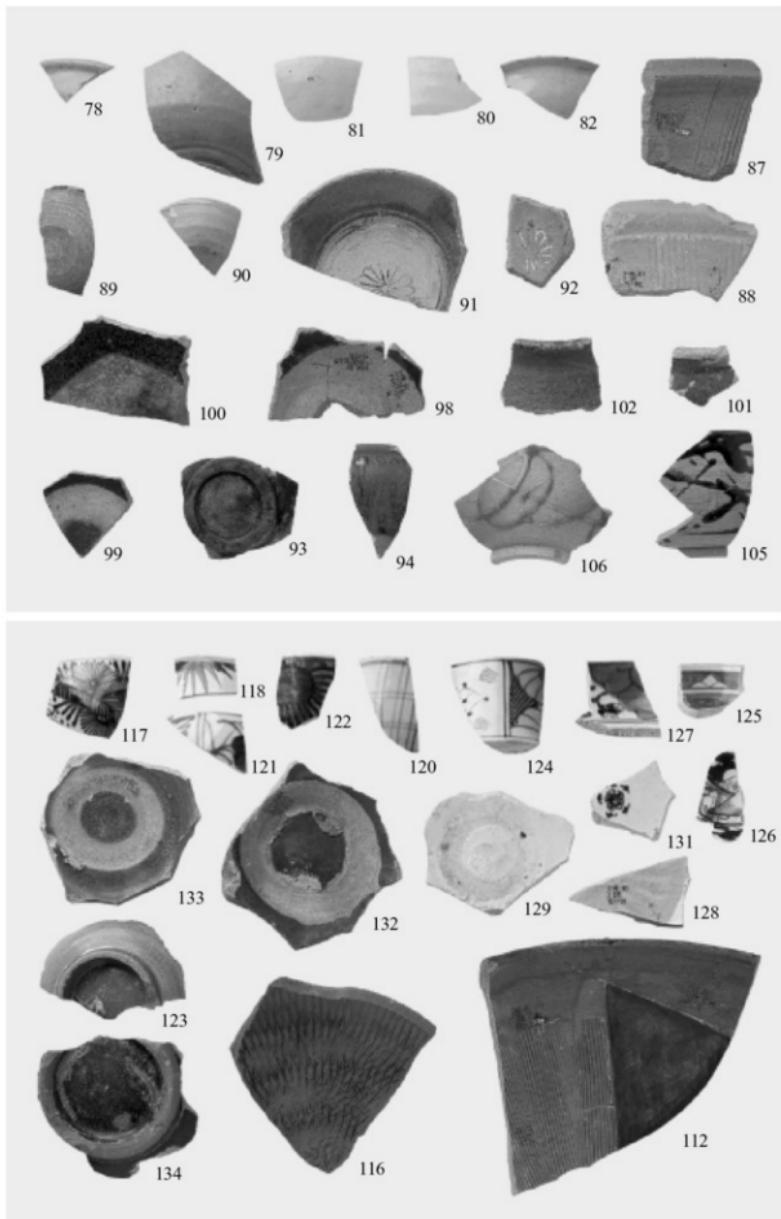
SD109 (61・72) SD201 (2・6・10) SD202 (67) SD251 (11・65) SD525 (3) SE222 (7)



須惠器

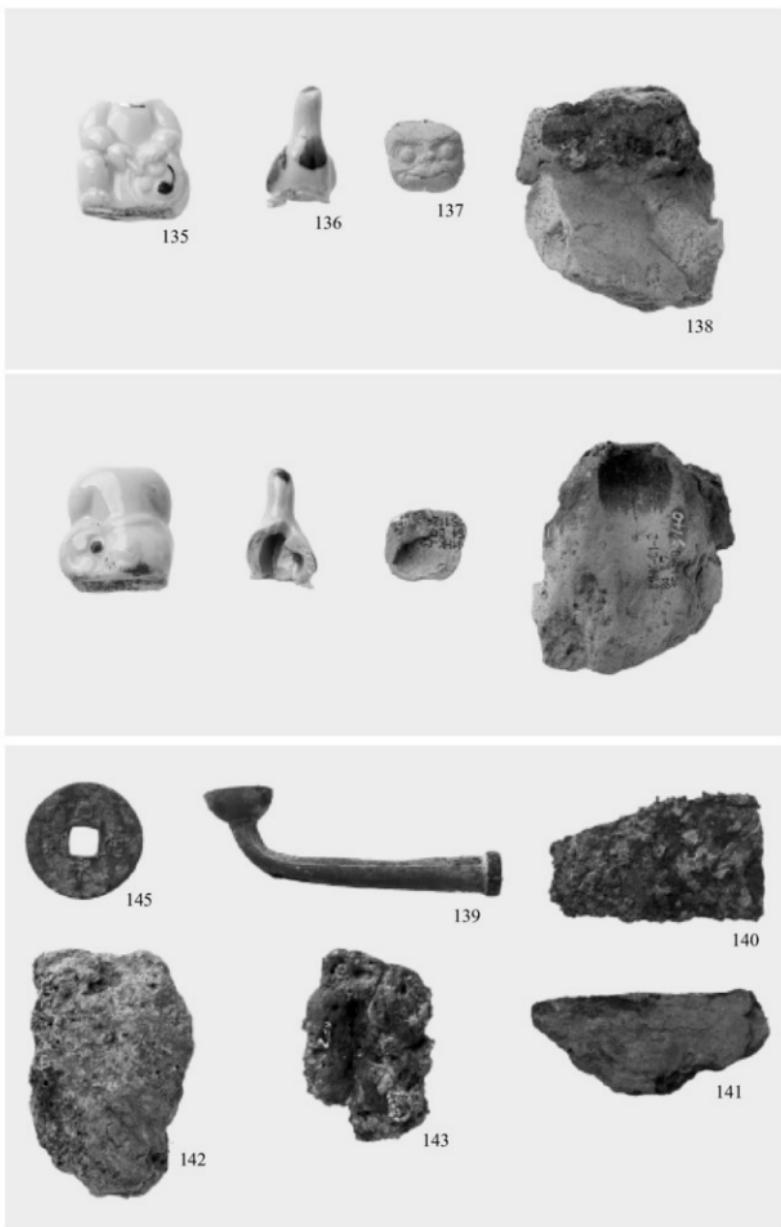
SD2 (28) SD201 (44・46) SD202 (20・47・52) SD527 (50) SI515 (17) SK1 (33)

图版12



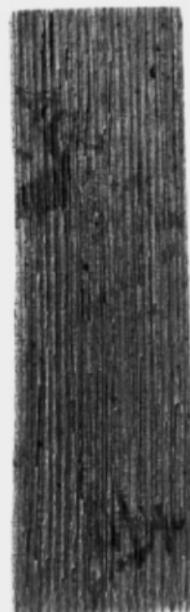
陶磁器

SD201 (112·126) SD202 (98) SK601 (105·122) SX402 (87) SX502 (118)



土製品・金属製品

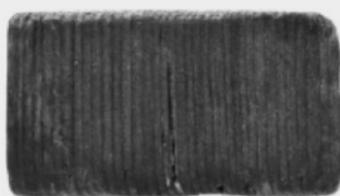
SD201 (135・145) SD407 (143) SX502 (140)



146



148



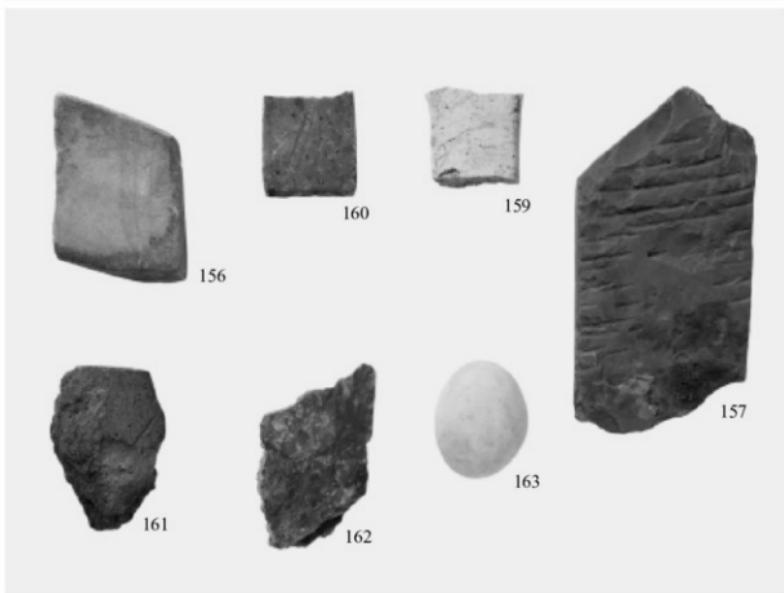
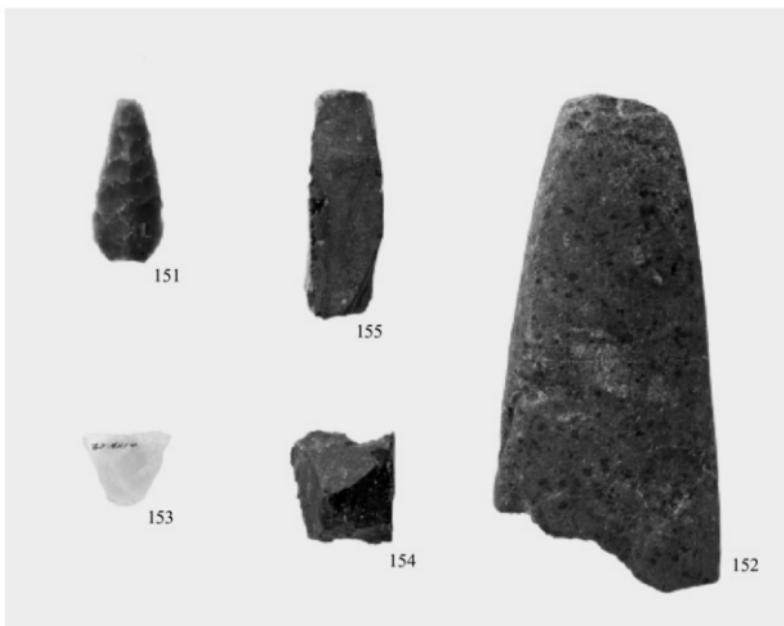
147



149



150



石製品

SD201 (157) SD202 (152) SD510 (153) SE508 (163) SX402 (161) SX502 (160)

報告書抄録

ふりがな	ひらえのきかめだいせきはくつちょうさほうこく						
書名	平樺龜田遺跡発掘調査報告						
副書名	県営農地整備事業平樺地区に伴う埋蔵文化財発掘報告						
巻次	I						
シリーズ名	富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第74集						
編著者名	金三津道子、朝田亜紀子						
編集機関	公益財團法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229						
発行年月日	西暦2017年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度分 東経 度分	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
平樺龜田遺跡	富山市 平樺	16201 201039	36度 44分 33秒	137度 16分 58秒	20161001～20161203	1,680	県営農地整備事業平樺地区に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平樺龜田遺跡	集落	古代	堅穴建物 柱穴列	2棟 1列	須恵器・土師器		
		古代以降	井戸 土坑 溝 廐	5基 95基 78条 1条	中世土師器、珠瑪、 中国製青磁、中國製 白磁、瀬戸美濃、越 中瀬戸、伊万里、唐 津、土製品、木製品、 石製品、金属製品	平樺城に関連する可能性の 高い遺跡を検出した。	

要約

平樺龜田遺跡は、常願寺川左岸の平野部に位置する。弥生時代の遺物も出土しているが、明確に伴う遺構ではなく、周辺からの流れ込みと考えられる。平樺龜田遺跡で、集落が営まれるようになるのは、堅穴建物が検出される古代になってからと考えられる。集落は、常願寺川の旧河道の間に立在する微高地など安定した土地を選んで形成されており、平樺龜田遺跡の南西部にあたり、現集落とはば重なる。中世の遺物は少ないが、遺跡周辺の平樺地区には、上杉謙信により天正元年に攻め落とされたと伝えられる「平樺城」があったとされており、今回の調査で検出した堀跡はこれに関連する可能性が高い。近世以降は、水路や旧水田の区画とみられる落ち込みが検出されており、集落周辺に水田地帯が広がっていたものと想定される。

2017(平成29)年3月1日 印刷
2017(平成29)年3月10日 発行

富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第74集

平樺龜田遺跡 発掘調査報告

-県営農地整備事業平樺地区に伴う埋蔵文化財発掘報告 I -

編集・発行 公益財團法人富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印刷 能登印刷株式会社 富山営業所
〒939-8064 富山県富山市赤田761-1
TEL 076-420-7030

